

長岡京跡・大藪遺跡

—工場建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—

長岡京跡・大藪遺跡

—工場建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—

株式会社
イビソク

株式会社 イビソク

長岡京跡・大藪遺跡

—工場建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—

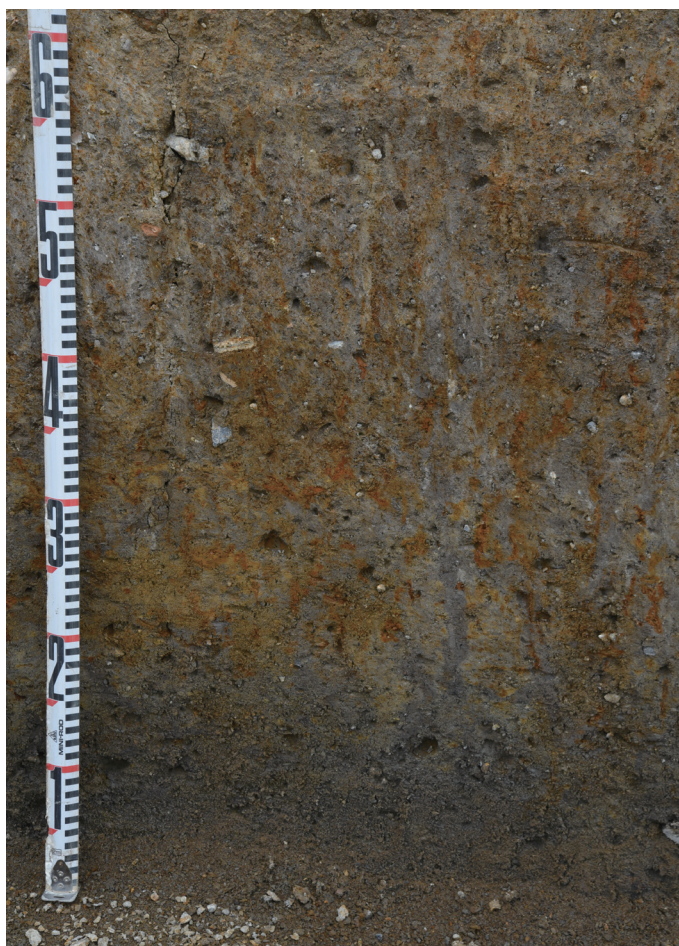
1. SI 2 炭化材検出状況

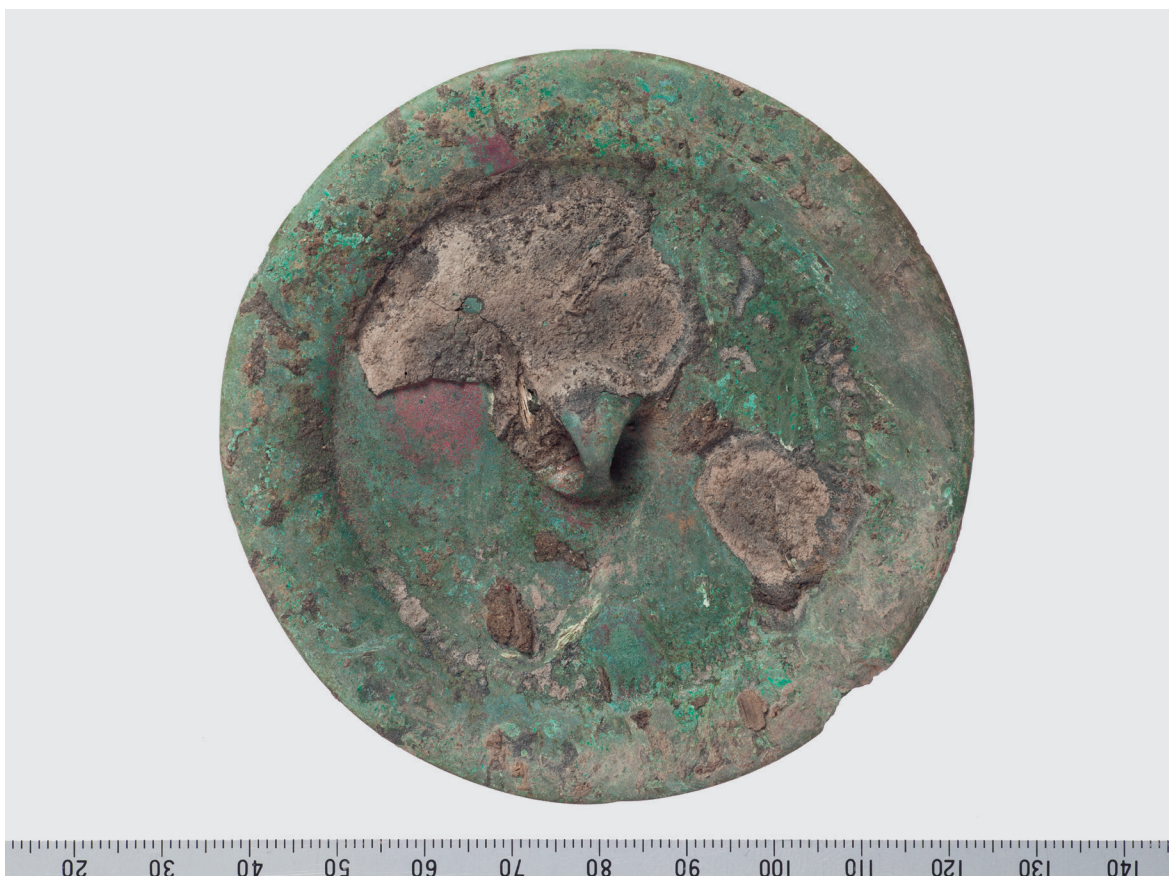


2. SI 4 炭化材検出状況



3. 第1区西壁の液状化現象 (SI 5)





1. 大藪遺跡出土の小型仿製鏡



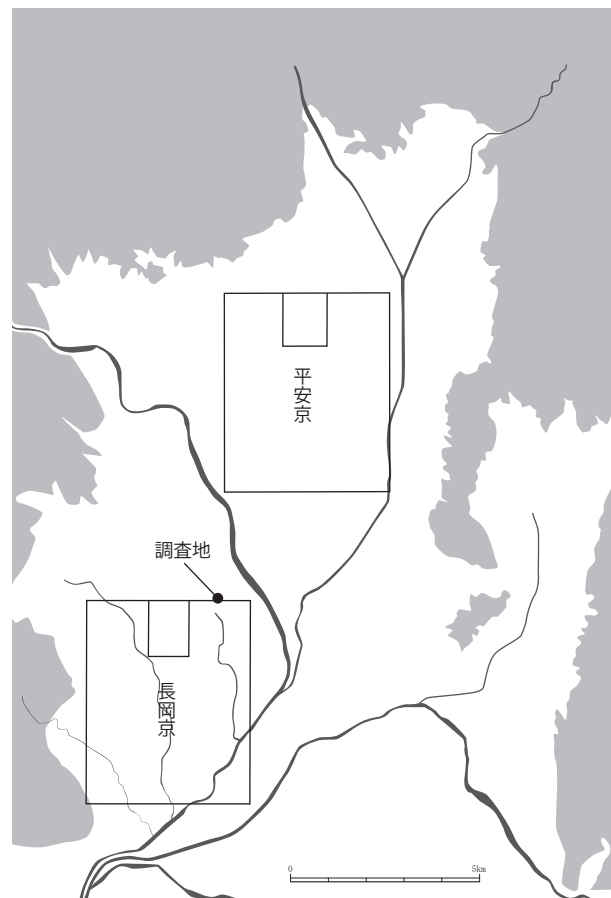
2. 小型仿製鏡鏡面の有機質付着状況

例 言

1. 本書は京都府京都市南区久世殿城町555番地内、久世大藪町358番地に所在する長岡京跡・大藪遺跡の発掘調査報告書である。
2. 本調査は、文化財保護法第93条第1項に基づき平成26年8月29日付けで届出された土木工事に伴い、平成26年11月12～14日に京都市文化市民局文化芸術都市推進室文化財保護課が試掘調査を実施した結果、長岡京跡・大藪遺跡に関連する遺構が検出されたため、同課により発掘調査の実施が指示されたものである。[京都市受付番号14NG288]
3. 本調査は、新本社及び工場建設に伴う事前調査として、株式会社ユーシン精機の委託を受けた株式会社イビソクが実施した。
4. 発掘調査は、平成27年4月20日から平成27年8月20日にかけて実施した。
5. 発掘調査は、京都府教育庁指導部文化財保護課、および京都市文化市民局文化芸術都市推進室文化財保護課の指導・助言の下、株式会社イビソクが実施した。
6. 発掘調査は次の体制で行った。
調査主体 株式会社イビソク
調査員 兼康保明・熊谷洋一・石井明日香
7. 本報告書の執筆分担は、以下の通りである。
第1章 熊谷洋一、第2章 第1節 熊谷、第2節 熊谷・小池智美、第3章 第1・2・4節 石井明日香、第3節 熊谷、第4章 第1節 石井、第2節 1・第3節 1 樋口杏奈、第2節 2・3・第3節 2 兼康保明、第2節 4 大上詩織、第2節 5 須山貴史、第5章 第1・2・6節 熊谷、第3～5節 兼康、付章 株式会社パレオ・ラボ、出土土器観察表 石井
8. 本報告書の編集は兼康保明・熊谷洋一が行った。
9. 本報告書では次に示した地図を調整・使用している。
都市計画基本図（1：2500）「久世」「寺戸」京都市都市計画局発行
10. 本報告書で使用している条坊復元図は、公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所から座標資料の提供をうけて作成した。
11. 本報告書で示す方位・座標は、国土座標第VI系（世界測地系）、水準値は東京湾平均海面（T.P.）に基づく数値である。
12. 本報告書に掲載した写真は、遺構写真を熊谷が、遺物写真を横山亮（オフィスメガネ）が撮影した。
13. 報告書作成にあたり、下記の方々及び関係機関のご指導、ご協力を得ることができた。
白井忠雄、菅谷文則、中塚良、森下章司（敬称略・五十音順）、公益財団法人益富地学会館
14. 出土遺物については、関連する図面・写真等の記録類と共に、京都市文化市民局文化芸術都市推進室文化財保護課にて保管している。

凡 例

1. 遺構・遺物写真の縮尺は任意である。
2. 遺構番号は調査面毎に検出順に割り当てた。その後、編集段階で遺構の性格を付与して表記した。
3. 出土遺構の計測値は、小数点以下第2位まで表記し、現存値には（ ）を付けて表現する。
4. 表で示した出土遺物の計測値は、残存値に []、復元値に（ ）を付けて表現する。
5. 遺物番号は、遺物実測図・観察表・遺物写真図版でそれぞれ対応している。
6. 本報告書で用いた土色は、農林水産省農林水産技術会議事務局監修『新版 標準土色帖』を使用した。



第1図 平安京・長岡京と調査地の位置

目 次

例言・凡例

目次・挿図目次・表目次・図版目次

第1章 調査の経緯	1
第1節 調査に至る経緯	
第2節 調査の経過	
第2章 位置と環境	3
第1節 地理的環境	
第2節 歴史的環境	
第3章 遺 構	7
第1節 基本層序	
第2節 遺構の概要	
第3節 第1区検出の遺構	
第4節 第2区検出の遺構	
第4章 遺 物	26
第1節 遺物の概要	
第2節 第1区の遺物	
第3節 第2区の遺物	
第5章 要 説	38
第1節 第1遺構面の遺構	
第2節 第2遺構面の遺構	
第3節 下層の遺物—弥生土器・古式土師器の年代	
第4節 小型仿製鏡をめぐって	
第5節 弥生時代祭祀の復元	
第6節 地震痕跡	
付 章 科学分析	50
第1節 出土木製品の樹種同定	
第2節 大型植物遺体	
第3節 小型仿製鏡付着物の材質分析	
第4節 小型仿製鏡の元素マッピング分析	
第5節 放射性炭素年代測定	
出土遺物観察表	
写真図版	
報告書抄録	

挿 図 目 次

第1図	平安京・長岡京と調査地の位置	
第2図	調査地位置図(縮尺1/15,000)	1
第3図	調査前風景(南から)	2
第4図	調査区配置図(縮尺1/1,500)	2
第5図	表層地質図	3
第6図	周辺調査位置図(縮尺1/5,000)	5
第7図	平成13年度調査大型掘立柱建物	6
第8図	調査区西壁断面図(縮尺1/100)	9・10
第9図	第1区第1・2遺構面全体図(縮尺1/250)	11
第10図	第2区第1遺構面(下面)・第2遺構面全体図(縮尺1/250)	12
第11図	第1区遺構図 SI1・2(縮尺1/100)、SK2241(縮尺1/20)	14
第12図	第1区遺構図 SI4～6(縮尺1/100)	16
第13図	第1区遺構図 SI3・7・8(縮尺1/100)	18
第14図	第1区遺構図 SK1～9(縮尺1/50)	20
第15図	第1区遺構図 SZ1(縮尺1/50)	21
第16図	小型仿製鏡埋納ピット(縮尺1/10)	22
第17図	第2区第1遺構面(上面)全体図(縮尺1/300)	23
第18図	第2区遺構図 SK1・4(縮尺1/50)	24
第19図	第1区出土土器実測図1(縮尺1/4)	28
第20図	第1区出土土器実測図2(縮尺1/4)	30
第21図	第1区出土土器実測図3(縮尺1/4)	32
第22図	第1区出土石製品・土製品実測図(縮尺1/2)	33
第23図	第1区出土木製品実測図(縮尺1/4)	35
第24図	小型仿製鏡実測図(縮尺1/2)	36
第25図	第2区出土土器実測図(縮尺1/4)	37
第26図	第2区出土石鏃実測図(縮尺1/2)	37
第27図	受口状口縁(縮尺1/3)	40
第28図	土製支脚の分布	41
第29図	淀川・猪名川水系出土の小型仿製鏡	43
第30図	木製品の光学顕微鏡写真1	53
第31図	木製品の光学顕微鏡写真2	54
第32図	SK5から出土した大型植物遺体	56
第33図	塗膜表面の赤外吸収スペクトル図	59
第34図	試料の付着状況と各試料の実体顕微鏡・電子顕微鏡写真	60

第35図	小型仿製鏡の元素マッピング図	63
第36図	暦年較正結果	65

表 目 次

第1表	周辺調査地一覧	6
第2表	遺構面年代対応表	8
第3表	遺構概要表	8
第4表	遺物概要表	26
第5表	木製品の樹種同定結果	50
第6表	木製品の樹種同定結果一覧	52
第7表	ヒョウタン仲間種子の大きさ	55
第8表	分析を行った試料とその詳細	57
第9表	付着物断面の点分析結果	58
第10表	生漆の赤外吸収位置とその強度	58
第11表	半定量分析結果	61
第12表	測定試料および処理	64
第13表	放射性炭素年代測定および暦年較正の結果	65
第14表	出土遺物観察表	67

図 版 目 次

巻頭図版一	1. SI 2 炭化材検出状況
	2. SI 4 炭化材検出状況
	3. 第1区西壁の液状化現象 (SI 5)
巻頭図版二	1. 大藪遺跡出土の小型仿製鏡
	2. 小型仿製鏡鏡面の有機質付着状況
図版一	1. 第1区第1遺構面 全景 (北から)
	2. 第1区第2遺構面 全景 (南から)
図版二	1. 第1区 SI 1・2 (東南から)
	2. 第1区 SI 3 (西南から)
図版三	1. 第1区 SI 4・5 (西から)
	2. 第1区 SI 4・5・6 (南から)
図版四	1. 第1区 SI 7 (東から)
	2. 第1区 SI 8 (東南から)
図版五	1. 第1区 SK 8 (東から)
	2. 第1区 SK 2 (北から)

- 図版六 1. 第1区 SK5 (東から)
2. 第1区 SK3 (南西から)
- 図版七 1. 第1区 SZ1 (西から)
2. 第1区 SX1 (南から)
- 図版八 1. 第1区 小型仿製鏡埋納ピット (東から)
2. 小型仿製鏡
- 図版九 1. 第2区第1遺構面 (上面) 全景 (南から)
2. 第2区第1遺構面 (下面) 全景 (南から)
- 図版十 1. 第2区第2遺構面 全景 (南から)
2. 第2区 SK5 遺物出土状況 (北から)
- 図版十一 1. 出土遺物 1
- 図版十二 1. 出土遺物 2
- 図版十三 1. 出土遺物 3
2. 出土遺物 4
- 図版十四 1. 出土遺物 5
- 図版十五 1. 出土遺物 6
- 図版十六 1. 出土石製品
2. 出土木製品

第1章 調査の経緯

第1節 調査に至る経緯

調査は株式会社ユーシン精機本社ビル及び工場建設に伴う発掘調査である。調査地は、京都府京都市南区久世殿城町 555 番地、久世大藪町 358 番地に所在し、長岡京跡（遺跡番号 3）・大藪遺跡（同 773）に該当する。同社は京都市文化市民局文化芸術都市推進室文化財保護課（以下「京都市文化財保護課」という）へ、平成 26 年 8 月 29 日付で文化財保護法第 93 条第 1 項に基づく届出を行った。京都市文化財保護課はこれを受け、平成 26 年 11 月 12 ～ 14 日に試掘調査を実施したところ、当該地に弥生時代後期の遺物包含層、長岡京期の東三坊坊間小路東側溝を延長した溝等が確認された（受付番号 14 NG 288）。協議の結果、計画建物の基礎形状を変更し、遺構面の大半は地中保存が図られた。しかし掘削深度の深いピット部分については、遺構面に影響が及ぶため、発掘調査の指導を行った。これを受けて、株式会社ユーシン精機から発掘調査の委託を受けた株式会社イビソクが、京都市文化財保護課の指導の下、実施することになった。株式会社イビソクは、文化財保護法 92 条に基づき京都府教育委員会に埋蔵文化財発掘調査の届出をし、許可されたので平成 27 年 4 月 20 日より調査を開始した。



第2図 調査地位置図（縮尺 1/15,000）

第2節 調査の経過

発掘調査は、平成27年4月20日から平成27年8月20日まで実施した。京都市文化財保護課の指導・監督の下、調査区域を設定し（第4図）、バックホウにより近代以降の堆積層の除去作業を行った。調査地は敷地東側を第1区とし、東西15m×南北52m（780㎡）の調査区を、敷地西側を第2区として、東西11m×南北35.5m（390.5㎡）の調査区を設定し、調査面積は計1170.5㎡となった。当初、第1区より発掘調査を開始したが、途中、工事の都合で第2区も並行して進めた。調査の手順は、次のとおりである。近代以降の堆積層および造成以前の水田床土までを機械掘削した後、遺構検出面を精査して遺構検出を行った。

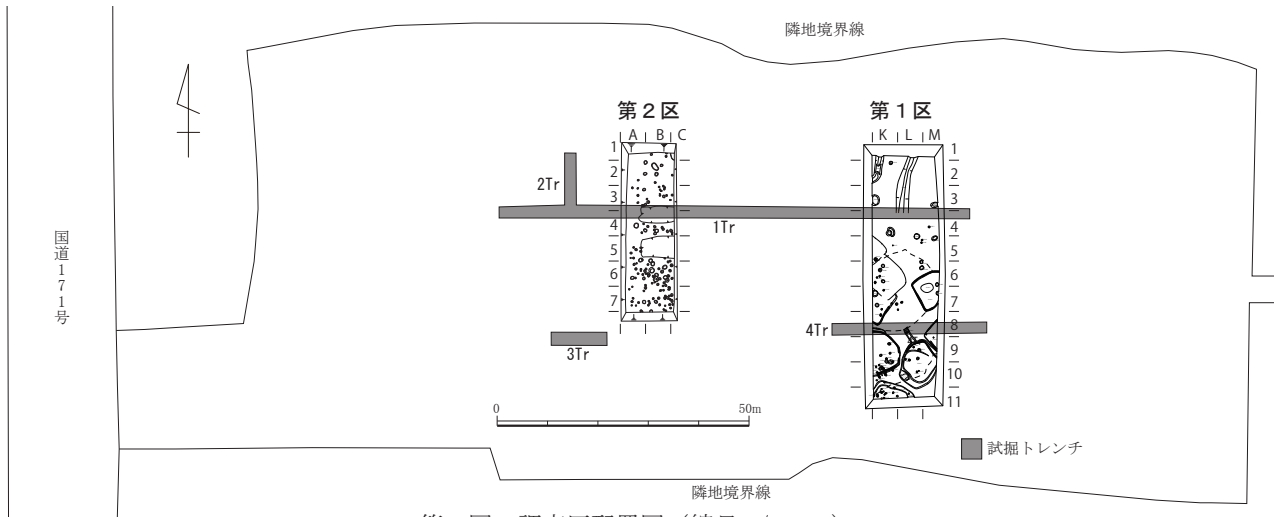
第1遺構面は、長岡京期から中世の遺構が検出され、なかでも平安時代後期から鎌倉時代と推定される小溝が大半であった。第2遺構面は第1区では弥生時代後期から古墳時代中期の住居などの遺構が、第2区では古墳時代、奈良時代の遺物を含む土坑などが発掘された。この間、それぞれの遺構面の検出時、完掘時に、京都市文化財保護課の検査を受けた。

遺構検出と並行して、遺構配置図を作成し、遺構の配置や重複する遺構の先後関係などの把握に努めた。遺構の記録作業は、土層断面図などを手実測で行い、必要に応じてトータルステーションを用いて遺構平面実測を行い図化した。また各遺構の情報（種類、位置、成果等）および作業状況を記述した台帳を作成した。なお遺構の位置関係と遺物の取り上げのため、調査区に合わせて東西方向に西からAからN、南北方向に1から7までの5mグリッドを設定した。

遺構土層断面図と遺物実測図は、デジタルトレースを行い、現場計測図面と合わせて編集を行った。編集に伴って、各遺構を検討し、遺構の性格を判断していった。出土した遺物は、洗浄、注記、接合ののちにランク分けを行い、実測対象遺物を抽出した。報告書掲載遺物は、掲載順にコンテナに収納し、非掲載遺物は、遺構番号順にコンテナに収納した。



第3図 調査前風景（南から）



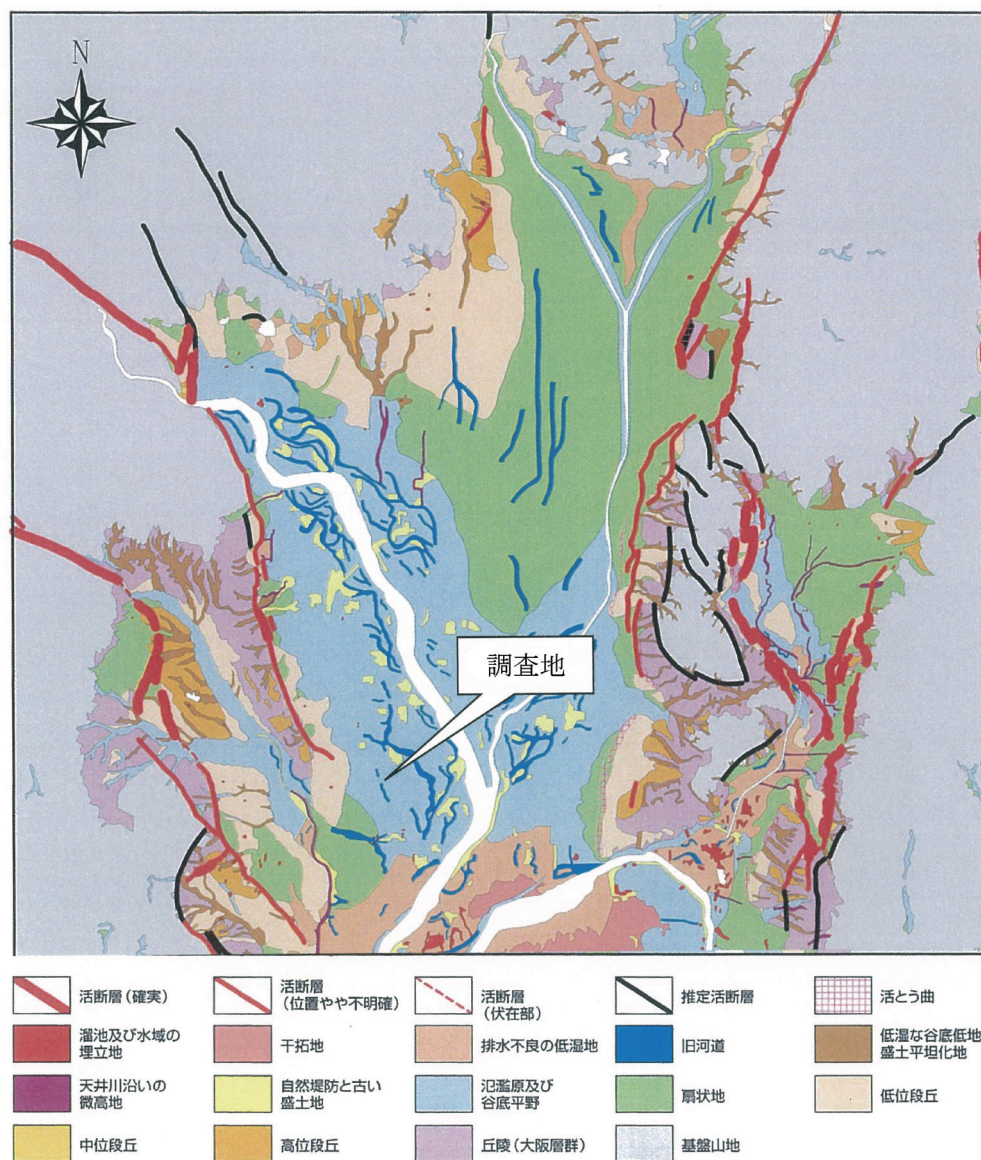
第4図 調査区配置図（縮尺1/1,500）

第2章 位置と環境

第1節 地理的環境

本遺跡は、京都盆地南西部の京都市南区と向日市の境界付近にあたる。JR 東海道線向日町駅から東南東へ約 780m の地点に位置する。

遺跡周辺の地形を概観すると、京都盆地南西部から東に向かって向日丘陵、台地、沖積低地で、桂川に至る。桂川は、上流部に亀岡盆地が存在するため、明瞭に扇状地を発達させていないが、向日丘陵から桂川に多くの小河川が流入し複合的な扇状地を形成しこれらの堆積物の影響を受け、桂川によって形成された沖積平野には、後背湿地や低い微高地が複雑に点在している。大藪遺跡は微高地から後背湿地に移る地点にあり地形分類的には、谷底平野あるいは沖積平野に分類される。



第5図 表層地質図

第2節 歴史的環境

今回の調査地の周辺には弥生時代から古墳時代の遺跡が多く分布しており、調査地は大藪遺跡の範囲に当たる。また調査地南側は、わずかに長岡京の範囲に含まれる。

大藪遺跡は弥生時代から古墳時代にかけての遺跡で、昭和47年の調査以来現在まで調査が行われてきた。以下、これまでの大藪遺跡の調査を概観する。

昭和47年(1972)に最初の調査が行われた。北東から南西方向に走る溝状流れと杭列が検出された。杭列は、十数回の打ち替えと複数列の存在が確認されている。初現期を奈良時代の中頃としている。(1)

昭和54年(1979)の調査では、弥生時代のピットと溝状の遺構が検出されているほか、中世では溝が5条検出されている。(2)

昭和55年(1980)調査では、杭列を伴う弥生時代中期の溝、長岡京期～平安時代前期の東西方向の溝、平安時代後期～室町時代の建物跡、井戸、土坑等が検出されている。

昭和56年(1981)の調査では、弥生時代の流路と思われるもの、長岡京期遺物包含層が確認されている。(3)

昭和58年(1983)の調査では、流路と3列の杭列が検出されている。全面の杭列は、護岸で、残りに2列はしがらみとしての機能をもつものと考えられている。出土遺物、層位から奈良時代の遺構と考えられている。(4)

昭和60年(1985)の調査では、流路と杭列が検出され、杭列の構造が明確にされている。(5)

昭和62年(1987)の調査では、弥生時代後期の竪穴住居跡、南北方向に延びる流路と杭列、鎌倉時代の濠跡が検出されている。出土遺物は、竪穴住居跡から弥生土器の高杯、壺、甕、鉢、石鏃等が出土している。出土土器は、第V様式の範疇に収まると考えられている。(7)

昭和63年(1988)の調査では、中世～江戸時代の建物跡、井戸、溝、土坑等が検出されている。弥生時代、古墳時代の集落跡は、確認されていないが、中世～江戸時代に至る長期にわたる集落は確認されている。(8)

平成2年(1990)の調査では、弥生時代、古墳時代、長岡京期、中近世の遺構が検出されている。弥生時代後期から古墳時代にかけて、居住空間と墓域空間の入れ替わりが繰り返されていた。また、濠が検出された。濠からは、出土遺物全体の60%の割合で第V様式の土器が多量に出土している。長岡京期では、大型の総柱建物が検出されている。中近世では、室町時代の遺構としては、多数の小溝群が検出された。江戸時代遺構として、土坑墓、土坑、溝が検出されている。(10)

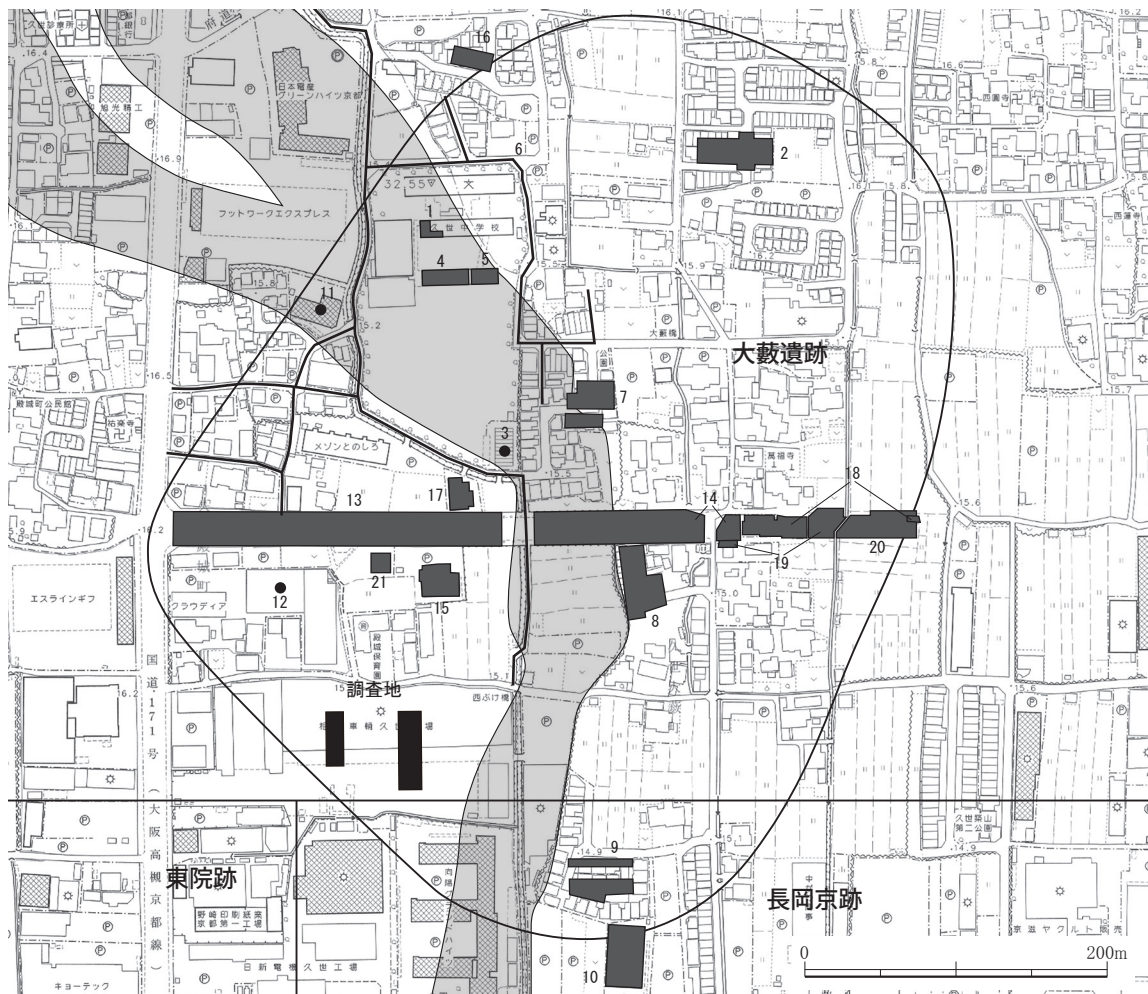
平成10年(1998)の調査では、弥生時代の河川跡、湾曲しながら北から南東に延びる溝、南西方向に延びる溝、大型の竪穴住居跡、円形の竪穴住居跡2棟、方形周溝墓が検出されている。大型の竪穴住居跡は、隅丸方形で、床面積102㎡があり、支柱穴には、30cmの柱痕が確認されている。長岡京期の遺構は、柵、掘立柱建物跡、井戸、溝等が検出されている。溝は、南北方向で、建物、柵との位置関係から道路の側溝と考えられている。平安時代後期の遺構は井戸、南流する溝が検出されている。室町時代の遺構は、複雑に屈曲する堀が2条検出され、堀の間に礎石建物が検出されている。2条の堀は、内堀と外堀、礎石建物は、門と考えられている。(13)

平成 11 年 (1999) の調査では、平成 10 年の調査に引き続き、その東側で行われた。弥生時代後期の遺構は、円形の竪穴住居跡、2 箇所のピット群が検出されている。住居跡は、直径が 7 m 前後で、床面からは炭化木材と焼土が認められ、焼失家屋と考えられている。2 ヲ所のピット群は、上部の削平された住居跡の可能性が指摘されている。平安時代の遺構は、土坑が検出されている。形状から井戸の可能性が考えられている。鎌倉時代～室町時代の遺構は、掘立柱建物跡、柵、井戸、溝、堀が検出されている。近世の遺構は、ピット、土坑、井戸が検出されている。また、河川とそれに伴うしがらみ状の遺構が検出されており、河川からは最下層から縄文時代後期・晩期の土器が出土し、上層からは、平安時代中期の遺物が出土する。(14)

平成 13 年 (2001) の調査では、弥生時代後期の屋内に棟持柱をもつ大型掘立柱建物が検出され、高殿・祭殿の可能性が指摘されている。また、京域外ではあるが長岡京期の掘立柱建物 3 棟、素掘り溝 4 条等が検出されている。(15)

平成 18 年 (2006) の調査では、弥生時代の方形周溝墓が検出され後期の土器が出土している。平安時代では、土坑が検出され、土師器、須恵器、灰・緑釉陶器、白磁などが出土している。(16)

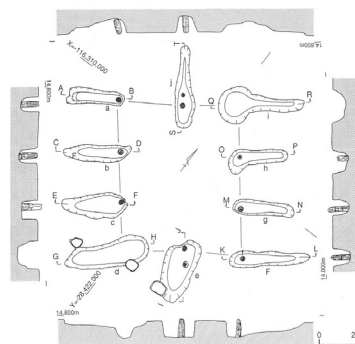
2010 年から 2011 年にかけて、近接地で続けて 3 件の発掘調査が行われており、3 回目の調査では、縄文時代の遺構が検出されている。長岡京期の南北方向に並行する溝は、心々距離が長岡京東四坊坊間小路の路面幅に相当すると報告されている。室町時代では、大藪城の堀に相当する



第 6 図 周辺調査位置図 (縮尺 1/5,000)

溝及び建物等が検出された。(18～20)

また、今回の調査に先立つ京都市文化財保護課による試掘調査では、第2区より西側で長岡京東三坊坊間小路の東側溝の延長線上に当たる溝が検出されている。



第7図 平成13年度調査
大型掘立柱建物

第1表 周辺調査地一覧

番号	調査	概要	文献
1	発掘	弥生～鎌倉時代の溝状流れ・杭列、奈良時代～長岡京期の祭祀遺構を検出。弥生土器、古墳時代の土師器・須恵器、奈良時代～長岡京期の土器類・人面土器・土馬・馬の骨、平安～鎌倉時代の土器類等が出土。	『大敷遺跡発掘調査報告』1972 六勝寺研究会
2	発掘	弥生時代のビット・溝状遺構を検出。弥生土器が出土。	『大敷遺跡発掘調査概要』昭和55年度 京都市埋蔵文化財センター
3	発掘	弥生時代の流路、長岡京期の包含層を検出。弥生時代～古墳時代の土器、長岡京期の土師器・須恵器・瓦が出土。	『昭和56年度 京都市埋蔵文化財調査概要(発掘調査編)』財団法人京都市埋蔵文化財研究所
4	発掘	奈良時代の流路・3列の杭列を検出。縄文土器、弥生土器、古墳時代の土師器、奈良～平安時代の土師器・人面土器・瓦等が出土。	『昭和58年度 京都市埋蔵文化財調査概要』財団法人京都市埋蔵文化財研究所
5	発掘	時期不明の流路・杭列を検出。弥生土器、平安時代の墨書土器・木製品等が出土。	『昭和60年度 京都市埋蔵文化財調査概要』財団法人京都市埋蔵文化財研究所
6	立会	弥生時代～平安時代の流路(奈良時代に杭列による護岸)、弥生時代の溝、土坑、平安時代・鎌倉時代の溝を検出。弥生土器、奈良時代以降の土師器・須恵器・製塩土器・緑釉陶器が出土。	『昭和62年度 京都市埋蔵文化財調査概要』財団法人京都市埋蔵文化財研究所
7	発掘	弥生時代後期の堅穴住居跡・流路・杭列、鎌倉時代の濠跡を検出。弥生土器、古墳時代の土師器・須恵器、奈良時代の土師器・須恵器・木製品、鎌倉・室町時代の土器類が出土。	『大敷遺跡発掘調査概要』昭和62年度 京都市文化観光局
8	発掘	中世～江戸時代の建物跡・井戸・溝・土坑等を検出。鎌倉時代の土器類、室町時代の土器類・金属製品、桃山～江戸時代の土器類・金属製品が出土。	『長岡京跡・大敷遺跡発掘調査概要』昭和63年度 京都市文化観光局
9	発掘	弥生時代～古墳時代の堅穴住居跡15棟、水路1条、飛鳥時代～奈良時代の掘立柱建物跡3棟以上検出。	『長岡京跡・中久世・大敷遺跡—発掘調査現地説明会資料—』1988 財団法人京都市埋蔵文化財研究所
10	発掘	弥生時代後期の堅穴住居跡・方形周溝墓・濠、古墳時代の堅穴住居跡・掘立柱建物・土壇墓、長岡京期の総柱建物、鎌倉～室町時代の土坑・溝、江戸時代の土壇墓・土坑・溝等を検出。弥生土器、古墳時代・長岡京期の土師器・須恵器、鎌倉～江戸時代の土器類等が出土。	『平成元年度 京都市埋蔵文化財調査概要』財団法人京都市埋蔵文化財研究所
11	試掘	弥生時代～古墳時代の遺物包含層。	『京都市市内遺跡試掘調査概要』平成5年度 京都市文化観光局
12	試掘	弥生時代の湿地状堆積。	『京都市市内遺跡試掘調査概要』平成10年度 京都市文化市民局
13	発掘	弥生時代の堅穴住居跡・方形周溝墓・溝、長岡京期の掘立柱建物・井戸・柵・溝、平安時代の井戸・溝、室町時代の建物跡・井戸・堀、江戸時代の井戸・溝等を検出。弥生時代の弥生土器・石器・ガラス小玉、長岡京期の土師器・須恵器・木製品、平安時代の土器類・木製品、江戸時代の土器類・木製品が出土。	『平成10年度 京都市埋蔵文化財調査概要』財団法人京都市埋蔵文化財研究所
14	発掘	弥生時代の堅穴住居、平安時代の土坑、鎌倉～室町時代・桃山～江戸時代の掘立柱建物・井戸・土坑・堀・溝等を検出。縄文土器、弥生土器、古墳時代の土師器・須恵器、奈良時代の土師器・須恵器・瓦、平安～江戸の各時代の土器類等が出土。	『平成11年度 京都市埋蔵文化財調査概要』財団法人京都市埋蔵文化財研究所
15	発掘	長岡京期の掘立柱建物3棟、素掘り溝4条、柱穴多数検出。弥生時代の大型掘立柱建物1棟、土坑1基検出。	『大敷遺跡発掘調査報告書』2002 大敷遺跡発掘調査団
16	発掘	弥生時代の方形周溝墓、平安時代の土壇・溝、室町時代以降の溝・建物等を検出。弥生土器、平安時代の土器類、室町時代の土器類が出土。	『京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告2006-19 中久世遺跡・大敷遺跡』(財団法人京都市埋蔵文化財研究所)
17	発掘	弥生時代後期の堅穴住居、溝、平安時代後期～鎌倉時代の柱穴、室町時代の掘立柱建物跡、溝等を検出。弥生土器、石器、室町時代の土師器、瓦器等が出土。	『京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告2006-32 大敷遺跡』(財団法人京都市埋蔵文化財研究所)
18	発掘	長岡京期の土坑、室町時代の掘立柱建物・柵・柱穴・溝・土坑・水田・畦溝、江戸時代後期の整地層・耕作溝・井戸・土坑・柱穴等を検出。弥生時代の石刀、古墳時代の須恵器、長岡京期の土師器・須恵器・瓦、平安時代の土師器・須恵器・瓦、室町時代～江戸時代の土師器・施釉陶器・焼締陶器・木製品・金属製品・石製品等が出土。	『京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告2010-9 大敷遺跡・大敷城跡』(財団法人京都市埋蔵文化財研究所)
19	発掘	室町時代の掘立柱建物・門・柵・井戸・柱穴等大敷城関連遺構、江戸時代の耕作溝・溝・柱穴・土坑等を検出。弥生時代の石鏃未成品、長岡京期の土師器・須恵器、室町～江戸時代の土器類が出土。	『京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告2010-13 大敷遺跡・大敷城跡』(財団法人京都市埋蔵文化財研究所)
20	発掘	縄文時代の土坑、長岡京期の溝・井戸、室町時代の建物・柵・区画溝・井戸・土坑・柱穴等を検出。縄文土器、長岡京期～平安時代の土師器・須恵器、室町時代の土師器・瓦器・焼締陶器・施釉陶器・輸入陶磁器・銭貨等が出土。	『京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告2010-18 大敷遺跡』(財団法人京都市埋蔵文化財研究所)
21	発掘	弥生時代の掘立柱建物・溝・落込み、室町時代の溝・柵を検出。弥生時代の弥生土器・柱材、室町時代の土師器・須恵器・瓦器・磁器等が出土。	『京都市内遺跡発掘調査報告 平成24年度』京都市文化市民局

第3章 遺構

第1節 基本層序

調査開始前の当該地は、過去に建物が建っていた範囲で、調査前にはすでに空き地となっていたため、建物解体後の更地の状態から調査を行った。

現地表面から1.4 m程下層までは現代の造成土である。造成土を除去すると、造成以前の耕作土層と床土が計20cm程の厚さで残存する。

今回の調査では東を第1区、西を第2区として調査したが、床土より下層は少し様相が違うため、以下、調査区ごとに分けて記載する。

第1区

床土より下層は、大きく2層に分層できる。また、出土遺物の年代と合わせても2時期確認できることから1区は2面調査を行った。

1層は、鉄分を多く含む黄灰色砂質土である。この1層目の上面を第1遺構面とし、溝状遺構を検出した。

2層は、マンガンを非常に多く含む、にぶい黄褐色砂質土の層である。この2層目の上面を第2遺構面とした。この第2遺構面から弥生時後期後半から古墳時代中期までの遺構・遺物を確認した。

また、第2遺構面において、調査区中央付近で層位が安定せず撓んでいるような状況が見られ、一部では液状化現象の痕跡を確認した。調査区北側において地形は再び緩やかに上り、第1区北西端では、暗灰黄色砂質土の上面で方形周溝墓の溝や土坑を確認した。

第2区では、長岡京期の遺構・遺物が確認されているが、第1区では方形周溝墓付近の包含層の一部で遺物が出土したのみである。

第2区

床土より下層は、大きく3層に分けられることから、2区では3面調査を行った。

1層目は灰黄色砂泥である。この1層目の上面を第1遺構面（上面）とした。しまりがやや強く、上層の影響も受けて撓むところが数か所確認できる。

2層目はしまりの強い灰黄褐色泥砂である。この2層目の上面を第1遺構面（下面）とした。特に北半ではしまりがかなり強く、格子状の溝とピットを多く検出した。この面からは長岡京期の遺物を確認している。

3層目は褐灰色砂質土にこぶし大の礫を多く含む砂礫層である。この層の上面を第2遺構面とした。3層目の南端と北端では、砂礫層からなだらかに下がる黄灰～暗灰黄色の砂泥の包含層が確認できる。この面で確認できる遺構は主にピットで、一部古墳時代の土師器等を含む。また、調査区北側で1区の下層で確認した明青灰色に近い砂泥が流線状に広がることから流路が広がっていた可能性も考えられる。

第2節 遺構の概要

発掘調査では、弥生時代の竪穴建物から、近代の排水溝などの遺構を確認した。検出した遺構は、溝、土坑、ピット、杭列などで、遺構総数は約660基である。

調査区は、第1区（東側調査区）と第2区（西側調査区）の2箇所に分かれており、第1区では第1遺構面～第2遺構面まで、第2区では第1遺構面（上・下面）～第2遺構面までを確認した。

各遺構面の対応関係は以下のとおりである（第2表）。

第2表 遺構面年代対応表

時代	第1区	第2区
中世・近代		第1遺構面（上面）
長岡京～中世	第1遺構面	第1遺構面（下面）
弥生時代～古墳時代	第2遺構面	第2遺構面

以下、各時代の主要な遺構についての概要を記す。

第2区第1遺構面（上面）では近代の溝や、中世頃と思われる土坑・溝を確認した。

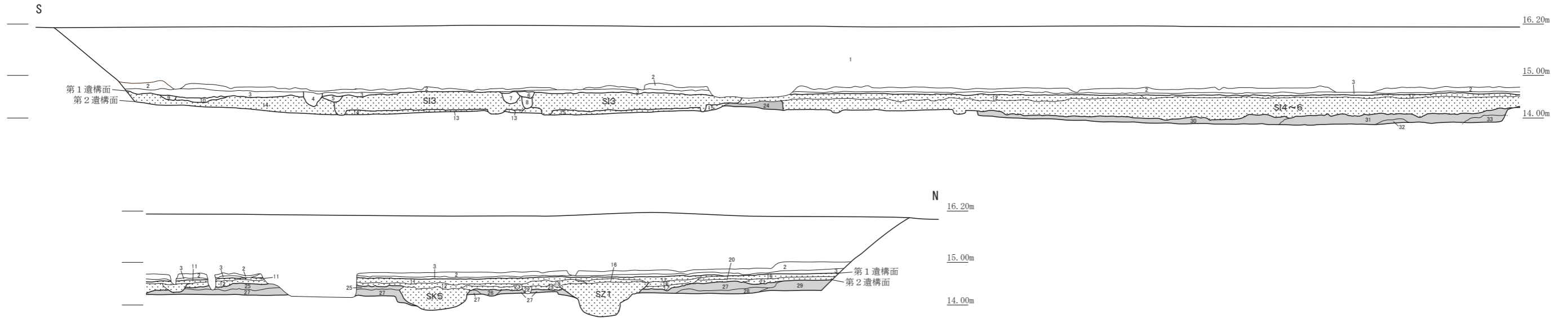
第1区第1遺構面、第2区第1遺構面（下面）では長岡京期の土坑や溝、包含層、中世の溝などを確認した。長岡京期のものは多くはないが、中世と思われる遺構は第1区の溝をはじめ、第2区を東西南北に貫く格子状の溝や土坑などがあげられる。

第1区・第2区第2遺構面では弥生時代から古墳時代にかけての竪穴建物や土坑、ピットを検出した。一部は地震の影響をうけて原型をとどめていないが、建物は複数時期が確認できる。また、後述するように鏡の埋納ピットなどは周辺の調査でもあるように祭祀に関するものと考えられる。

第3表 遺構概要表

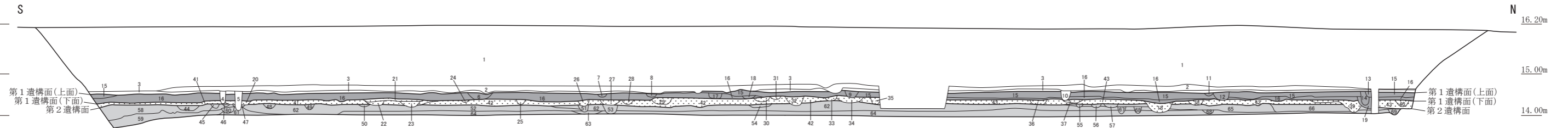
時代	遺構
中世・近代 (第2区第1遺構面上面)	溝 1198・1199・1221・1230 (近代の湿気抜き) 溝 1222・1224・1228・1229 (中世) 土坑 ピット
長岡京～中世 (第1区第1遺構面 第2区第1遺構面下面)	溝 1001～1036 (第1区) 溝 2009・2011・2025～2027 他、格子状の溝 (第2区) 土坑 1038・2024・2098 ほか
弥生～古墳時代 (第1区第2遺構面 第2区第2遺構面)	竪穴建物 8基 土坑 SK 1～6 (第1区)、SK 4 (第2区) 銅鏡埋納ピット 1171 方形周溝墓 SZ 1 杭列 SA 1

第1区西壁土層図



- | | | |
|---|---------------------------------------|----------------------------------|
| 1 表土 | 16 灰白色砂質土 マンガン斑多く含む しまり・粘性あり | 31 灰白色砂質土 マンガン斑微量含む 径2~3cm大の小礫含む |
| 2 灰褐色土 (耕作土) | 17 灰粘質土 マンガン斑含む やや砂質帯びる しまりあり | 32 灰色砂質土 マンガン斑少量含む 粒子粗い |
| 3 灰黄色砂質土 マンガン斑・径1cm前後の小礫少量含む 粘性ややあり(床土) | 18 灰粘質土 マンガン斑少量含む 棒状に灰白色砂ブロック含む しまりあり | 33 灰白色砂礫 しまり弱い |
| 4 灰褐色砂質土 マンガン斑あり しまり強い | 19 灰色砂質土 マンガン斑含む しまり強い 粘性ややあり | |
| 5 灰黄褐色砂質土 しまり・粘性あり | 20 灰色砂質土 径1~2cmの小礫極少量含む しまり・粘性あり | |
| 6 灰黄色粘質土 しまり強い | 21 灰粘質土 マンガン斑多く含む しまりあり | |
| 7 灰褐色砂質土 マンガン斑含む しまりあり | 22 黄灰色粘質土 細かい砂粒多く含む 粘性強い | |
| 8 褐灰色砂質土 しまり・粘性あり | 23 暗灰色砂質土 マンガン斑含む しまりややあり | |
| 9 黄褐色砂質土 しまりややあり | 24 灰白色砂礫 灰白色シルトブロック含む しまりややあり | |
| 10 黄褐色砂質土 径2cm前後の礫やや多く含む しまり弱い | 25 暗灰色砂質土 マンガン斑含む しまりややあり | |
| 11 灰色砂質土 径1cm前後の小礫・マンガン斑含む しまりあり | 26 灰色砂質土 マンガン斑少量含む 径2~3cm大の小礫極少量含む | |
| 12 灰白色砂質土 径1cm前後の小礫・マンガン斑含む 粘性あり | 27 灰白色砂質土 マンガン斑微量含む 径2~3cm大の小礫含む | |
| 13 灰色砂質土 径2cm前後の小礫多く含む しまりあり | 28 灰色砂質土 マンガン斑やや多く含む | |
| 14 黄褐色砂質土 棒状の灰白色砂質土が樹枝状に多く入る 色調やや暗い | 29 灰色砂質土 マンガン斑やや多く含む やや粒子粗い | |
| 15 灰色砂質土 | 30 灰白色砂質土 径2~5cm大の礫多く含む しまりあり | |

第2区西壁土層図



- | | | | | |
|-----------------------|-------------------------|-----------------------------|---------------------|--------------------|
| 1 表土 | 16 灰黄褐色粘土 しまり強い | 31 黄褐色粘土 | 46 褐灰色砂泥 しまりあり | 61 黒色砂礫 粗い砂粒含む |
| 2 黒褐色泥土 しまりあり (耕作土) | 17 灰黄褐色粘土 | 32 黄褐色粘質土 粗い砂礫含む | 47 褐灰色砂泥 しまりあり | 62 黄灰色砂質土 粗い砂礫含む |
| 3 灰黄色砂質土 しまり強い (床土) | 18 灰黄色砂質土 やや粗い砂粒含む | 33 黄灰色粘質土 しまりあり | 48 褐灰色砂質土 やや粗い砂粒含む | 63 黄灰色砂質土 粗い砂粒含む |
| 4 褐灰色粘土 しまり強い | 19 褐灰色粘土 細かい砂粒含む | 34 にぶい黄色粘質土 しまりややあり 細かい砂粒含む | 49 黒褐色粘質土 粗い砂粒含む | 64 黄灰色砂礫 |
| 5 褐灰色粘土しまり強い (溝1230) | 20 灰褐色砂質土 しまりあり | 35 褐灰色粘土 しまり強い | 50 褐灰色砂質土 | 65 黄灰色泥砂 しまりあり |
| 6 灰黄色粘質土 | 21 灰黄褐色粘質土 しまりあり | 36 褐灰色砂質土 しまりあり 細かい砂粒含む | 51 褐灰色砂質土 やや粗い砂粒含む | 66 灰オリーブ色砂泥 しまりあり |
| 7 黄褐色粘土 | 22 黄灰色砂質土 | 37 褐灰色砂質土 しまりあり | 52 黄灰色粘質土 多量の粗い砂礫含む | 67 黄灰色粘土 やや粗い砂粒含む |
| 8 黄褐色粘土 | 23 黄灰色砂質土 | 38 にぶい黄色砂質土 しまり強い | 53 褐灰色粘質土 やや粗い砂粒含む | 68 褐灰色粘質土 |
| 9 黄灰色粘土 | 24 黄灰色粘質土 | 39 褐灰色粘土 しまりあり 細かい砂粒含む | 54 褐灰色粘質土 | 69 黒褐色粘質土 やや粗い砂粒含む |
| 10 黒褐色粘質土 | 25 黄灰色砂質土 径1cm程度の小礫少量含む | 40 黒灰色粘土 しまりあり | 55 黒褐色粘質土 | |
| 11 黄灰色粘土 | 26 黄灰色粘質土 しまりあり | 41 黒褐色粘質土 しまり強い | 56 暗黄褐色砂質土 | |
| 12 黄灰色粘土 | 27 黄灰色砂質土 | 42 灰黄褐色砂礫 | 57 暗黄褐色粘質土 しまりあり | |
| 13 灰黄色粘土 細かい砂粒含む | 28 灰黄褐色粘質土 | 43 暗黄褐色砂質土 しまり強い | 58 灰オリーブ色砂泥 しまりあり | |
| 14 褐灰色粘土しまり強い (溝1199) | 29 灰黄褐色砂質土 小さな礫 | 44 褐色砂泥 しまりあり | 59 明青灰~灰色泥砂 しまり弱い | |
| 15 にぶい黄褐色粘質土 | 30 黄褐色砂質土 しまり強い | 45 灰褐色砂泥 しまりあり | 60 黒褐色粘質土 しまり強い | |

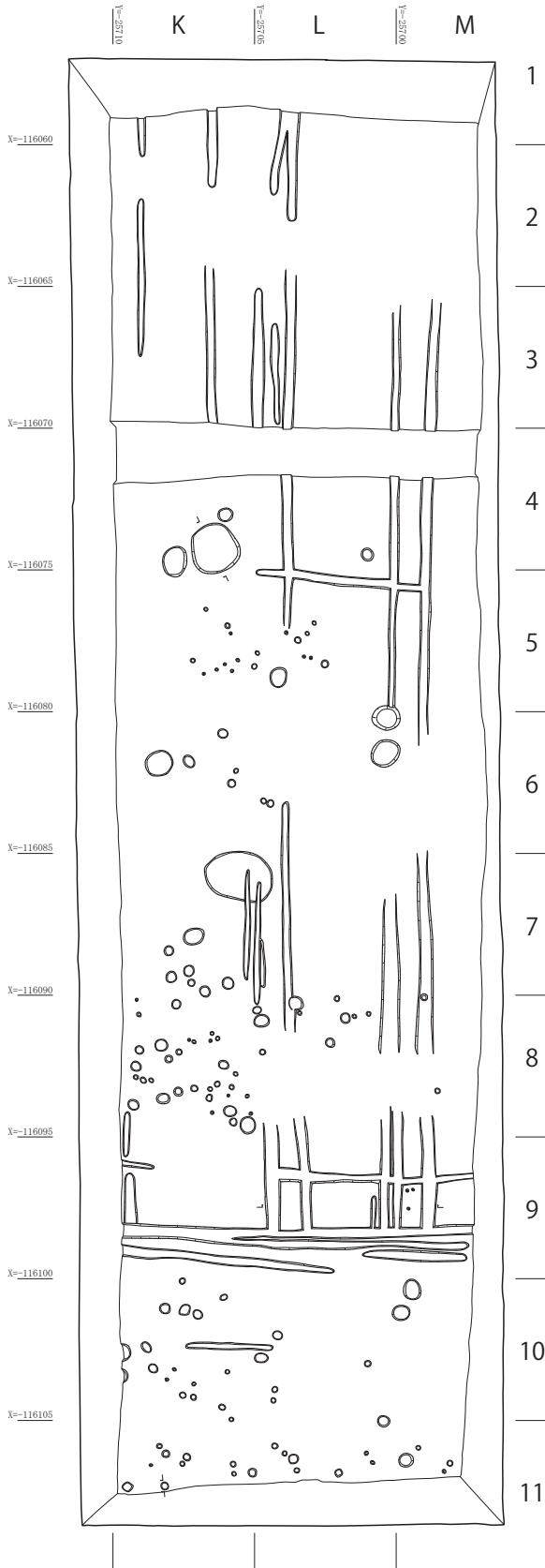
【凡例】

- 第1遺構面 (上面)
- 第1遺構面 (下面)
- 第2遺構面

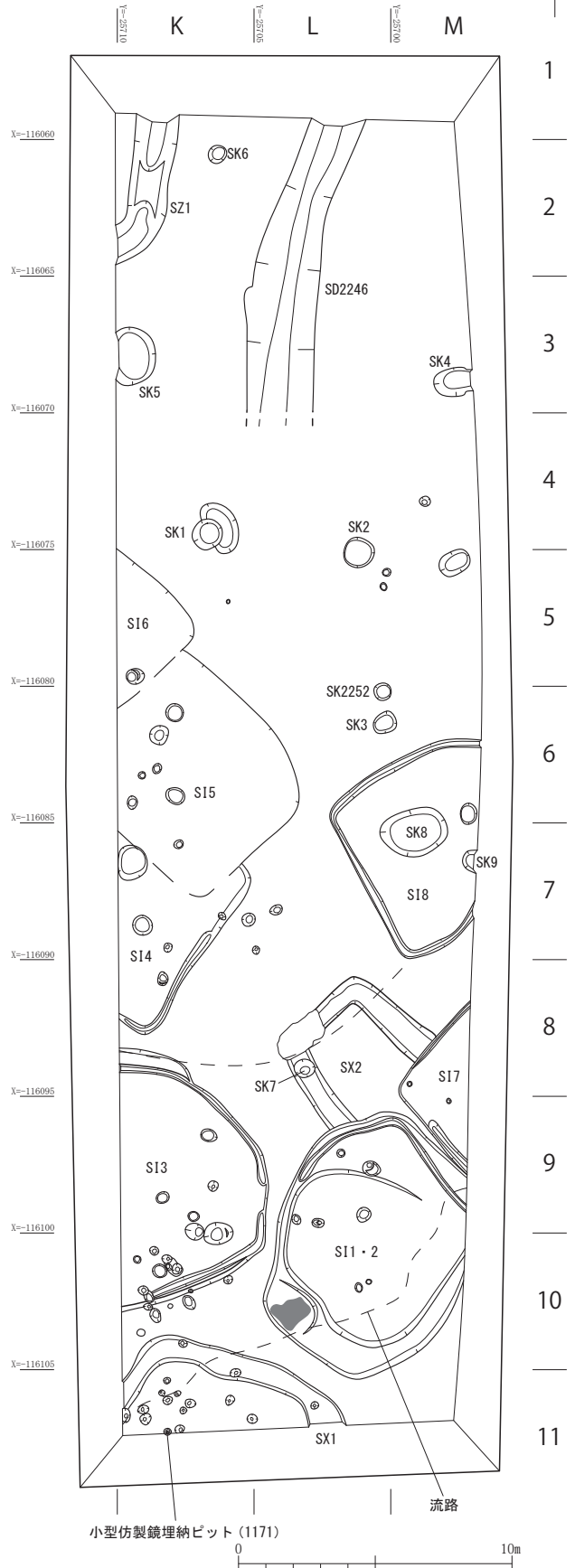


第8図 調査区西壁断面図 (縮尺1/100)

第1区第1遺構面

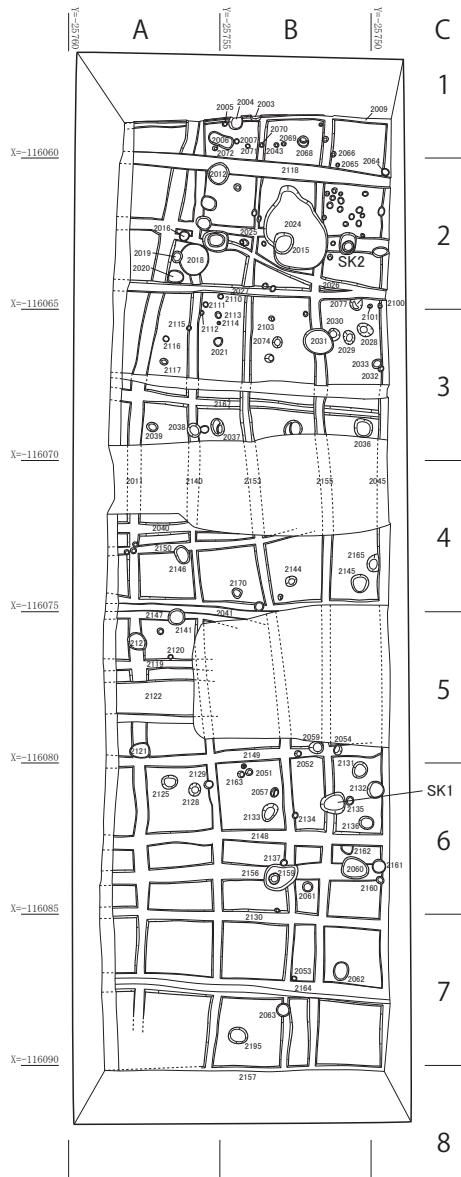


第1区第2遺構面

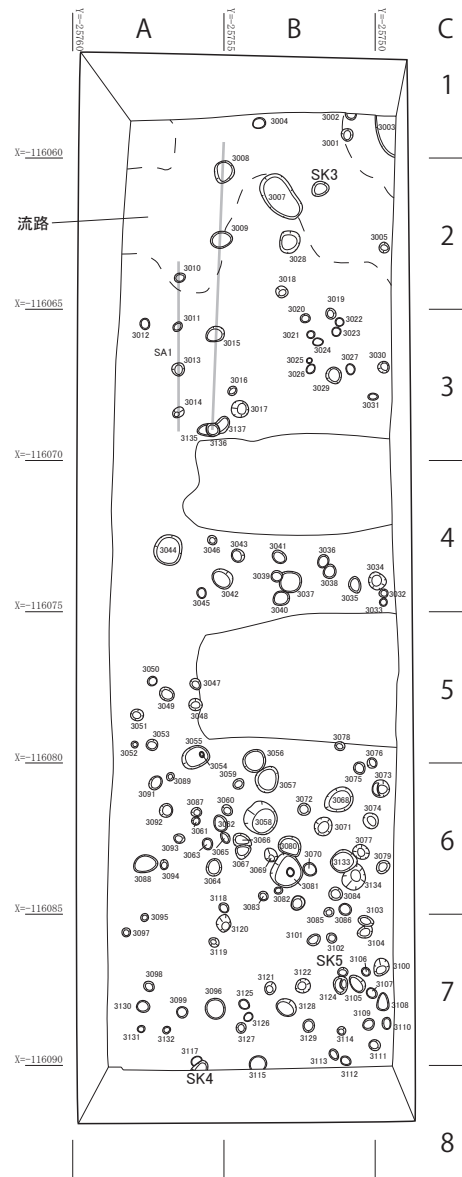


第9図 第1区第1・2遺構面全体図 (縮尺 1/250)

第2区第1遺構面（下面）



第2区第2遺構面



第10図 第2区第1遺構面（下面）・第2遺構面全体図（縮尺1/250）

第3節 第1区検出の遺構

1. 第1遺構面の遺構

調査区の南半に5条の東西方向の小溝があり、それを南限として北に向かって、南北方向の小溝が21条延びる。東西方向の小溝以南では、小溝は検出されていない。また、調査区中央よりやや北で、1条東西方向の小溝が検出されたが、それ以外は東西方向の溝はない。これら小溝は、幅25～35cm、深さ10～15cmの浅いもので、埋土にほとんど遺物を含まないが、瓦器碗の小片が出土していることなどから、平安時代後期から鎌倉時代前期に掘られたものではないかと推定される。

発掘された小溝は、途切れたり、重複しているが、本来はかなりの距離にわたって掘られているものが、後世の削平を受けて部分的に残ったものと考えられる。

小溝以外にも、土坑やピット群も検出されているが、ほとんど遺物が出土せず、この遺構面に下層遺構に伴う土器群や、下層遺構の上に堆積した遺物包含層の土器集中部分などが見られることから、多くは第1遺構面の遺構というより、第2遺構面の遺構の上部の可能性が強い。

2. 第2遺構面の遺構

A. 竪穴建物

SI 1 (2001) (第11図)

L・M9・10グリッド、調査区南の地形が高まった地点に位置する。SI2と重複しており、SI2の方が新しい。

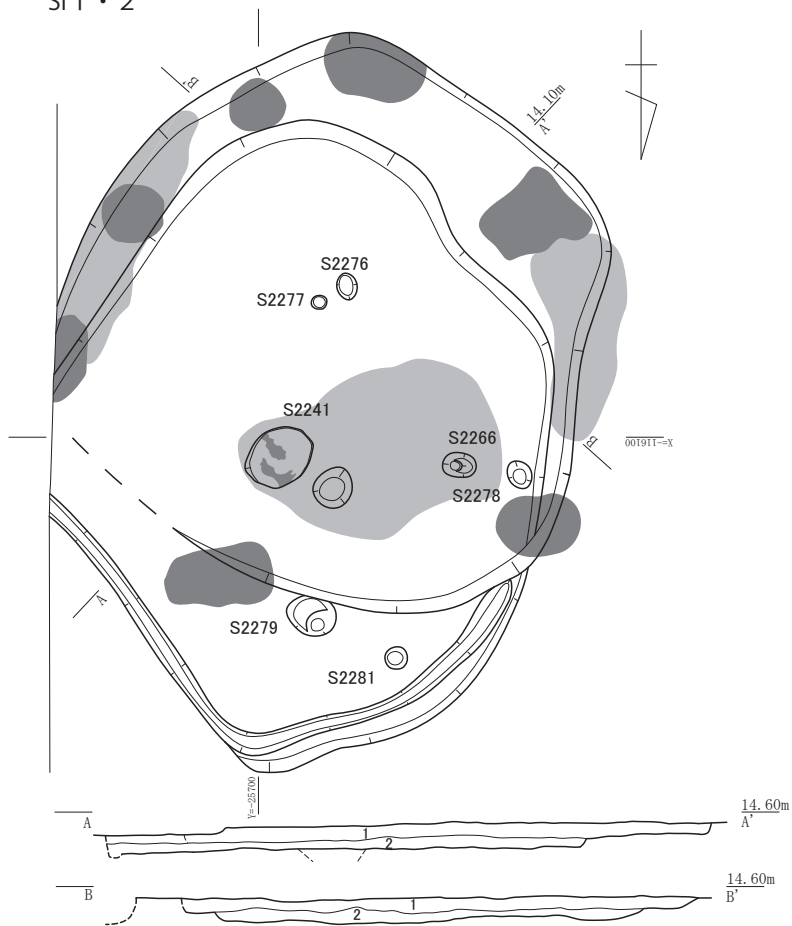
規模は一辺7m、深さ34cmで、平面形状はやや歪んだ隅丸方形の竪穴建物である。主軸方向は、北東にとる。埋土は、2層に分かれ、灰褐色土を基調とし、マンガンを多量に含み、炭化物を少量含む土層である。床面は、比較的まとまった状態で遺物が出土していることから、これらの置かれた面を床面とした。床面は貼り床が施されていた。明確に支柱穴は検出できなかった。周溝は、北壁際と西壁際の南側で検出した。規模は、幅26cm、深さ6cmを測る。床面中央付近からは、長軸90cm、短軸83cm、深さ5cmで断面形状が皿状を呈する土坑を検出した(SK2241)。埋土には、多量の炭化物がふくまれており、形状、位置からは、炉跡の可能性も考えられるが底面には被熱による赤化などは、確認できなかった。

中央よりやや南東の床面から、第V様式の完形の小型の甕(7)と外面に叩きを施したほぼ完形の中型の甕(6)がつぶれた状態で出土している。また、北側周壁溝付近で石製品(60)が出土している。出土した土器から、弥生時代後期後半の年代が推定される。

SI 2 (2001a) (第11図)

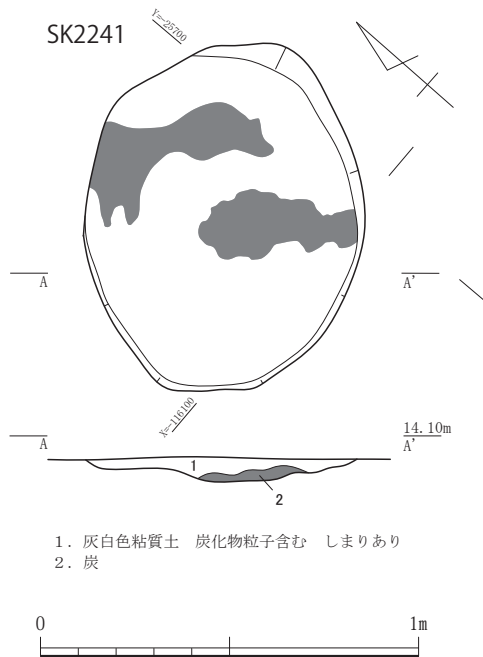
調査区南東部のL・M10グリッドに位置する。SI1と重複しており、SI2の方が新しい。規模は、一辺6.5m、深さ10cmで、平面形状は隅丸方形の竪穴建物である。側壁は、東南側と、それに続く南側で土層断面からかろうじて確認した。検出面で焼土や、炭化材が確認されており、焼失家屋と思われる。また、早くに削平されていたようで、明確に床面として捉えられるのは建物の南半であった。また、側壁の南東から、被熱した鉢(10)が、口縁部を下にして伏せたような状態で出土した。また、二重口縁壺(9)や、土製支脚(59)が出土している。

SI 1・2



1. 灰褐色土 マンガン斑多量に含む しまりあり 粘性弱い
2. 灰褐色砂質土 炭化物少量含む 径2～3cm大の礫少量含む

SK2241

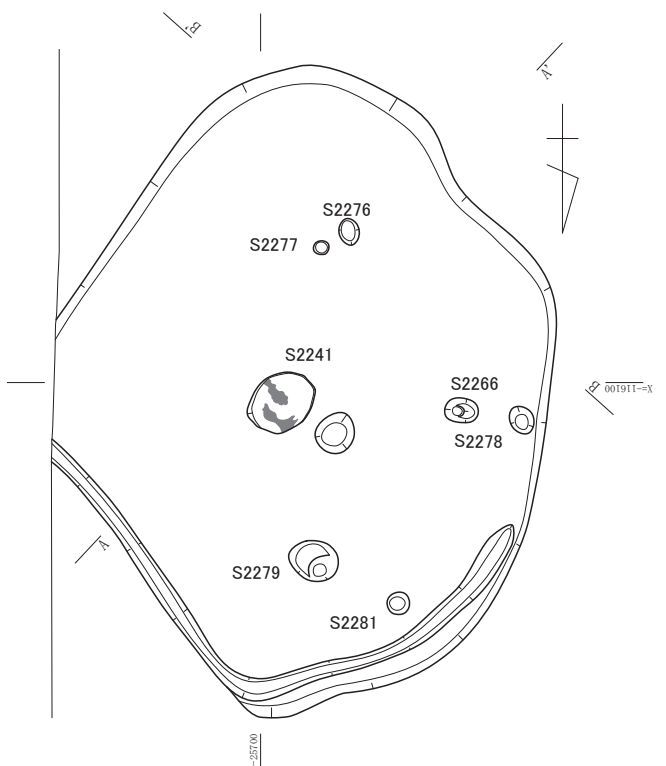


1. 灰白色粘質土 炭化物粒子含む しまりあり
2. 炭

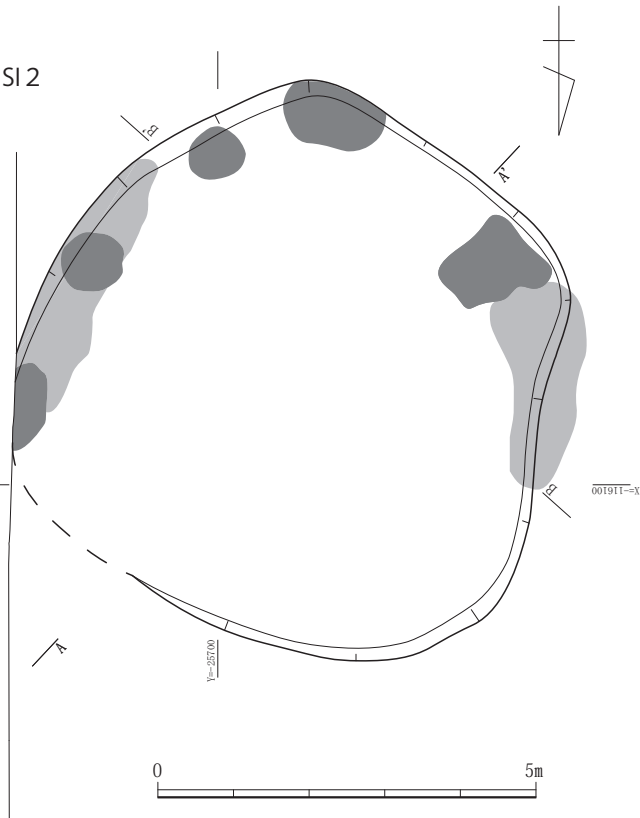
【凡例】

- 炭化材集中範囲
- 炭化範囲

SI 1



SI 2



第11図 第1区遺構図 SI 1・2 (縮尺1/100)、SK2241 (縮尺1/20)

出土遺物は少ないが、弥生時代後期後半から古墳時代初頭の年代が推定される。

SI 3 (2196) (第 13図)

調査区の南西部のL 2・3グリッドに位置する。

規模は、一辺が約8～9 m、深さ40 cmの、平面形状が不整形な円形か隅丸方形の竪穴建物である。埋土は、大きく2層に分かれる。第1層は、灰褐色粘質土であるが、マンガンを多量に含み赤化している。第2層はマンガン粒を多く含み、また、少量の炭化物を含む土層である。床面は張り床を施していた。側壁は、残りの良い西壁で観察するとほぼ垂直に立ち上がる。周溝は、東側の一部分を除き全周する。断面形状はU字状を呈し、規模は、幅20 cm、深さ10 cmを測る。床面は、厚さ10 cm程度の貼床を施している。ピットは、13基検出したが、明確に支柱穴とよべるものは確認できなかった。

出土遺物は、北西半から土器がまとまって出土しており、弥生時代後期後半の年代が推定される。

SI 4 (2220) (第 12図)

K 5～8グリッドで重複する3棟の竪穴建物と思われる平面プランを確認した。平面及び土層断面からは、明確な重複関係をとらえることは出来なかった。その原因として、これらの竪穴建物の土層を観察した結果、液状化現象の痕跡が見られた。この液状化現象により、埋土が混じり合い、土層は不明瞭な状態になったものと推定できる。また、個々の側壁においても、明確な立ち上がりを確認できたのは、SI 4の南西壁のみであった。

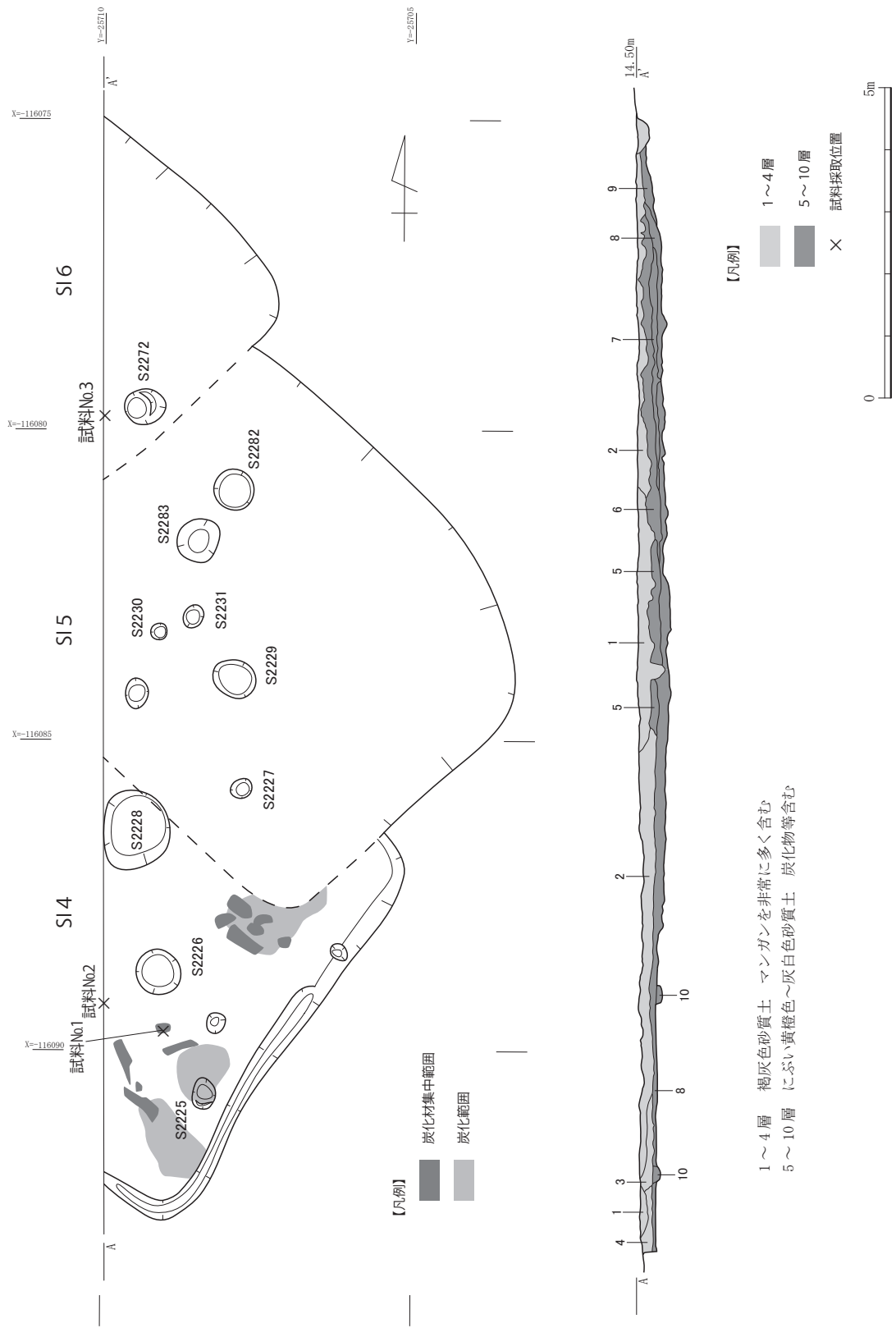
SI 4はK 7・8グリッドに位置し、この付近から北へ向かって地形が緩やかに傾斜しはじめる。その端部に立地する。南側にはSI 3が隣接する。また、北側では、SI 5と重複しており、SI 5が新しい。

規模は、一辺7.25 m、深さ20 cmを測る。検出したのは、全体のほぼ半分程度であるが、検出した平面形状は、隅丸方形の竪穴建物である。主軸は北東にとる。埋土は、灰褐色土で2～3 cm大の礫、炭化物を含む土層である。側壁が明確に捉えられるのは、南東側の一部分で、これ以外は明瞭な立ち上がりはとらえられなかった。周壁溝は、南西壁際から南角を巡り、南東壁際を北東へ約4.2 mで途切れる。規模は、幅23 cm、深さ7 cmを測る。断面形状は、U字状を呈する。明確に支柱穴と捉えられるピットは検出できなかった。床面には炭化木材がまとまった状態で検出された。炭化材は、直径約10～15 cmで柱材等と思われ、また、焼失家屋である可能性も考えられる。

出土した土器(15～17)から、弥生時代後期後半の年代が推定される。

SI 5 (2220a) (第 11図)

SI 4の北に重複して位置する、一辺約9 m、深さ30 cmの平面形が隅丸方形の竪穴建物である。主軸は北東にとる。上層遺構の精査時に、土器だまりの上部が確認できた。SI 2同様、早くに削平されていたようで、微地形が高くなって行く南側は残存していない。また、周壁溝も柱穴も検出できず、わずかに住居の輪郭が確認できたにとどまる。確認面から30 cm掘りこまれた状態ではあるが、これは、貼り床層と考えられる。貼り床を施す層としてはやや深すぎるが、液状化の



第12図 第1区遺構図 SI 4～6 (縮尺1/100)

影響もあり地山と貼り床層の境は明瞭には捉えられなかった。

出土遺物は竪穴建物の中央付近にまとまって見られた。そして遺物は、ほぼ水平な状態で出土していることから、その置かれていた高さを床面と考えた。まとまって出土した土器は布留式であることから、古墳時代中期の年代が推定される。

SI 6 (2220b) (第 12 図)

SI 4 の北に重複して位置する、平面形が方形の竪穴建物で、北東部の一部が検出されたにとどまる。主軸は北東にとる。早くに削平されていたようで、かろうじて竪穴建物の輪郭が確認できたが、周壁溝、柱穴は検出できなかった。遺物は出土しておらず、重複する SI 5 との時期比較は難しい。検出状況から判断すれば、SI 5 より新しい可能性がある。ただし、SI 6 の土層堆積状況を見る限りでは、砂質土を中心に構成され、緩やかに南から北へ上る。また、壁等も明確に見極められていない。これらの状況から遺構ではない可能性も考えられる。

SI 7 (第 13 図)

M 8・9 グリッド、調査区南側に位置し、SI 1 の北側に近接する。平面形状が、隅丸方形の竪穴建物の南西部である。

検出範囲での規模は、一辺 4.3 m 以上、深さ 13 cm を測る。埋土は、灰褐色粘質土で炭化物を少量含む土層である。側壁は、ほぼ垂直に立ち上がる。床面は、掘りくぼめただけの地山床であった。周壁溝は、角部分を除き検出した。断面形状は U 字を呈する。規模は、幅 10～20 cm、深さ 7 cm を測る。明確に支柱穴と捉えられるピットは検出できなかった。

出土遺物は、埋土に土器の小片がわずかに含まれていただけで、時期は不明である。

SI 8 (第 13 図)

L・M 6・7 グリッドに位置する。約 2.5 m 南に SI 7 がある。SI 8 の中央よりやや北西よりで SK 8 と、また、SI 8 の南東部付近で SK 9 と重複しており、いずれも SI 8 より新しい。

規模は一辺 6.5m～7m、深さ 6 cm で、平面形状が隅丸方形の竪穴建物である。調査区内では西半分が検出された。主軸は北東にとる。埋土は、暗灰色土粘質土で多量の鉄分、炭化物を少量含む土層である。床面は、地山床であった。周壁溝は、全周する。断面形状は U 字形を呈する。規模は、幅約 20 cm、深さ 10 cm を測る。支柱穴と明確に捉えられるピットは検出できなかった。

出土遺物は、庄内式の甕、壺、鉢などがあり、土器から古墳時代前期の年代が推定される。

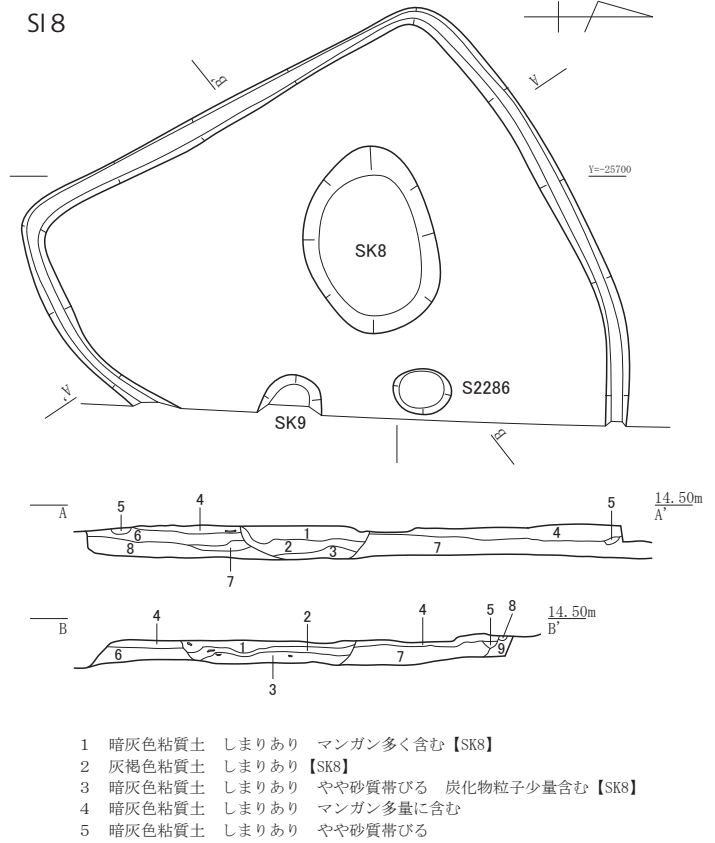
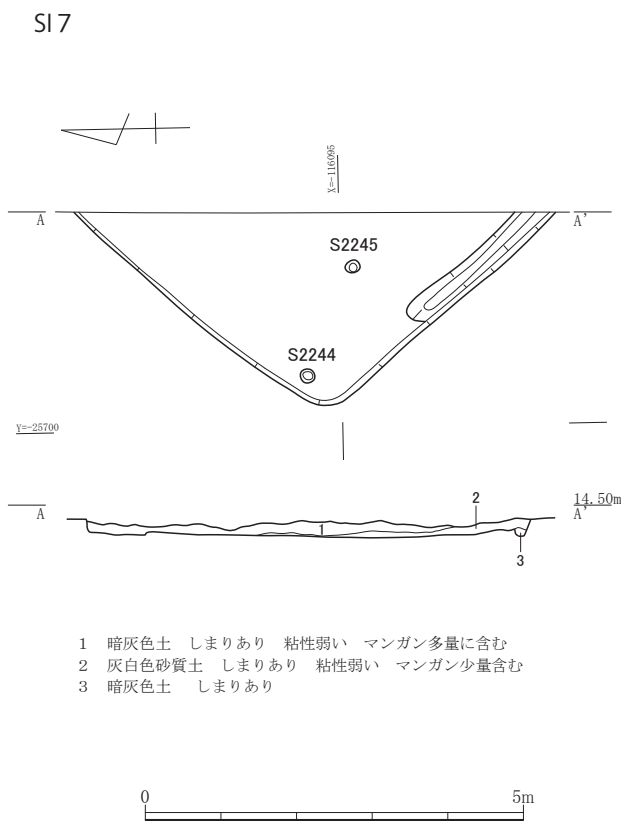
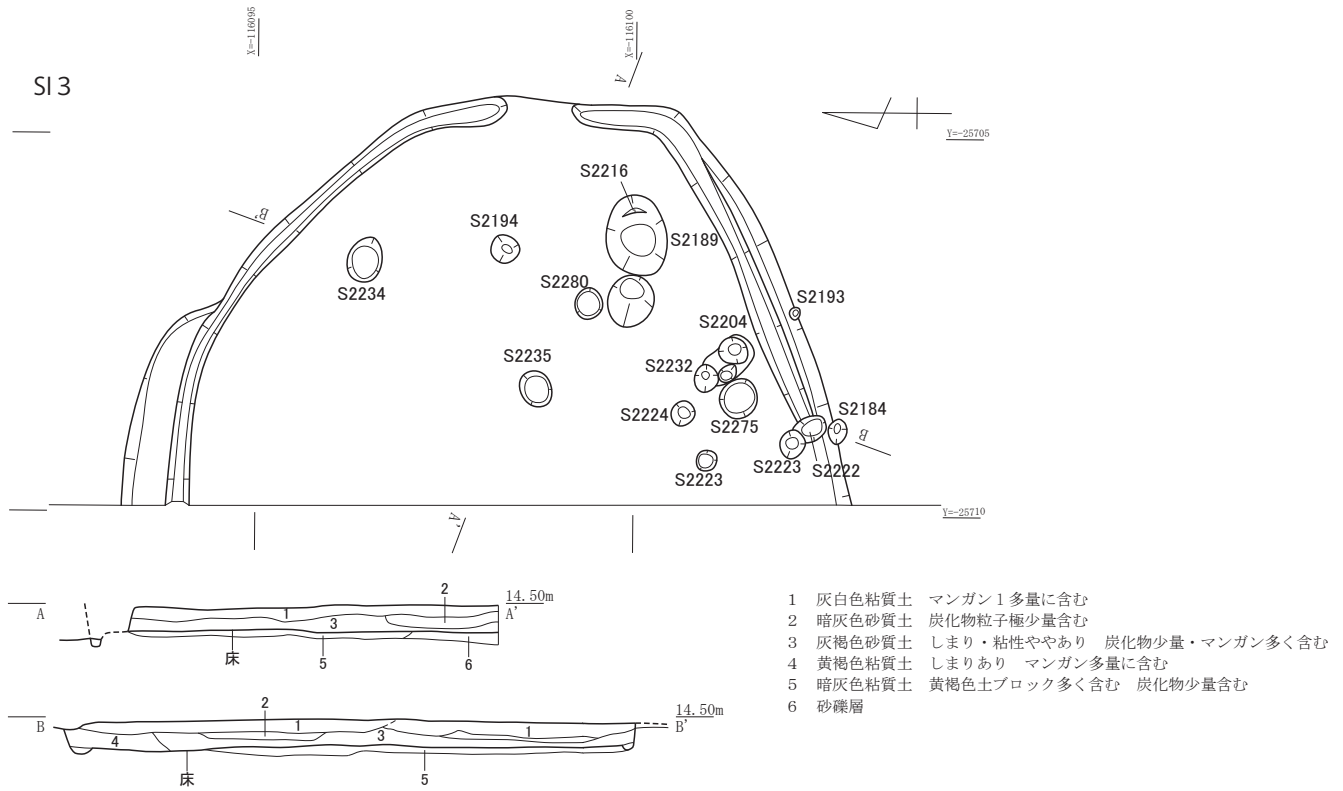
B. 土坑

SK 1 (2256) (第 14 図)

上層の K 4 グリッドで検出した土坑 1038 の下層で、検出時には円形の井戸の掘方を思わせしたが、掘り下げると長径 1.8 m、短径 1.2m、深さ 15 cm の、楕円形と円形の重複した不整形な土坑となった。人為的なものと考えるより、自然の窪みの可能性が高い。埋土より、布留式の甕の破片が出土しており、古墳時代中期には埋没している。

SK 2 (2240) (第 14 図)

L 4 グリッドに位置する。平面形状は、円形を呈する。底部は平坦である。規模は直径 1.2 m、深さ 34 cm を測る。埋土は、黒褐色粘質土で、上層部にマンガン斑が堆積する土層である。



第13図 第1区遺構図 SI 3・7・8 (縮尺1/100)

土坑内からは布留式の甕等が出土した。そのうち甕(31)の出土状況は、土坑に埋め込まれた状態で、口縁を北に向けて横転し、土圧で潰れている。上部半面は壊れているがほぼ良好な状態で出土した。高杯の脚部(42)は、甕の口縁に近い北側で出土した。

出土した土器から古墳時代中期のものと推定される。

SK 3 (2239) (第 14 図)

L 6 グリッドに位置する。長径 1.1m、短径 0.9m、深さ 25 cm の土坑で、底部は平坦である。埋土は、3 層に分かれ、灰褐色粘質土を基調に炭化物を少量含む土層である。

出土した遺物は、弥生土器の高杯(41)と台付甕(42)である。いずれもかなりバラバラに壊れており、原形をとどめていない状態で出土したが、破片が土坑内にまとまっていたことから復元ができた。壊れたものを一括で廃棄しているところから見て、廃棄土坑であると考えられる。

出土した土器から弥生時代後期後半の年代が推測される。

SK 4 (2250) (第 14 図)

M 3 グリッドに位置する。東壁際で検出された。長径 1.5 m 以上、短径 1.1m、深さ 25 cm で、底部は皿状である。埋土は黄褐色砂質土で微細な炭化物粒子を多く含む土層である。

SK 5 (2253) (第 14 図)

K 3 グリッドに位置する。方形周溝墓の南に隣接する、直径 2.2m、深さ 45 cm の土坑で、底部は皿状である。埋土は黒褐色粘質土で、小型丸底壺を含む多量の布留式土器が含まれ、底部からは木製品が出土しているほか、植物の種子も検出されている。古墳時代中期の年代が推定される。

SK 6 (2224) (第 14 図)

調査区北端の K 2 グリッドに位置する。方形周溝墓と溝(2246)の間で検出した、直径 60 cm、深さ 4 cm の円形の土坑で、底部は皿状である。埋土は、黒褐色粘質土で、炭化物を少量含む土層である。

SK 7 (2243) (第 14 図)

K 4 グリッドに位置し、SX 2 と重複しており、SK 7 が新しい。直径 74 cm、深さ 49 cm の円形の土坑で、断面形状は逆台形である。埋土は 3 層に分かれ、灰色砂質土を基調とし、微細な炭化物粒子を多く含む土層である。堆積状況は、SK 4 (2250) と類似している。

SK 8 (2203) (第 14 図)

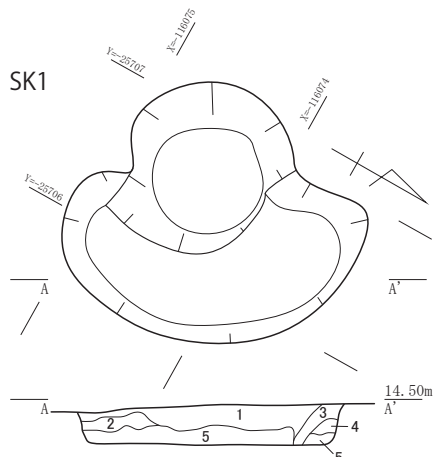
M 7 グリッドに位置し、SI 8 と重複しており、SK 8 が新しい。平面形状が楕円形を呈し、長径 2.6 m × 短径 1.7 m、深さ 32 cm を測る。断面形状は、逆台形である。覆土は、葉黄褐色砂質土で、マンガン斑が多く含まれ、炭化物を少量含む土層である。土坑内からは、多量の甕や小形高杯(22)などの布留式土器が多数出土した。

出土した土器から古墳時代中期のものと推定される。

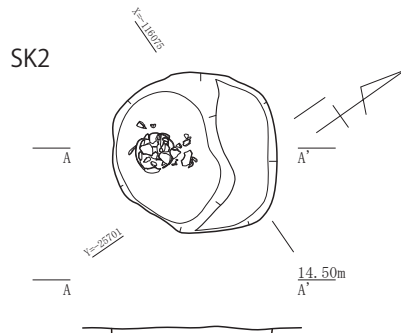
SK 9 (2282) (第 14 図)

M 7 グリッドに位置し、SI 8 と重複している。SK 9 が新しい。東約半分は、調査区外へと延びるため全体の形状は不明である。布留式の小型丸底土器などが出土している。

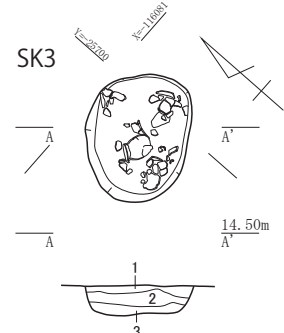
出土した土器から古墳時代中期のものと推定される。



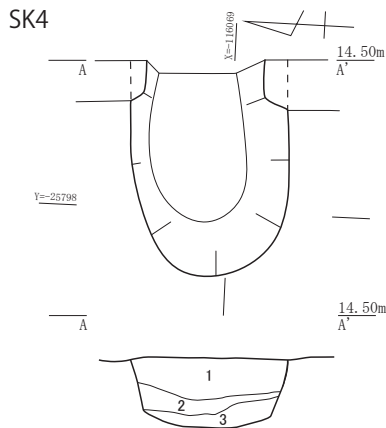
- 1 黄褐色砂質土 粘性弱い マンガン斑多量・径1cm大の礫含む
- 2 黄褐色砂質土 マンガン斑含む
- 3 褐色砂質土 マンガン斑含む
- 4 黄褐色砂質土
- 5 黄褐色砂質土 暗褐色土ブロック含む



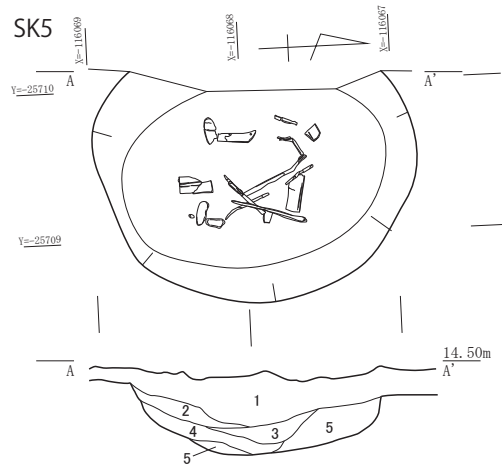
- 1 黒褐色粘質土 やや砂質帯びる
マンガン斑上面に含む
黄褐色粘土ブロック含む



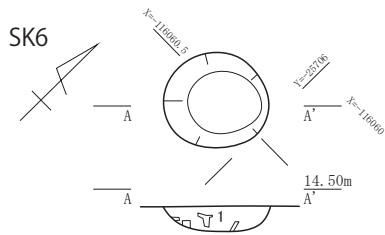
- 1 灰褐色粘質土 しまり強い
- 2 灰褐色粘質土 しまりあり
炭化物粒子少量含む
- 3 灰褐色砂質土 しまりあり
炭化物粒子少量含む



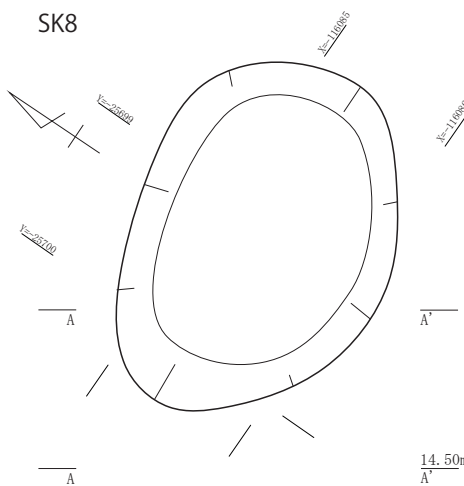
- 1 灰褐色土 マンガン斑・1mm以下の微細な炭化物含む
- 2 灰白色土 マンガン斑・微細な炭化物やや多く含む
- 3 灰褐色砂質土 微細な炭化物多く含む



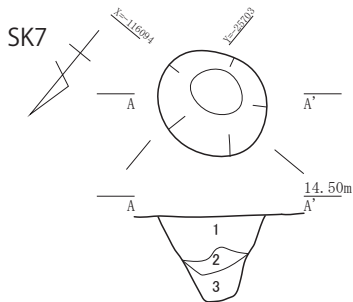
- 1 灰褐色砂質土 マンガン斑・微細な炭化物少量含む
- 2 灰褐色砂質土 1層に類似するが、マンガン斑減少する
- 3 灰褐色砂質土 しまり・粘性ややあり 炭化物少量・マンガン多く含む
- 4 灰褐色土 径1cm前後の灰白色粘土ブロック含む
- 5 灰色砂質土 灰白色の粘土ブロック多く含む



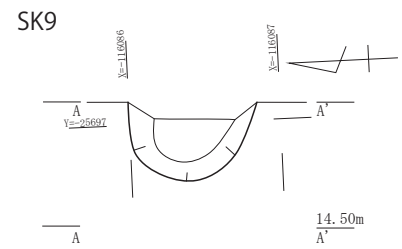
- 1 黒色粘質土 マンガン斑・微細な炭化物含む



- 1 暗灰色粘質土 しまりあり
マンガン多く含む
- 2 灰褐色粘質土 しまりあり
- 3 暗灰色粘質土 しまりあり
やや砂質帯びる 炭化物粒子少量含む



- 1 黄褐色粘質土 微細な炭化物少量含む 暗灰色砂混じる
- 2 暗灰色砂質土 しまり・粘性弱い 微細な炭化物多く含む
- 3 暗灰色砂質土 2層に類似するが、砂の粒子荒い



- 1 暗灰色粘質土 しまり強い



第14図 第1区遺構図 SK 1～9 (縮尺1/50)

C. 溝状遺構

SD2246 (第9図)

L 2・3グリッドを南北方向に走る、幅1.8～2.3 m、深さが最大で4 cmの溝状遺構である。北壁より約10.5 m南でしだいに浅くなって消滅する。溝内の堆積は単層で、遺存状態の悪い土師器の破片が多数出土した。土器の時期は古墳時代中期である。

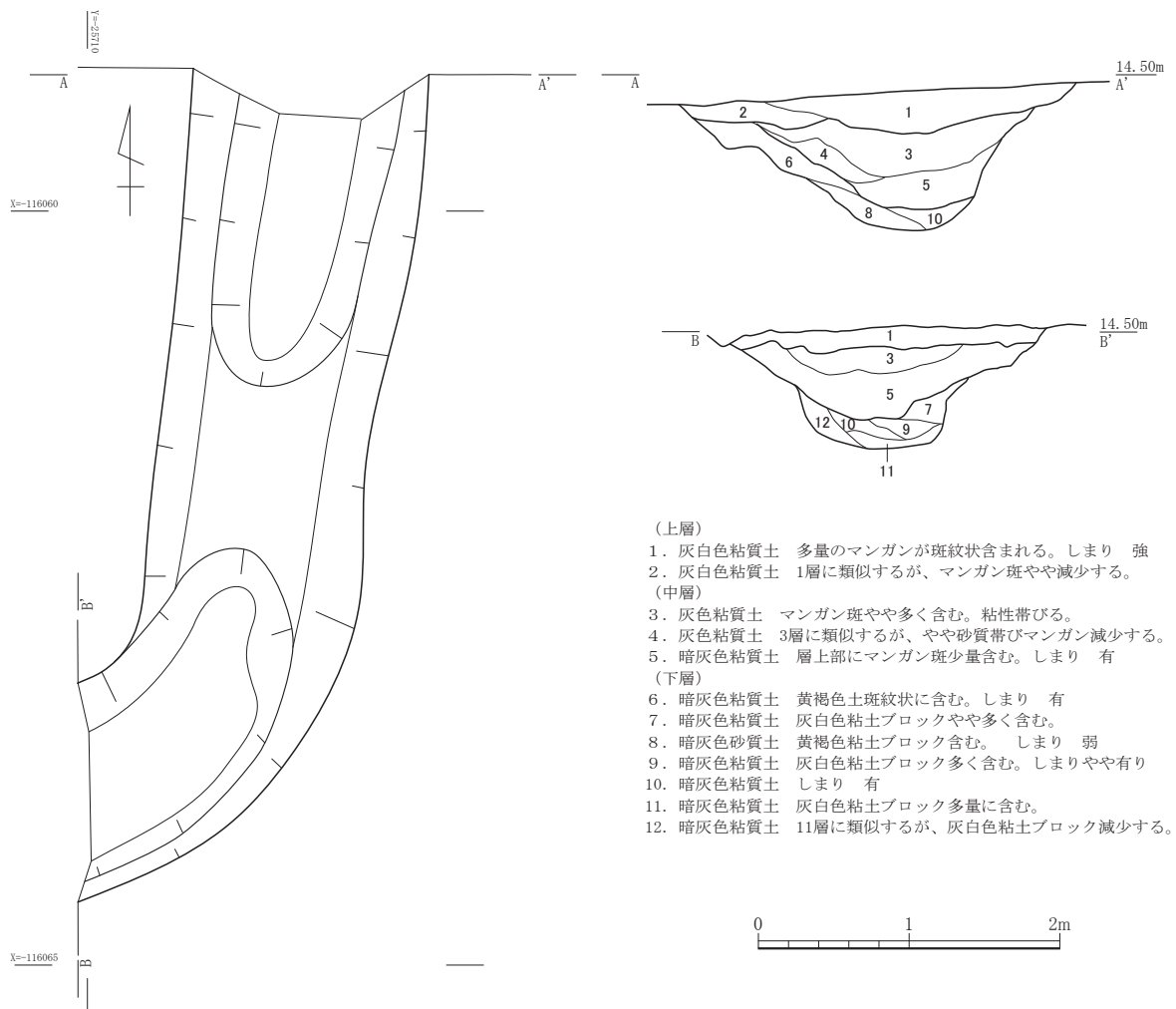
D. 方形周溝墓

SZ 1 (SD2254) (第15図)

調査区の北西端 (K 1・2グリッド) で南東端を含む、周溝の一部が検出された。全体の規模は不明であるが、周溝の幅約2.2～2.7 m、深さ約0.9 mである。なお遺構の検出時には、輪郭が不明瞭であった。そのため削り込み気味に検出を行った。そのため、部分的に土器片の散布が認められた、溝の上層を削り込んだ部分もある。

溝は地山を掘り込んで作られ、断面の形状はU字状をなすが、場所によっては傾斜を変えて二段になっている。また、南東隅より東側の周溝につながって曲がる北側部分が、浅くブリッジ状になっており、そこから東側の溝と南側の溝を深く掘りこんでいる。こうした溝の形状から、方形周溝墓と考えた。

溝内の堆積は、浅いブリッジより北と南で、細部で差異はあるものの、基本的には上、中、下



第15図 第1区遺構図 SZ1 (縮尺 1/50)

3層に分けられる。下層では北側の溝で、溝で囲まれる内側から、溝の西斜面に流れるように堆積する黄色っぽい色調の砂泥層が顕著に見られた。南側の溝でも見られるが、北側ほど顕著ではない。この層は崩れたり流れたりした墳丘盛土の流れ込んだ土と思われる。中層では、北側の溝でそれらしい流入土がないわけでもないが、下層ほど明確ではなく、南側の溝では確認できなかった。下層、中層とも、遺物は出土しなかった。

上層は深さ約 30 cm と浅く、埋没するまでかろうじて方形周溝墓の痕跡をとどめていた可能性がある。また、上層埋没後に堆積した包含層には、非常に残りの悪い土器片が散布していた。土器の集中していたのは、方形周溝墓より南の K 3 区であったが、出土する土器は、第 V 様式後半の弥生土器と布留式の古式土師器が混在する。時期の新しい布留式土器から考えて、古墳時代中期には方形周溝墓の溝は、痕跡も残さずに完全に埋没したと推察される。

E. 不明遺構

SX 1 (溝 2178) (第 8 図)

K・L 10・11 グリッド、調査区の南西端に位置する。堅穴建物よりも南で、SI 1～3 に近接するが、重複はしない。溝はコの字形にめぐっており、一辺約 7.5 m、幅 0.8～1 m、深さ 5 cm と浅く明瞭ではないが、おそらく方形にめぐるのである。溝内からは、遺物はほとんど出土していない。溝で囲まれた内側には 11 基のピットがあるが、周溝との関係は不明である。ただ、そのうちの 1 基から小型の銅鏡が出土している。形状から見て、方形周溝墓の可能性も考えられるが、調査区の北西隅で検出された方形周溝墓から離れていることや、溝の底面が平坦であること等違いもあり、方形周溝墓の可能性は低いと思われる。この溝を境にして、生活空間と祭祀空間の境を成している区画溝の可能性が推測される。

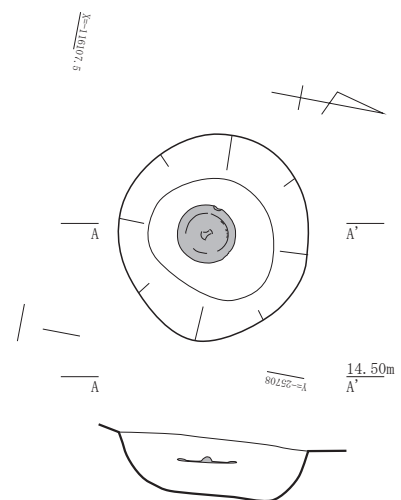
SX 2 (溝 2238) (第 8 図)

L・M 8・9 グリッドに位置する。SI 1・7 と重複関係にあり、2 棟の堅穴建物に壊されていることから堅穴建物より古いと考えられる。溝はコの字状にめぐっており、一辺 3.8 m、幅 93 cm、深さ 22 cm を測る。南東側を堅穴建物によって壊されているため、明瞭ではないが、方形にめぐっていたものと考えられる。溝で囲われた内側には複数のピットを検出しているが、ピット内から遺物は出土していないこと、位置関係に規則性が見られないことから互いの関係性は不明である。溝からは、第 V 様式の鉢 (46) が出土していることから、弥生時代後期後半と考えられる。

F. 小型仿製鏡埋納ピット (1171) (第 16 図)

調査区南端の、西よりの壁際で検出された。直径 37 cm、深さ 8 cm のピットで、底部の断面は U 字形である。埋土は灰白色粘質土で、土器などの遺物は含まれていなかった。

銅鏡は直径 8.6 cm の小型仿製鏡である。遺構検出面より 4 cm 下に、鏡面を下にした状態でほぼ水平に置かれていた。鏡が検出されたのは、ピットを半裁していた時であったため、埋土の



第 16 図 小型仿製鏡埋納ピット (縮尺 1/10)

状況を観察できたが、鏡を収めた容器や、有機質の痕跡などは認められなかった。また、鏡を外して底の状態を観察したが、何かが敷かれていたような様子もなかった。さらに鏡より下部の埋土も、鏡より上部の埋土と何ら変るところはなかった。

鏡の検出にあたっては、表面を洗うことなく露出させ、取上げにあたっては鏡に付着する土ごと持ち帰り、ルーペで観察しながら土のみを除去した。

ピットより北に隣接する位置で、コの字状にめぐる溝が検出されているが、溝内から遺物は出土していない。遺物は、溝およびピット周辺から、遺構確認の際、弥生土器の小片が出土した程度である。これらを考慮に入れ、溝より北側に近接するSI 1、3などの住居の年代を勘案して、住居とほぼ時期差のない弥生時代後期後半のものではないかと推定している。

第4節 第2区検出の遺構

1. 第1遺構面（上面）の遺構

第2区では、第1区の上層遺構に対応する遺構面の上に、もう一面遺構面を確認した。この面では、東西方向に走る小溝を8条検出した。

このうち、溝 1198・1199・1230 の3条の小溝は、幅約18 cm、深さ58 cmで、断面形状はU字状を呈し、溝内には湿気抜き竹筒が埋設されていた。竹筒は、半裁して節を取り、再び合わせたもので、竹筒の側面には、高さ約1 cm、長さ15 cm程度のほぞ穴状に切り込みが入る。これは、地下水をしみこませるためのものと考えられる。また、竹筒には木皮が巻かれ、周囲にはソダが入れ込まれていた。これらは、泥の流入を防ぐため、暗渠の役割を果たしていたものと考えられる。とくに調査区南側の溝1230では、竹筒の接合部側面を安定させるためのレンガが据えられていた。

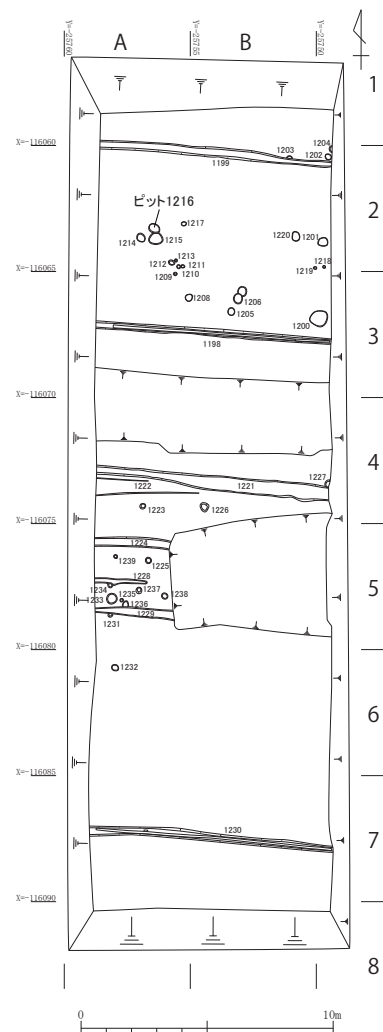
溝や竹筒内から遺物は出土していないが、煉瓦が出土していること、土層断面で確認すると近代の耕作土層から掘り込まれていることから近世以降のものと考えられる。

残り5条の溝は、幅は40cm程、深さは15cm程で、遺構の埋土中からは中世の土器片が出土した。

また、最上層面に該当する遺構として少数ではあるが土坑やピットも検出した。全体に遺物に乏しいが、溝1198の北側にあたる、B2グリッドのピット1220やその周囲から、少量ではあるが須恵器の杯等の破片が出土した。

2. 第1遺構面（下面）

第1区の上層遺構に対応する遺構面では、小溝22条と



第17図 第2区第1遺構面（上面）全体図（縮尺1/300）

土坑・ピット群が 122 基検出された。

A. 小溝

小溝は、調査区全体にまんべんなく格子状に広がり、第 1 区同様に南北方向と東西方向に延びる小溝が 22 条検出された。南北方向の小溝を 5 条、東西方向の小溝を 17 条検出した。規模は、幅約 28 ～ 46 cm、深さ 10 ～ 20 cm で、断面形状は、U 字形を呈する。南北方向の小溝（溝 2011・2045・2140・2153・2155）は、多少の振れはあるが、ほぼ調査区の端から端まで延びる。東西方向の小溝（溝 2009・2025 ～ 2027・2040・2041・2118・2119・2122・2130・2147 ～ 2150・2156・2157・2164・2167）は、基本的には調査区の端から端まで延びているが、一部交錯するものや、幅で数倍広いものなども 1 条混じる。

溝群からの出土遺物はほとんどないが、溝 1198 や、A 3 グリッド付近の検出時に玉縁状口縁の白磁碗の小片が出土しており、第 1 区同様、平安時代後期から鎌倉時代前期に掘られたものではないかと推定される。

B. 土坑

小溝間で検出された土坑やピット群からは、やはり第 1 区と同様に遺物の出土量に乏しい。このうち、遺物の出土した遺構は以下のとおりである。

SK 1 (2055) (第 18 図)

調査区南半の B 6 グリッドで検出した、長径 80 cm、短径 70 cm、深さ 48 cm の楕円形の土坑である。南北方向の溝 2155 を切る形で検出しており、埋土中からは鉄鉢形の土師器や須恵器杯身など、複数の遺物の小片を確認した。

SK 2 (2098) (第 9 図)

調査区北半の B 2 グリッドで検出した、長径 70 cm、短径 57 cm、深さ 17 cm の楕円形の土坑である。他の土坑とも重複しており、溝とどちらが先行するかは定かではない。

ただし、溝の年代や切り合いなどを加味すると、出土した遺物がすべてこの遺構面に伴うかどうかは若干の疑問が残り、一部は下層遺構の可能性もある。

2. 第 2 遺構面の遺構

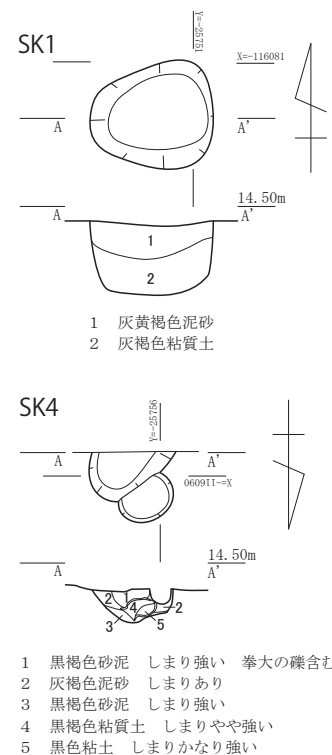
遺構面全体に土坑とピットが検出されたが、調査区北半に比べて南半の方が、ややピットの密度が濃い。

このうち遺構の可能性が強いものと、遺物の出土した土坑については次のとおりである。

A. 杭 列

SA 1 (第 9 図)

調査区北半の西より A 2 ～ 3 グリッドで検出した。南北方向に主軸をとり、北から 3010・3011・3013・3014 が、1.5m・1.4m・1.6m の間隔で並ぶ。平面形は、やや歪んだ円形である。規模は



第 18 図 第 2 区遺構図
SK 1・4 (縮尺 1/50)

長径約 35 cm、短径約 30 cm、深さ 10 ～ 18 cmを測る。東西に対応するピット列が無いことから、3 間の柵または塀の可能性はある。時期や用途は不詳である。

B. 土坑・ピット

SK 3 (3006) (第 9 図)

調査区の北東部 B 2 グリッドで検出された、長径 60 cm、短径 50 cm、深さ 15 cmのやや楕円形の土坑で、埋土から弥生時代後期後半の土器の破片が出土した。

SK 4 (3116) (第 9 図)

調査区の南壁際 A 8 グリッドで検出した土坑である。長径 50 cm以上、短径 40 cm、深さ 25 cmの、半分以上が壁面に食い込んでいたため確実な平面形は出すことができないが楕円形の土坑であると推定される。中に、古墳時代中期の布留式甕が口縁部を東側にして下向きに埋まっており、土坑の埋土より粘質で、しまりの強い土が土器内側に含まれる。甕は、体部が土圧で潰れているが、比較的残りの良い状態で確認できた。

出土した土器から古墳時代中期のものと推定される。

SK 5 (3123) (第 18 図)

調査区の南半で検出した、23cm × 30cm の土坑あるいはピットである。ピットが密集する地点にあるが柵や建物のように並ぶものなどは確認できなかった。

第4章 遺物

第1節 遺物の概要

今回の調査で出土した遺物はコンテナ数で41箱である。なお、整理段階でランク分けを行った結果20箱となった。遺物の種類は、弥生土器、土師器、須恵器、瓦器、白磁、石器、石製品、青銅製品、木製品など、弥生時代から鎌倉時代までの遺物が出土した。

第4表 遺物概要表

時代	内容	コンテナ箱数	Aランク点数	Bランク箱数	Cランク箱数
中世・近代 (第2区第1遺構面・上面)	須恵器、石製品		須恵器3点、石製品1点		
長岡京期～中世 (第1区第1遺構面 第2区第1遺構面・下面)	土師器、須恵器		土師器2点、須恵器3点		
弥生時代～古墳時代 (第1区第2遺構面 第2区第2遺構面)	弥生土器、土師器、土製品、 木製品、石製品、金属製品		弥生土器29点、土師器37点、土製品 1点、石製品3点、木製品7点、小型 仿製鏡1点		
合計		20箱	91点(10箱)	1箱	9箱

第2節 第1区の遺物

1. 土器(第19・20・21図)

総じて残存状況が悪く、表面の剥落が著しい。

第1遺構面包含層

須恵器の壺(1)は、やや外反する口縁部で、端部に内傾する段をもつ。

須恵器は、この他に、杯身、甕などの破片が見られた。共に時期は長岡京期のものである。

須恵器の直口壺(2)は、わずかに外上方へ直線的にのびる口頸部に、断面三角形の突帯を2条めぐらせ、突帯間に波状文をめぐらせている。

排土からの採集品であるが、他にこの時期の遺物が確認されていないため図示した。TK 23型式のもので、古墳時代の5世紀後半の時期である。

第2遺構面

土師器の二重口縁壺(3)は、口径23.8cmと大形のもので、口縁端部は丸く収めている。

下層遺構検出時にピットより単独で出土したものである。

土師器の鉢(4)は、口縁部が二段に屈曲し、端部は尖り気味に収めている。全体に器壁は約3mmと薄く、ヘラミガキで仕上げられ、胎土も精良である。

3・4の時期は、布留式前半である。

SI 1

弥生土器の壺、甕、鉢、器台が出土しているが、量的には多くなく、小片が多い。

壺は、小型壺(5)で、ナデ仕上げされた体部下半のみである。

甕は、体部外面にタタキを施した、高さ18.5cmのもの(6)と、体部が無文で高さ7.8cmの

小型のもの（7）があり、両者は口縁部から底部までほぼ完形に近い状態で残存し、共伴して出土した。甕（6）の口縁部は外反し、端部外面に横ナデによる面がある。最大径は、やや丸みを帯びた体部のほぼ中央にくる。体部は分割成形によって形作られており、それぞれの外面に、右上がりのタタキを施している。底部は、突出した平底で、底面は平らである。小型の甕（7）は口縁端部に刻み目をめぐらせる。最大径は、体部の上方にあり、底部は底面の中央がくぼむ。

器台（8）は、垂下する口縁部に擬凹線をめぐらせた近江系のものである。

時期は弥生時代後期後半のものである。

SI 2

弥生土器が、少量であるがまとまって出土したが、残りが悪く大半は小片であった。

壺は、二重口縁壺（9）で、内面の受け部が広く、擬口縁との接合部が突帯状に張り出している。口縁部はやや屈曲して大きく外反し、端部へ薄く尖って終る。二重口縁壺（3）と比べると、3の器壁が全体に5mmほどと薄く整っているのに対して、9は部分的に器壁の厚さが異なり、ことに頸部では約9mmと厚い。また、内面の受け部の幅も広がっている。

鉢（10）は、受口状口縁のものであるが、口縁部は近江系の鉢より内傾している。また、口縁部や体部に施文はされていない。全体に被熱している。側壁部分から、単独で出土した。

時期は弥生時代後期後半新相のものと考えられる。

SI 3

弥生土器の壺、甕、鉢などが出土しているが、すべて小片であった。

壺は、広口長頸壺（11）がある。直立する頸部に口縁部が大きく広がる。体部外面にはヘラミガキが残る。

甕（12）は、右上がりの叩きを施した底部がある。

鉢は、近江系の受口状口縁をもつと思われるもの（13）である。小片であるが、体部の肩部に5条の櫛描平行線文をめぐらせ、その下に右上がりに9個の刺突列点文をめぐらせている。14も、底部を欠くが鉢と思われる。やや内湾気味の口縁部は、端部が薄く尖って終る。底部中央には、直径2mmの焼成後にあけた小孔がある。

時期は弥生時代後期後半のものである。

SI 4

弥生土器の壺、鉢などが出土しているが、少量ですべて小片であった。

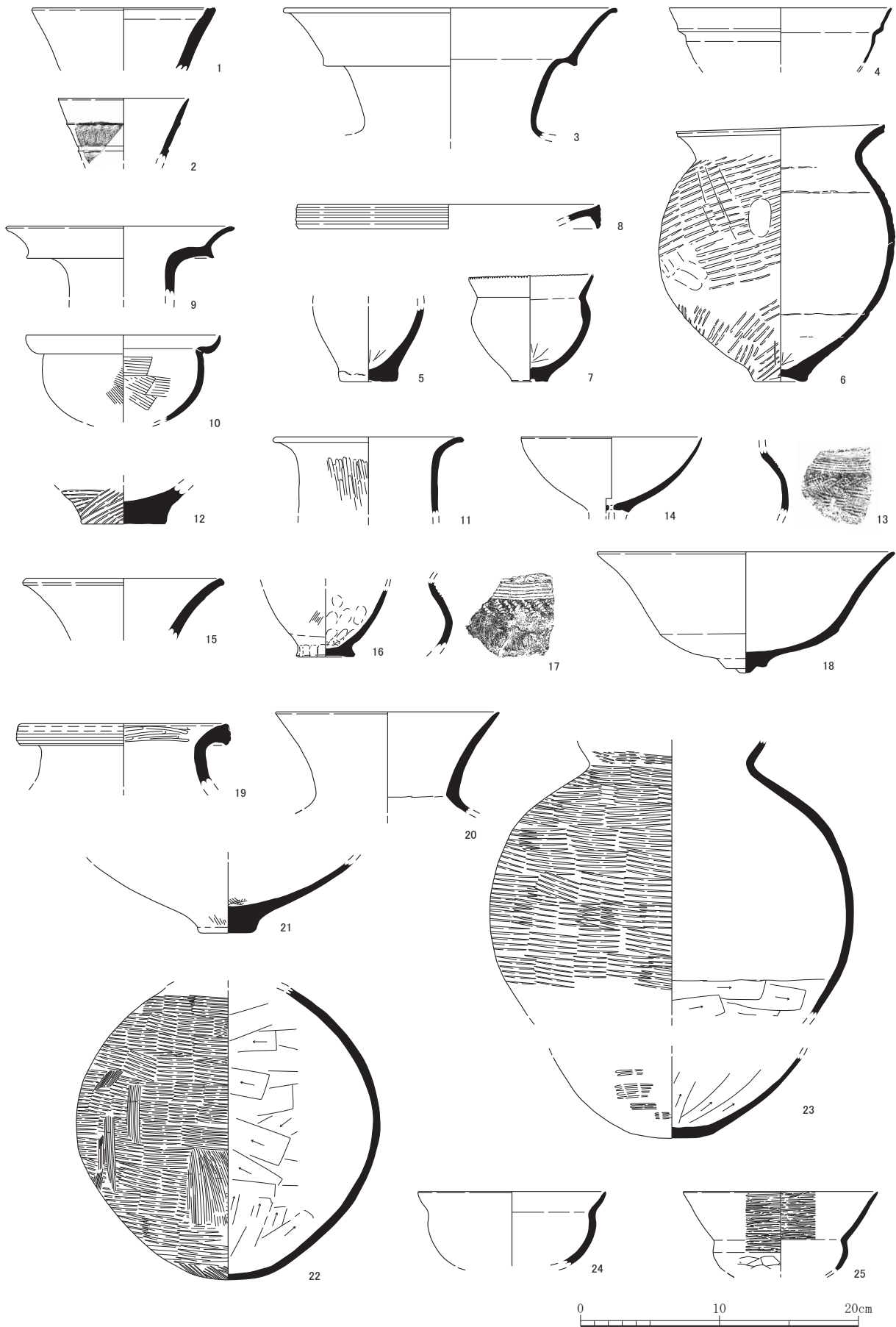
壺は、広口壺（15）と小型壺（16）がある。ともに外面は無文である。広口壺（15）の口縁部は大きく外反し、端部は外傾している。小型壺（16）の体部と底部の境界には指オサエの痕が顕著である。

鉢は近江系の受口状口縁をもつと思われるもの（17）である。小片であるが、体部の肩部に5条の櫛描平行線文、その下に左上がりに5個の刺突列点文をめぐらせている。

時期は弥生時代後期後半のものである。

SI 5

古式土師器の高杯がまとまって出土したが、残存状態が悪く摩滅が著しい。



第19图 第1区出土土器实测图1 (缩尺 1/4)

包含層 (1~4)、SI1 (5~8)、SI2 (9·10)、SI3 (11~14)、SI4 (15~17)、SI5 (18)、SI8 (19~24)、SK9 (25)

高杯（18）は、杯部の底部と口縁部との境界が鋭く屈曲し、口縁部が外上方へ大きく外反する、杯部の深いものである。

時期は古墳時代の布留式古段階～中段階のものである。

SI 8

古式土師器の壺、甕、鉢が出土している。残存状態は比較的良好である。

壺（19）は、短く外反した口縁部を肥厚させ、外面に凹線を施しているが、上部が剥落している。また内面にヘラミガキがみられる。

直口壺（20）の口縁部で、口縁部は外反し、端部は薄く尖って終る。内面の口縁部と頸部の境界は、明瞭にくの字状に曲がり稜を作る。21は、大きな体部から突出した小さな底部である。胎土は精良で、器体はヘラミガキを施す。同一個体ではないが、大きな球形の体部をもつ無文の大型壺ではないかと推察される。

甕（22・23）は、共に口縁部を欠損する。丸みを帯びた体部中央に最大径がくる丸底のものである。ただ（23）は同一個体であるが、底部は接合できなかった。底部体部外面には、水平あるいはやや左上がりのタタキを施し、内面はヘラ削りしている。ただ、底部は完全な丸底ではなく、わずかに平底の痕跡が残る（23）。またタタキも、弥生時代後期の甕（6）のタタキに比べると幅が細くなり、庄内甕の影響がうかがえる。

鉢（24）は、やや内湾気味に外方に広がる短い口縁をもち、端部は薄く三角形状に収まっている。底部を欠失するが、丸底と思われる。

時期は古墳時代の庄内式のものであるが、壺（19）は弥生時代後期の弥生土器が、SI 8の埋土に混入したものであろう。

SK 9

小型丸底土器（25）は、内湾しながら外上方に大きく開き、張りの小さな丸底の底部をもつ。口縁部の広がりには比べ、体部が小さく扁平である。口縁部は内外面共に横方向のヘラミガキ、底部下半はヘラ削りする。

時期は古墳時代の布留式古段階～中段階のものである。

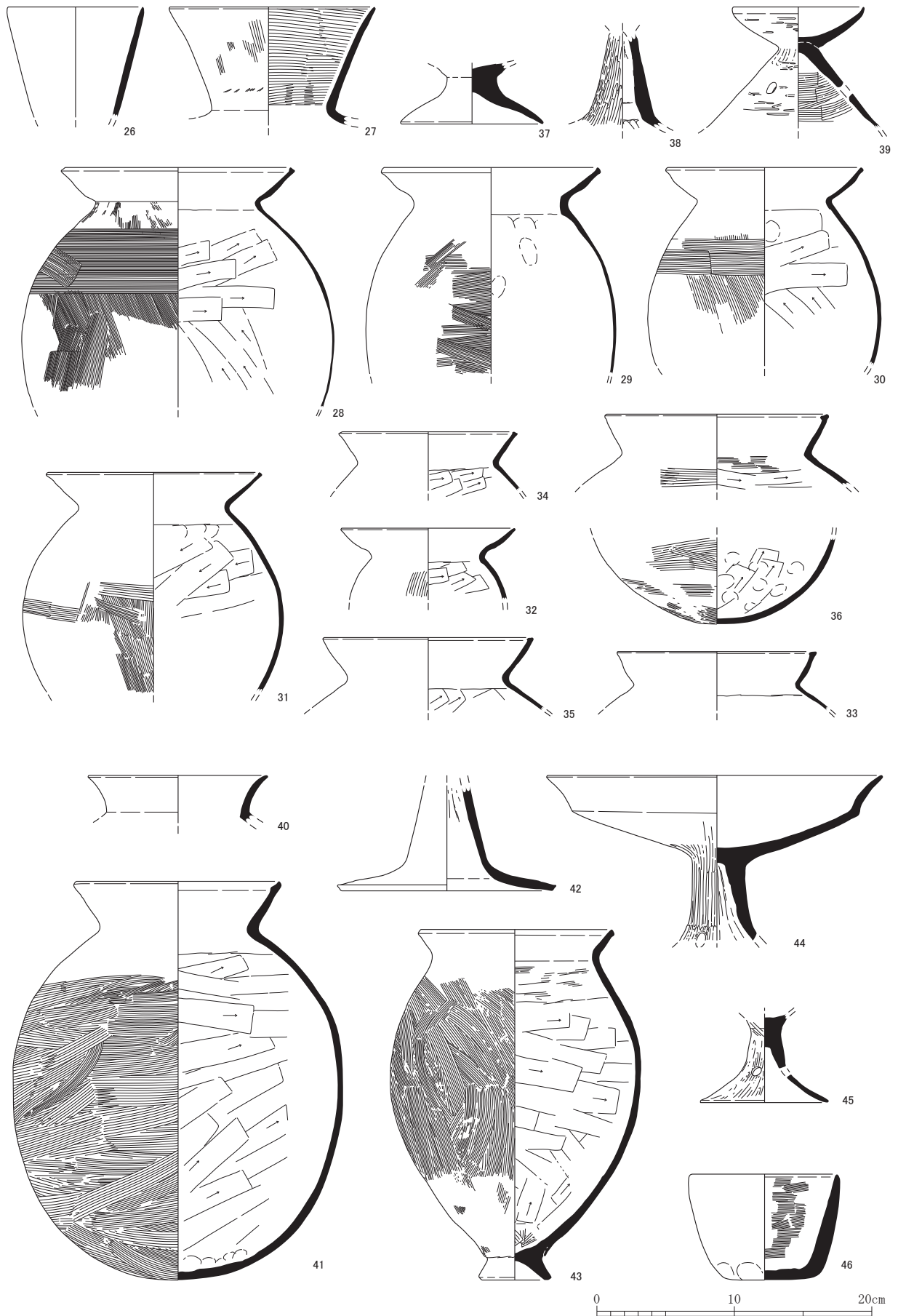
SK 8

布留式土器の甕を主体に、古式土師器の壺、高杯、小型器台などが出土している。また、一部弥生土器が混っている。

細頸壺（26）は、口径が頸部より大きく、口縁端部はやや内側に向けて尖るような形でおさまる。摩滅が著しいが、わずかに外面にヘラミガキが残る。

直口壺（27）は、口縁部が外上方へ真っすぐにのび、端部はわずかに外反する。内面全体に横ハケを施す。いわゆる「チョコレート色」の色調、胎土に金雲母や角閃石を含むことなどから、生駒山西麓の土器である。

甕（28～36）は、口縁部はやや内傾ぎみに広がり、底部は丸底である。器壁が薄く、体部外面をハケ調整を施し、内面は頸部よりやや下半から底部までヘラ削りを行う。口径でみると、15.5～16.0 cm（28・29・31・36）、14.0～15.0 cm（30・33・35）、12.0～13.0 cm（32・34）



第20図 第1区出土土器実測図2 (縮尺1/4)
 SK8 (26~39)、SK2 (40~42)、SK3 (43~45)、SX2 (46)

の三つに大別できる。また、口縁端部の形状は、内面に断面三角形に小さく折り返したもの（28・29・31・34）と、肥厚させたもの（33・35・36）、肥厚せずに終らせるもの（30・32）の三種に分けられる。

脚台（37）は、体部が残存していないため、器形不明である。短い脚台であるが、裾はわずかに内湾して大きく広がる。外面はヘラミガキ。時期不詳。

高杯（38）は、脚部で透かし穴はない。外面ヘラミガキ。

小型器台（39）は、口縁端部にわずかに立ち上がりのみられる浅い杯部に、杯底部よりほとんど外下方に脚部が開き、三個の円孔を穿っている。裾部の広がりには杯部口縁径より大きい。胎土は精良で、器体はヘラミガキを施す。

古式土師器の時期は、古墳時代の布留式古段階～中段階のものである。弥生土器はSI8と同様、埋土への混入と思われ、後期後半のものである。

SK 2

壺（40）の口縁部で、緩やかに外反し、端部に向けて薄くなる。

甕（41）は口縁部は内面端部の肥厚部が大きく内傾する。体部は、ややのびた球形を呈し、底部は丸底で、内面には指頭圧痕が残る。体部外面は、頸部よりやや下半から底部までハケ調整を施し、内面は頸部よりやや下半から底部までヘラ削りを行う。第1区の各遺構より出土した布留式の甕の中では、器壁が約7mmと最も厚い。

高杯（42）の脚部。器壁の薄い中空の脚部で、透かし穴はなく、裾が大きく開く。

時期は古墳時代の布留式新段階のものである。

SK 3

甕（43）は、口縁部から底部まで残存していた。くの字状の口縁に、やや長い胴部をもち、底部には小さな裾広がり脚台がつく。体部外面は縦ハケ調整で、内面上部はナデ調整を施す。

高杯（44）は、大きく開く深めの杯部に、中空の脚部がつき、脚部内面にはシボリ痕が残る。脚柱部から裾が広がる部分に円形の透かし穴を三孔穿っている。外面は全体にヘラミガキで仕上げられている。45は、44と同じ位置に円形の透かし穴のある小形高杯の脚部である。脚柱部が短く、裾は緩やかにハの字状に広がる。外面はヘラミガキで仕上げられている。

時期は弥生時代後期後半のものである。

SX 2

鉢（46）は、平底で体部の器壁が最大14mmと厚い。口縁部は尖り気味におさめている。体部外面はナデ、内面は横ハケ後にナデで調整している。

時期は弥生時代後期のものであろう。

SK 5

古式土師器の小型丸底土器を主体に、壺、甕、高杯が出土している。残存状態は比較的良好である。

壺は二種類ある。小型壺（47）は、小型丸底土器より一回り大きく、口縁部は外反するが短い。体部は球形で、最大径は体部上方に認められる。壺（48）は、器壁は薄く、胎土は精良、おそら

く器面をヘラミガキした、中形の壺である。くの字状に曲がった口縁部はやや内傾ぎみに上方へのび、端部は薄く尖って終る。体部は球形になるものと思われる。

小型丸底土器（49～51）は小型壺に比して口縁部が長く、体部はやや扁平になるが球形をなす。口縁部は、体部最大径より大きくは広がらない。口縁部の形状は、頸部近くにふくらみを持ち、端部は薄く尖って終るもの（49・50）と、内傾ぎみに開き、端部をわずかにつまみあげるもの（51）がある。また、外面は体部にハケを残すもの（49・51）と、ナデ仕上げのもの（50）とがある。その中でも（50）は、底部の厚さが最大で17mmと分厚いのが目立つ。

甕（52）は、器壁の薄い布留式の甕である。口縁部は内傾するが端部は肥厚せず、薄く尖って終る。

高杯の杯部（53）は、口縁部との境界が稜をなして屈曲し、口縁部は大きく外反し、端部へ薄く尖って終る。外面の調整は、横ナデの後、全体を粗くヘラミガキしている。脚部は54は中空で、下位で低い裾が開く。外面はヘラミガキを施し、脚柱部内面には、板ナデ痕が残る。55は脚柱部で、やはり中空である。外面にはヘラミガキが残り、内面はヘラ削りしている。

壺、小型土器、甕など各器形の器壁は、総じて4.5～5.5mmと薄い。

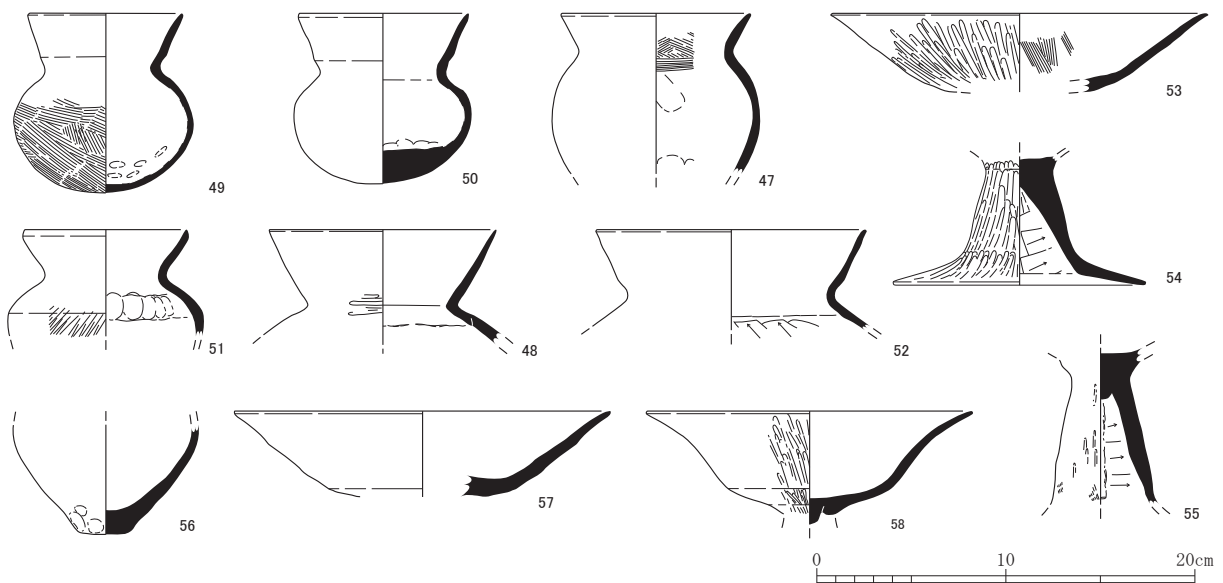
時期は古墳時代の布留式新段階のものである。

包含層(K 3区)

北半K 3区の包含層中に土器散布が密な部分がある。弥生土器と土師器が混在するが、小破片からなり、表面の剥落が著しい。

壺は、小型壺（56）がみられる。ナデ仕上げされた下半部のみで、やや突出した安定の悪い底部をもつ。

高杯（57・58）は杯部のみが残存する。（57）は杯底部と口縁部との境界が稜をなして屈曲する。口縁部は大きく外傾し、端部へ薄く尖って終る。高杯（58）の杯部は、杯底部から緩やかに立ち



第21図 第1区出土土器実測図3（縮尺1/4）
SK5(47～55)、包含層(K 3区)(56～58)

上り、途中から大きく外反する。土器表面は剥落が著しいが、一部にヘラミガキが残る。

時期は、56は弥生土器で弥生時代後期後半、57・58は土師器で、古墳時代の布留式古段階～中段階である。

2. 土製品 (第22図)

支脚 (59) SI2より出土した。上部を含めて大きく破損しているが、2側面と底面が残っている。残存部の側面の長さ5.9cm、幅3.9cm、高さ4.7cmである。残存する側面の形状からみて、中実の烏帽子形をした支脚であろう。全面被熱して、表面と芯の部分に境界がみられる。SI2より出土した土器の年代から、第V様式後半新相のものである。

3. 石製品 (第22図)

不明石製品 (60) SI1の北側で、床面近くから出土。土器の共伴はなかった。

珪質頁岩。未製品か。幅5.65cm、厚みは1.2cmで、長さは一端を欠損するため不明であるが、現況で8.3cmである。欠損していない一端は、打ち割り面を磨いている。

幅、厚さを整えようと粗く打ち割っており、図示した正面の下部には、一部に磨かれている部分がある。石材としては、桂川、賀茂川流域に広く産する。



第22図 第1区出土石製品・土製品実測図 (縮尺1/2)
SI2 (59)、SI1 (60)、SI8 (61)、SK5 (62)

不明石製品 (61) SI 8 出土。砂岩ホルンフェルスで、黒雲母の微細な析出により青黒い色調を呈している。両端に、嵌入した石英の脈が残る。表面は人為的に磨かれており、骨に似た形状をする。断面は丸く、厚みは7～12 mm。長さは、両端が欠損するため不明であるが、現況で36 mmである。用途は不明。石材は、賀茂川流域に多くみられる。

砥石 (62) SK 5 出土。砂岩。最大部で、幅 6.1 cm、厚さ 4.4 cmあり、長さは両端を欠損するため不明であるが、現況で 10.9 cmである。表裏、両側面の四面に使用痕、加工痕が見られる。

底面 (d 面) は水平である。側面 (a、c 面) は一方が現存部で 4.4 cm、もう一方がやはり現存部で 2.8 cmである。上面 (b 面) は、明瞭に一方行に向って傾いている。各面の状況は、次のとおりである。

- ・ a 面 面は全体によく使われて磨かれている。幅 20 mm、深さ 4 mmの、断面形が緩いV字形をした、深い砥ぎ痕が残る。

- ・ b 面 面は全体によく使われているが、両端 7～12 mmを残して、中央部全体が砥ぎによって深さ 3 mmほど浅くくぼんでおり、その部分に細かな砥ぎ傷がみられる。

- ・ c 面 面全体がよく使われて磨かれている。使用によって中央部が 5 mmくぼむ。表面に砥ぎ傷は見られない。

- ・ d 面 中央部が 3 mmとわずかにくぼむ。面全体を磨いているが、他の三面ほど滑らかでない。両端 5～12 mmを残し内側のくぼんだ部分に、原石から砥石に加工するとき、表面を整えるために行った敲打痕が残る。

石材は、市内および丹波台では産出しないもので、和泉など他地域産の砂岩の可能性はある。

4. 木製品 (第 23 図)

第 1 区 SK 5 から出土した。全体的に劣化しており、加工痕が磨滅している部分が多い。

(1) 板状木製品

63 は最長 24.7 cm、残存幅 7.6 cm、厚さ 0.8 cmで、一辺は木目に沿って割れ、欠損している。樹種はヒノキである。両面にケズリ痕があるが、一面は摩耗し観察不能で、かろうじてケズリ痕がわかる程度である。側面も三辺ケズリ痕がみられる。また、湾曲する側面に 1 ヶ所半円形状にくり抜きが確認でき、両面から削りこまれている。半円形状にくり抜かれている部分付近の側面は凸状に加工されている。

64 は最長 23.5 cm、最大幅 9.2 cm、厚さ 0.7 cm、一部欠損するがほぼ完形。樹種はヒノキである。穿孔は 3 ヶ所あり、3～5 mm程度のものが 2 ヶ所、1 cm程のものが 1 ヶ所確認できる。それぞれ両面からくり抜かれている。

65 は残存長 24.6 cm、残存幅 3.4 cm、厚さ 0.9 cm、側面一辺が欠損する。樹種はコナラ属アカガシ亜属である。腐食が進み、薄くなっている部分がある。側面には一部ケズリ痕が見られる。

(2) 棒状木製品

66 は残存長 24.1 cm、最大幅 1.8 cm、厚さ 1.4 cm、全体が腐食しており、残りが悪い。樹種はヒノキである。一端は欠損している。もう一端は尖っており、先端より約 8.7 cm付近まで炭化している。

67は残存長52.4cm、最大幅3.8cm、厚さ3.0cmである。全体に腐食が著しく、半面が欠損し、両端が折損している。樹種はスダジイである。中央部は幅1.8cmまでえぐられるような形で劣化している。

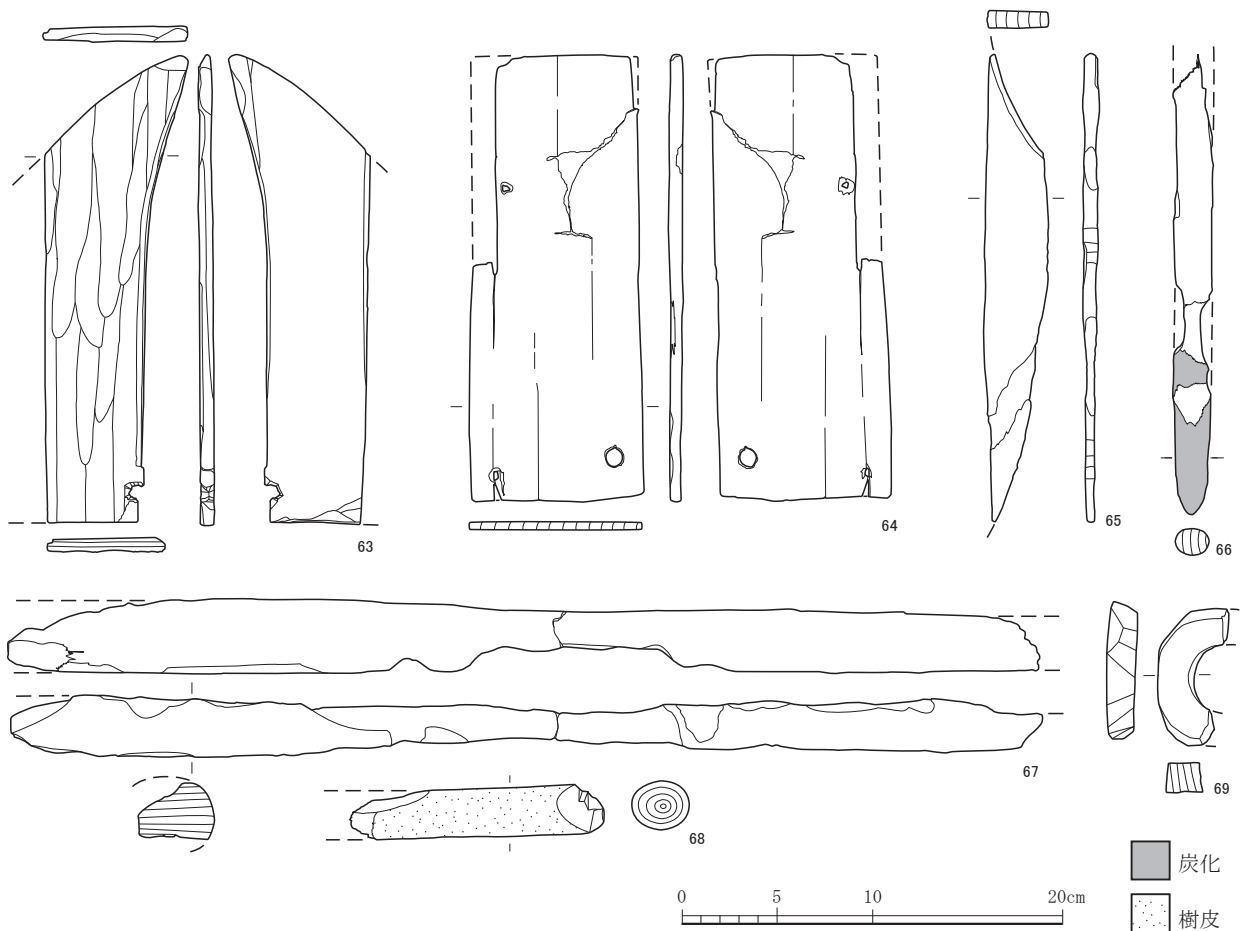
68は残存長13.4cm、最大幅2.6cm、厚さ2.5cmであり、一端は折損している。樹種はサクラ属である。一面に樹皮が残存し、ほぼ原木の枝のまま利用されている。一端は削り落として、不定形に丸く加工されている。

(3) 環状木製品

69は最大長7.2cm、残存幅2.0cm、厚さ1.5cm、両端が欠損する。樹種はコナラ属アカガシ亜属である。環状の側面は整形しており、ケズリ痕が残る。環内面は残りが悪く加工痕は確認できない。

5. 金属製品 (第24図)

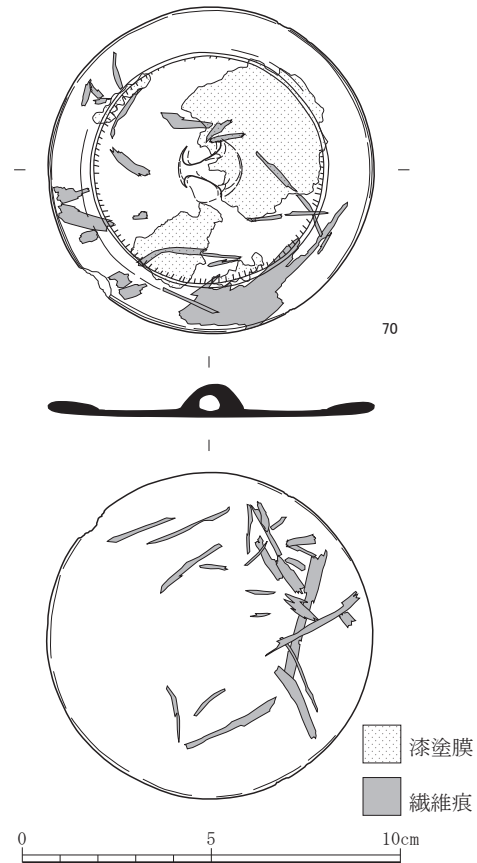
小型仿製鏡(70) 銅鏡埋納ピット(1171)から出土した。ほぼ正円の平縁の青銅鏡で、縁辺に小さな欠落があるがほぼ完形品である。法量は、直径8.6cm、厚さ0.15cm、重量は57.9gである。鏡面はゆるやかに凸面をなす。背文は平縁の内側に楡歯文をめぐらせるが、内区には文様は認められない。平縁は幅1.2~1.4cm、厚さ0.3cmである。楡歯文は鑄造にむらがあり不明瞭だが、平縁の内周およそ2/3で確認できる。楡歯の長さは0.3cmでほぼ直行するが、やや左回りに傾く。



第23図 第1区出土木製品実測図(縮尺1/4)

鈕は幅 1.6cm、厚さ 0.8cm を測り、獅子鼻状で角は丸みを帯び、楕円形の鈕孔が大きく開く。鈕孔の内面は滑らかに磨かれている。

鏡背のほぼ全面と鏡面のおよそ半分には、有機質が認められる。植物質の繊維が付着し、鏡背の内区には線維の上を漆塗膜が覆っていた。植物の種類は特定できなかったが、アサやイネなどと類似する (P57～58 参照)。



第 24 図 小型仿製鏡実測図 (縮尺 1/2)

第 3 節 第 2 区の遺物

遺物は第 1 区に比べ少なく、包含層よりごく少量出土したほか、2、3 遺構に伴うものがあつた。

1. 土 器 (第 25 図)

第 1 遺構面 (下面) 包含層

まばらではあるが、全体に須恵器の杯、甕体部などが散布する。

須恵器の杯 (71・72) は、いずれの口縁部も外上方へ直線的にのび、やや外方に開く低い高台をもつ。

須恵器の杯身 (73) は、口縁部は外上方へ直線的にのび、端部で外反し丸く収める。

時期は長岡京期のものである。

SK 1

須恵器の杯身 (74) は、全体が小型化した杯身で、立ち上がりがやや内傾し低い。外面底部はへら切のままである。

土師器の鉢 (75) は、外面をへらミガキした、胎土の精良な土器で、内傾する口縁部から鉄鉢形かと思われる。

時期は、7 世紀中ごろの飛鳥Ⅱ期のものである。

SK 2

土師器の甕 (76) は、端部をつまみあげた短い口縁部をもち、体部は最大径がわずかに口縁部より大きい球形を呈している。体部の外面にはハケを施す。

時期は長岡京期のものである。

第 2 遺構面

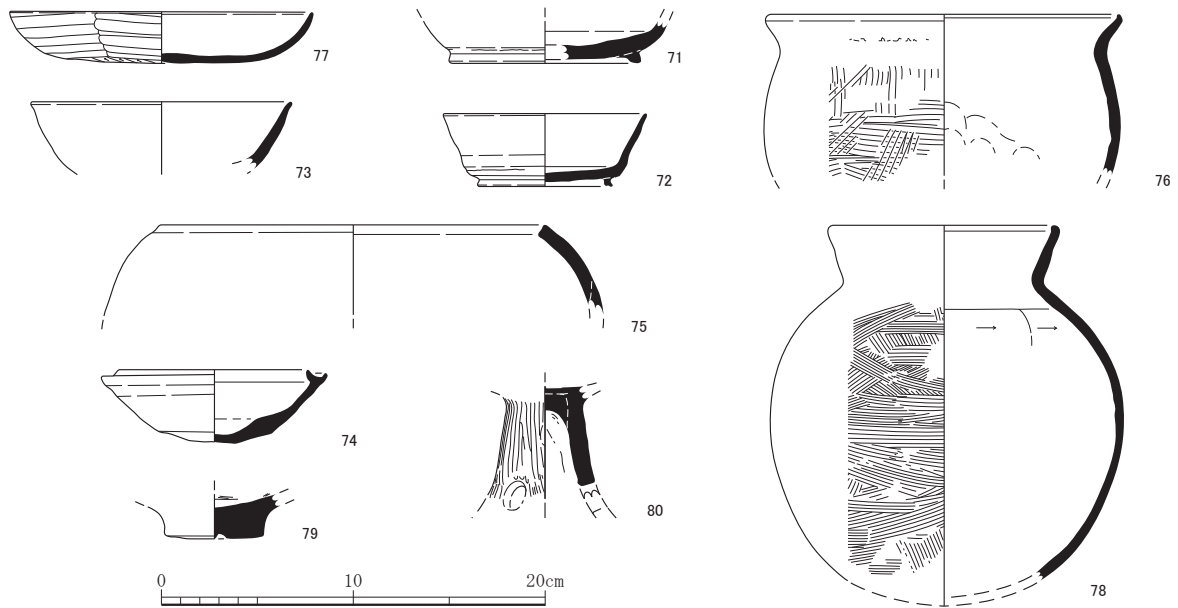
SK 6

土師器の皿 (77) は、外面は底部から口縁部付近までへら削りを施す c 手法の皿で、法量区分も長岡京期土器と一致する。

時期は長岡京期のものである。

SK 5

甕 (78) は、南壁面の SK 5 より出土したものである。口縁部は内傾するが端部は肥厚せず、



第25図 第2区出土土器実測図（縮尺1/4）

第1遺構面（下面）包含層（71～73）、SK1（74・75）、SK2（76）、SK6（77）、SK5（78）、第2遺構面包含層（79・80）

端部を内面に丸くおさめる。体部は球形で、外面は頸部よりやや下半から底部までハケ調整を施し、内面は頸部よりやや下半から底部までヘラ削りを行う。布留式の甕に分類されるが、口縁部を含め器壁は、厚さ約4～6mmと厚い。

時期は古墳時代の布留式中段階新相のものである。

第2遺構面包含層

調査区北西のA7区に、わずかに弥生土器の散布が認められた。

壺（79）は、底面に木ノ葉痕のある、突出した小さな底部である。

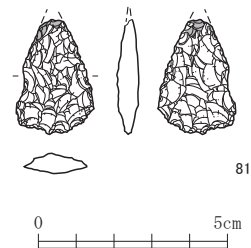
高杯（80）は、外面をミガキ調整した中空の脚部で、脚柱部から裾が開く部分に円形の透かし穴を三孔穿っている。

時期は共に弥生時代後期後半のものである。

2. 石器（第26図）

石鏃（81） 第1遺構面（上面）のピット1216（第17図）より出土。

石材は、灰色みがかかったチャートである。現存長3.1cm、最大幅2.1cm、厚さは最大0.6cm、重量3.5g。尖端部を欠くが、ほぼ完形である。不整形なやや丸みをもった基部がわずかに認められる。両面とも各辺より中心部に向かって剥離を行って、成形している。細かな成形、石材などからみて、縄文時代のもものと推定される。



第26図 第2区出土石鏃実測図（縮尺1/2）

第5章 要 説

第1節 第1遺構面の遺構

第1区・2区共に、上層面では小溝群が検出された。1区において検出された小溝群は、長岡京跡等でも検出されているような約5.5mの間隔で規則性を持つものではなかった。また、溝内からは小片であるが、瓦器が出土している。2区において検出された小溝群については、第1区よりも小溝群の密度が高く、部分的に3～4mの間隔で格子状に掘削されており一定の規則性を持っていたように見られるが、瓦器や玉縁状の口縁をもつ白磁碗などの出土遺物などからみて12～13世紀ごろの遺構と考えられる。

小溝群の性格については、長岡京廃絶後に時間を経て農地化された、耕作に伴うものと考えられる。

長岡京の遺構は、第1区では発見されなかったが、遺物は小溝などからその時期の須恵器片などが少量出土している。その状況は第2区でも変わらないが、第2区では長岡京期の遺物を少量含む土坑が検出されている。

また第2区では、飛鳥時代中ごろの土器を伴う土坑（SK1）が1基発見された。しかし、第1、2区にそれ以外、同時期の遺構も遺物も出土しておらず、その性格は不明と言わざるを得ない。

第2節 第2遺構面の遺構

（1）第1区の遺構の分布状況

第1区第2遺構面の地形は、調査区南側で標高約14.4m、中央付近で14.1m、北側で14.2m前後となっており、南側が一番高く、中央で低くなった後、北側で再び高くなる傾向がみられる。これらの地形に伴い遺構の分布状況にも変化が見られた。特に竪穴建物は、調査区中央より南に分布する傾向がみられる。また、その中でも、弥生時代後期の竪穴建物やピット群が南側に集中している。

このうち、小型仿製鏡埋納ピット（I171）は、近接して検出された□の字状にめぐる溝（SX1）が、周囲をめぐっていた可能性がある。この範囲は、遺構面に地山の礫が露出し、明らかにSI1～3などの竪穴建物の遺構面とは異なった状況が観察された。これら調査区の南側で検出された遺構とは異なり、弥生時代と推定される方形周溝墓（SZ1）や、弥生時代後期、古墳時代中期の土器などを伴う土坑（SK2、3）や、土坑墓を推定させる楕円形のプランをもつ土坑（SK4）などは、調査区内の地形では、中央から北側にかけての高まり部分に分布しているが、南側に比べると遺構の密度は減少する。

古墳時代の遺構も弥生時代後期の竪穴建物同様、調査区南側に分布し、一部弥生時代の竪穴建물에隣接するものもあるが、位置としてはすべて弥生時代の竪穴建物より北側に形成されている。また、弥生時代の各竪穴建物の時期が比較的短いのに対して、古墳時代の竪穴建物や土坑では、庄内式から布留式まで時間幅がある。

(2) 第2区の遺構の分布状況

第2区では、この時期に相当する層として第2遺構面があげられる。調査区南では標高14.1m前後で、北では、14.3m前後で緩やかに南へ高くなり、ほぼ第1区と同様の地形であるが、地面は、砂礫層であった。土坑、ピットが検出されているが、遺物は殆ど出土せず詳細は不明である。弥生時代の遺構は検出されておらず、A7区で包含層中より弥生時代後期の土器が少量出土したのみである。また、古墳時代の遺構もほとんどみられず、調査区の南壁で検出した土坑(SK4)より、ほぼ完形の布留式土器の甕(78)が横倒しの状態で出土したのみである。

第3節 下層の遺物—弥生土器・古式土師器の年代

(1) 弥生土器

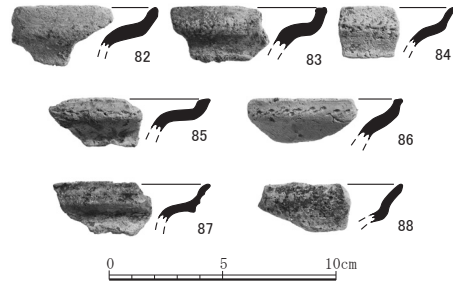
SI1～4より出土した土器は、器種としては長頸壺がみられず、小型壺などの小形品が目立つほか、全体に小形化傾向が増すことなどからみて、第V様式の後半に位置づけられるものである。また、遺構の重複関係から、SI2はSI1より新しく、出土した土器を比較すると、SI2の近江系の受口状口縁の鉢(10)は、口縁部が退化していることや、SI1と同時期と考えられるSI3、4より出土している受口状口縁鉢(13・17)と比較しても、SI3、4のものでは肩部に櫛描平行線文や刺突列点文などの文様が描かれているのに対して、SI2の鉢は無文化している。また口縁部の小破片でも、SI1から出土した鉢(第27図 82～84)と思われる受口状口縁には、顎部に刺突列点文が施されており、やはりSI2の鉢より古い様相がみてとれる。こうしたことからわかるように、SI2の鉢は、SI1、3、4に比べて後出的であり、遺構の前後関係とも矛盾しない。

次に遺構の重複からみると、SX2とSI1が重複し先行している。ただSX2は分割成形による底部を鉢(46)にしたものの単独出土で、類例に乏しく編年上の比較が難しいが、SI1の土器より古いものとして理解できる。安定した平底で、体部より底部の器壁が薄く作られているなど第V様式の土器と異なる点もあるが、簡略化したつくりや全体的な出土土器の傾向などから、第V様式の範疇に収まるものであろう。

SK3出土土器は器種、個体数が少ないが、甕の長くのびた体部の形や、畿内における台付甕の出現の時期、高杯の形態や調整などからみて、小様式内での若干の前後があるかもしれないがSI1、3、4同様な後期後半の時期でとらえられるものである。また、遺構に伴うものではないが、布留式期のSK8の埋土に混じる細頸壺(26)は後半新相に、庄内式期のSI8の埋土に混じる、口縁部外面に凹線を施した壺(19)も、調査区全体の土器から考えて、後期後半のものと同推察される。調査区北西のK3区包含層に混じる小型壺は、SI1やSI4の小型壺と共通することから後半古相、第2区下層A7区の高杯(80)や甕(79)は遡っても前半新相～後半古相までの範疇に収まるものであろう。

近江系受口状口縁土器 受口状口縁土器は、口縁部のみ抽出すると、比較的土器全体の残りの良いSI2出土の鉢(10)を含め、8点が出土している(第27図)。このうちSI1から3点(82～84)、SI8から2点(85・86)出土したものは、外面の顎部に斜め方向の刺突列点文をめぐら

せている。SI 3 と SI 4 の肩部の破片が残る土器も、口縁部は受口のものである。これら口縁部は、鉢と思われるが、SI 1 出土の (83) は、他のものが口縁端を外方に引出し、上面に明瞭な面を持たないのに対して、端部上面に明瞭な面をもっており、甕の可能性はある。これらに共通することは、受口の立上り部分が短く、外面の刺突列点文も退化して顎部に 2～3 点みられるのみで、弥生土器でも後期後半古



第 27 図 受口状口縁 (縮尺 1/3)
SI1 (82～84)、SI8 (85・86)、
SD2246 (87・88)

相のものとしてよいと思われる。その点は、(85・86) が埋土の混入品であることを除けば、各遺構出土の土器の年代と矛盾しない。調査区の北半にある溝 (SD2246) より 2 点出土したもののうち (88) は、他の鉢と同じく立上りが短く、端部を外方に引出しているが、外面への装飾がない。(87) は他のものより器壁が薄く、受口の明瞭な段をもつ屈曲からみて、甕の可能性が高い。外面には 2 条の凹線がみられるが、このような装飾は近江にも例をみないものである。これらは、先に見た顎部に刺突列点文がめぐらすものより後出的なものであろう。SI 2 と同時期の後期後半新相か、下っても庄内式併行期の早い段階までのものと考えている。

台付甕 SK 3 出土の台付甕 (43) は、畿内の第 V 様式の甕にはあまり例を見ないものである。第 V 様式の台付甕は、早くは奈良県唐古・鍵遺跡の第 45 号堅穴の上層より出土 (報告書土器番号 577) したものが知られている⁽¹⁾ ほか、『弥生土器集成』の「近畿」⁽²⁾ でも、大阪府瓜破遺跡の小型甕 (352) が 1 例収録されている。しかし、収録された第 V 様式の甕全体からみれば微量である。これらはすべて、体部の外面にタタキをもつものである。その後も『弥生土器の様式と編年』近畿編 I で、寺沢薫氏が台付甕にふれられているが、後期後半の土器を大別様式として設定した「第 VI 様式」以降にごく少ない例をみるとしている。河内 VI 様式として例示された、大阪府恩智遺跡や亀井遺跡の台付甕も体部外面にタタキをもつものである⁽³⁾。一方、本遺跡に地域的に隣接する近江南部には、くの字口縁をもつ台付甕はみられない。

SK 3 出土の台付甕 (43) は、共伴した高杯 (44・45) からみて後期後半の時期のもの⁽⁴⁾ で、外面にタタキをもたない甕であるものの、畿内の第 V 様式の台付甕と出現期は共通している。また第 V 様式の甕に無文のものもあることから、台付甕の多くみられる東海地方など遠隔地からの搬入品の可能性を考えることはないだろう。ただ、畿内全域でも出土数の少ないことは、特殊な用途で作られたものといったことも考えられる。それを思わせるのは、この台付甕が土坑内 (SK 3) に形もわからないような小さく割れた状態でありながら、復元するとほぼ完形に近い状態になったことや、伴出した土器が高杯に限られることなどがあげられよう。また、相前後する時期の遺構 (SI 2) で、やはり出土例の限られる、煮沸に伴う器具とされる土製支脚が出土していることと併せて興味深いものがある。

(2) 古式土師器⁽⁵⁾

庄内式 SI 8 より出土した 2 個体の甕は、口縁部を欠くものの残りも良い。体部外面のタタキは、SI 1 より出土した第 V 様式の甕のものより細いものが施されている。また、第 V 様式の甕に

はみられなかった体部内面のヘラ削りなど、明らかに庄内式甕の影響がみられる。また、大形の広口壺も庄内式にみられるもので、大きく庄内式中段階のものとしてとらえられる。

布留式 土坑 SK8 は比較的量に恵まれた、布留式土器の一括資料である。甕の口縁部は庄内式甕のように端部を小さく三角形に肥厚させるものが目についた。また、口縁端部を丸みをもって肥厚させるものも多く、内傾する面をもつ肥厚部のはみられない。精製土器の小形器台や小破片ながら小形丸底土器や鉢などの小形三種も含まれる。さらに胎土から生駒山西麓産の壺(27)を含むなど、第1区内で出土した布留式の中でも古相を呈している。平城宮朝集殿下層 SD6030 下層の土器⁽⁶⁾と共通するものである。近接して位置する SK9 の精製土器の小形丸底土器も、全体をヘラミガキし、底部を削って成形するなど古態を呈しており、SK8 土坑と同時期のものである。残りは悪いが SI5 や、K3 区包含層の高杯も、同時期のものと考えている。

SK5 出土土器も良好な一括資料で、小形丸底土器からみて新段階の古相(上ノ井手遺跡 SE030 下層⁽⁷⁾)のものである。最も新しいのは、SK2 で、甕の口縁の肥厚が長く内傾傾向にあり、体部が長手になり、器壁も他の布留式の甕に比べて厚めであるなど新しい要素が際立っている。布留式新段階新相(上ノ井手遺跡 SE030 上層⁽⁸⁾)に比定できよう。

(3) 土器よりみた遺構の変遷

土器の編年より遺構の形成順をみれば次のようになる。

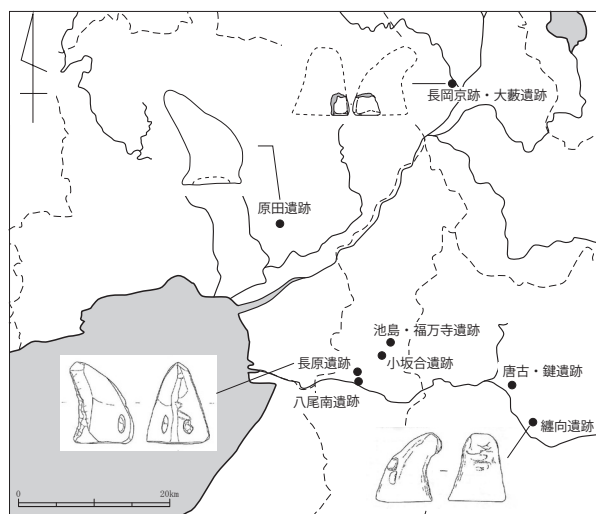
SX2 (第V様式?) → SK3、SI1、3、4 (第V様式後半古相) → SI2 (第V様式後半新相) → SI8 (庄内式中段階) → SK8、SK9、SI5 (布留式古段階～中段階中相) → 第2区 SK4 (3116) (布留式中段階新相) → SK5 (布留式新段階古相) → SK2 (布留式新段階新相)

方形周溝墓(SZ1)や□の字状にめぐる溝(SX1)など遺物が出土せず、年代の特定できない遺構もあるが、調査した遺構は弥生時代後期後半からはじまって、古墳時代中期布留式新段階新相まで連続する。

(4) 土製支脚

土製支脚は小林行雄氏によって命名され、炉中に三つ並べ据え、上のにせた甕などの煮沸容器を支え、現在の五徳のように使ったものであると、その機能を指摘された⁽⁹⁾。

土製支脚にはいくつかのタイプがある。SI2 から出土した土製支脚の破片は、復元すれば中実で先端に向かってわずかに一方向に曲がった、いわゆる烏帽子形土製支脚とよばれるものである。その分布(第28図)は主に河内、大和にあり、北部九州にも例外的にみられる。年代的には、近年の発掘資料では、庄内式から布留式の早い段階のものである。本例は第V様式後半の枠内でとらえられるもので、土器の併行関係から



第28図 土製支脚の分布

みても河内、大和のものよりもやや遡るものである。その意味では、戦前に発掘され弥生時代後期一第Ⅴ様式に遡るといわれていた大阪府豊中市原田遺跡例⁽¹⁰⁾も、同様な時期のものかもしれない。

鳥帽子形土製支脚については、田中清美氏の研究⁽¹¹⁾があり、その使用方法や用途については、

- ・ 3個一対で使われた。
- ・ 被熱痕から地床炉での一般的な炊飯の際に使用されたものではない。
- ・ 祭祀に関わる煮炊き、それも床上に設けられた火所で使われた公算が高い。

としている。また、纏向遺跡においても、調査結果の解釈として祭祀との関係が指摘されている。

こうした指摘に準拠するなら、鳥帽子形土製支脚が出土したSI2には、何らかの祭祀性がうかがえるのである。

第4節 小型仿製鏡をめぐって

(1) 小型仿製鏡埋納ピットと周辺の遺構

小型仿製鏡は、直径37cm、底部の断面形がU字形の深さ8cmのピット(1171)より出土した。ピットの埋土には、土器などの遺物は含まれていなかった。また、ピットより北に隣接する位置で、□の字状にめぐる溝(SX1)が検出されているが、この溝内からも遺物は出土していない。小型仿製鏡埋納ピットをはじめ、□の字状にめぐる溝(SX1)の範囲内から出土した遺物は、遺構確認の際に、溝およびピット周辺から弥生土器の小片が出土した程度である。また、溝のめぐる範囲内は、溝より北側に近接するSI1～3などの竪穴建物の建つ地盤より、地盤に大型礫が多く水はけがよい場所を占地している。

こうしたことを考慮に入れ、弥生時代後期と小型仿製鏡の形式から推定される年代や、溝より北側に近接するSI1、3などの竪穴建物の年代を勘案して、住居とほぼ時期差のない弥生時代後期後半古相のものか、それともSI1と重複する位置にあつて、床部分のみを残していたSI1、3よりやや新しいSI2の時期ではないかと推定している。

(2) 小型仿製鏡表面の付着物

小型仿製鏡表面の付着物は、検出時から細心の注意を払って取上げたこともあつて、これまで指摘されていなかったことを明らかにできた。

漆 鏡背に、部分的に漆の付着がみられる。ひとつの見方として、鏡背に文様が無いため装飾に直接漆を塗ったとも考えられた。しかし詳細に観察すると、漆の下に植物繊維があることから、この考えは否定できる。そうすると、漆を塗った容器に納めていたものが腐食し、それが鏡背に付着した可能性がうかがえる。鏡を納めた漆塗り容器の例として、楽浪漢墓では、漆塗りの奩に化粧道具としての鏡を納めた例が著名である。わが国の例としては、大阪府高槻市弁天山古墳群のB2号墳(古墳時代前期)で、漆塗筐に方格飛雲禽文鏡と仿製鏡、石釧が納められた状態で出土している⁽¹²⁾。

植物繊維 鏡面には植物繊維が付着していたが、古墳出土の銅鏡にみられる鏡を包んでいた布痕ではなかった。付着していた植物繊維は、幅1.5～10mm、長さは20～50mmあるが、布のよ

うに織ったものではなく、茎を押しつぶしたような平らな状態で残っている。さらに確認できる植物繊維の付着方向は、必ずしも一定ではなく、重なる部分も認められるが、全体をくるむようなものではない。しいて言うなら、限られた範囲で比較的一方向に巻かれているように思われる。鏡背には植物繊維と漆が付着しているが、植物繊維は漆の下に認められる。また紐孔に沿って残る植物繊維は、鏡面にみられたものより若干丸みをもつようにも思える。また鈕孔内には、植物繊維の付着は認められなかった。

科学分析の成果を引用すれば、この植物繊維は植物の種類は特定できなかったものの、アサカイネと推定されている。このことは、鏡の出土状況と照らし合わせて重要である。

アサで注目したいことは、今日まで麻布として用いられてきた以外に、様々な形で祭祀の場で使用されていることである。神事に例を求めれば、幣帛や注連などに用いられる。祓串ともよばれる大麻（おおぬさ）は、榊の枝に麻苧（あさお）や紙垂（しで）をつけたものであるが、麻苧の白色は清浄感をあたえるものとして、紙が普及する以前から用いられていたといわれている。また、民間信仰では、アサの皮を剥いだ麻幹（おがら）は、盂蘭盆の飾りに使われたり、迎え火に焚かれるなどしていた。また、精霊祭の供物を供える箸に、死者が冥土に旅立つ際の杖など、神聖な場にも用いられている。ちなみに「おがら」の「お」はアサの古名である。

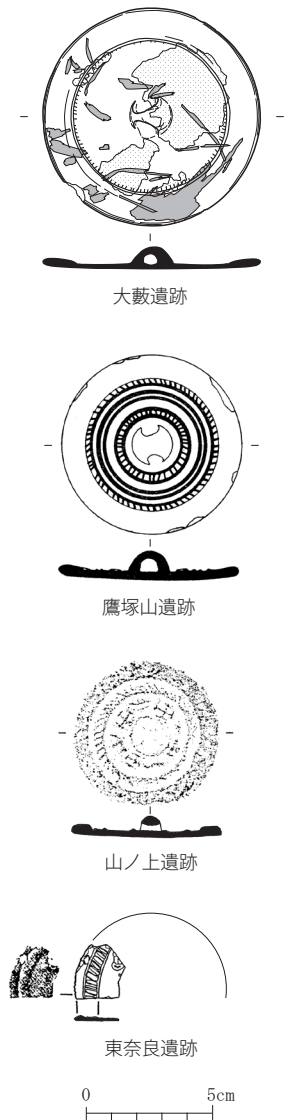
イネの場合も、アサほど具体的な例を示せないが、注連縄などアサが使われるのと同様な神事に用いられている。まだ稲藁が、今日の民具などにみられるように、生活にふんだんに利用されていないと推測されるこの時期、穀霊が宿るとされるイネの藁にも、アサと同様な意味をもたせることは可能である。

漆や繊維の付着状況から考えられることは、アサの繊維で鏡を括り、鏡の径より少し大きめの漆塗り容器一奩に納められていたと推測される。奩に納められた鏡を取り出しやすくするためのものである。鏡を取り出すとき、鈕を持ったり、鈕に通した紐を持って鏡を取り出したりはしない。鏡の両縁に指を入れたり、奩を逆さまにして取り出すなどと言うことは、祭器としての鏡の価値からすると論外であろう。鏡に縁に括りつけた紐の左右を、両手でつまんで取り出す。表面に付着した繊維は、そうした目的で鏡に巻きつけられていたと思われる。分析結果をもとに、一つの解釈を提示しておく。

（3）淀川水系出土の小型仿製鏡

淀川、猪名川水系で、弥生時代後期から古墳時代初頭の遺跡より出土した小型仿製鏡について概観したい。

まず、淀川左岸の大阪府枚方市鷹塚山遺跡から、重圏文鏡の一種とする直径約7cmのものが1面出土している⁽¹³⁾。出土状況は、鏡背を上にした状態で検出されている。遺構に伴うものではなかったが、出



第29図 淀川・猪名川水系出土の小型仿製鏡

土地点は遺跡全体の最も高所の、淀川に面する場所からであった。また、鏡のすぐ側から、信仰・呪術に関連した用途が考えられる分銅形土製品の、半折されたものが出土していることなどと合わせて、祭祀的要素が濃いものであると考えられている。遺跡全体の時期は弥生時代後期で、細頸壺や手焙型土器などを伴うことから、後期後半に位置づけられるもので、今回調査した本遺跡との共通点がみられる。

右岸では、大阪府茨木市東奈良遺跡で出土している。そのうちの一つは、昭和46年(1971)に遺跡発見の端緒となった小川水路改修工事で出土し、採集されたものである⁽¹⁴⁾。破損した小破片で、復元径は5cm前後である。文様は磨滅がひどく不明確で、鏡式は不明である。弥生時代後期後半から古墳時代初頭のものともみられている。

さらに発掘調査で、包含層より直径8.8cmの内行花文鏡系第Ⅲ型b類のものが1面出土しているが、出土状況など詳細は不明である⁽¹⁵⁾

また、猪名川水系では、大阪府豊中市山ノ上遺跡出土の小型仿製鏡は、弥生時代後期と推定される円形竪穴住居の埋土から、重圏文日光鏡系第Ⅲ型b類とされる直径6.1cmのものが1面出土している⁽¹⁶⁾。出土状況は、鷹塚山遺跡例と同様、鏡背を上にした状態で検出されており、鏡と同一面上から出土した土器から第Ⅴ様式の年代が与えられている。この鏡には、鏡背の櫛歯文帯、図分帯および円座の一部に赤色顔料がみられ、当初は鏡背全面に塗布されていたとみられている。

本例も含め共通することは、すべて集落遺跡からの出土で、出土状況の分かるものは、弥生時代後期のもので、鏡背を上にした水平の状態で検出されている。また、それら遺跡では鏡の祭祀性がうかがえる。あるいは鷹塚山遺跡、山ノ上遺跡例も検出されなかったけれども、本遺跡でも遺構からは容器の痕跡が認められなかったことから、あるいは鏡が有機質の容器に納められて埋められていた可能性も十分に考えられるのである。

第5節 弥生時代祭祀の復元

第1区下面遺構のうち、弥生時代後期の遺構の祭祀性について考えてみたい。

小型仿製鏡の出土状況は、ピット内に水平に埋置された状態とで、鏡背に付着する漆から、何らかの漆塗りの容器に納めていたものと推察された。鏡の両面に付着する繊維の状況から、鏡の両縁に繊維を括りつけていたものと考えられた。この状況は、鏡管から鏡を取出すための配慮であることは、前節でふれたとおりである。この鏡を納めた漆塗りの奩は残存していないが、容器が漆塗りであることから、当時の木製品としては特別なものであったろう。こうしたことは、小型仿製鏡が祭器であったため、特別扱いされていたことのあらわれであろう。

小型仿製鏡埋納ピット(1171)は、位置的にはその周辺をめぐる推定される□の字状にめぐる溝(SX1)内に存在する。この場所の周辺は、遺構面が大きな礫混りの層を遺構面としており、近接する竪穴建物のある場所に比べて水はけがよい。また、弥生時代後期のものと思われる土器片が散布はするが、遺物の量はきわめて少ない。溝に関して言えば、底が平らである。旧状から上部がどのくらい削平されていたかであるが、すでにみたように鏡を奩から取出すことを前提にして埋めていたとしたら、ピットの深さはあまり深くはできず、せいぜい数十cmほどの削平であ

ろうか。□の字状にめぐる溝（SX1）も小型仿製鏡埋納ピット（1171）に関連する遺構だとすれば、この溝も調査区北西端で検出された方形周溝墓の周溝のように深いものではない。ある地域を区画する境界機能をもった、一種の布掘り掘方としてとらえることもできる。そして、区画された範囲は、その中に小型仿製鏡埋納ピット（1171）を含むことから考えて、祭祀の場と考えられよう。祭祀の場といえば、そこで用いられた土器や祭祀遺物がそのまま遺棄されている場合もある。しかし今日でも、神社の祭祀などでは、祭儀の終わった後に使用した土器や器具などをその場から撤去し、別な場所に遺棄するケースも多い。小型仿製鏡埋納ピット（1171）や□の字状にめぐる溝（SX1）で区画される周辺で、出土した土器は小破片が少量散布する程度であったのは、そうしたことの反映ではなかろうか。

祭祀の場として考えた場合、方形溝の区画内に建物などの施設がないことは、□の字状にめぐる溝（SX1）はごく短期間、祭儀を行う場所を神域として意識させるための、境界の役割を果たしていたのであろうか。その状況を推定するなら、溝の底が平らで一定であることから、そこに遺構としては残りにくい柴垣などが設置されたことも考えられる。

次に、祭儀で重要な役割を担ったであろう小型仿製鏡埋納ピット（1171）は、区画内の中心にない。むしろ祭儀の中核となる中心部を避けたように埋められている。このことは、このピット自体が祭儀の際に大きく関わるものでないことを示していないだろうか。そこで考えられるのは、祭儀から次の祭儀までの間の、祭器の土中保管である。このことは、鏡が取出されることを意識して蓋に納められていることからわかる。そしてある時、その祭儀が終わりをつげたため、鏡は取出されることもなくそのまま地中に残されたのであろう。土中保管の鏡の存在が忘れられたのは、祭祀に関わる人々にとってこの鏡が他に転用できない性質のものであったか、それとも土中保管を知る人がごく限られた特定の人であったためとも考えられる。後者であったなら、佐原真氏が銅鐸の埋納で考えた⁽¹⁷⁾のと同様に、地中から祭器を取出すことも、また再び埋めることも、おそらく祭儀の一部として重要な行事であったのだろう。そのように考えると、本遺跡の小型仿製鏡には弥生時代の青銅製祭器としての共通性が認められるのである。

以上みてきたことを古典等から推測するなら、次のような情景が考えられはしないだろうか。

区画の中心部には榊を立て、それに鏡やアサの繊維で作った幣をかけて依代とする。そして、その前に棒材や板材などで組み立てた案を置き、その上に供物を供えた、神籠（かんなぎ）の場ではなかったろうか。祭儀終了後は、供物は持ち出され、棒材や板材は解体して撤去されたものと思われる。依り代としての役割を終えた榊は、通常儀礼終了後は祓い流される。その意味では、現在は埋没しているが、今回の調査地の東に近接して、北西方向から南東方向に流れる自然流路があったこと⁽¹⁸⁾は暗示的である。

小型仿製鏡とは別に、祭祀の可能性を示す遺物に、小型仿製鏡埋納ピット（1171）や□の字状にめぐる溝（SX1）の北西に近接するSI2から出土した土製支脚がある。土製支脚は、小林行雄氏により取り上げられて以来、煮沸にあたって五徳のように土器を支える役目をするものという機能的な面では、今日まで理解に変更はない。しかし、SI2から出土した烏帽子形土製支脚は、数多く知られておらず、日常的に用いられるものでないことは明らかである。また、その時期も

弥生時代後期、それも後半を上限に、庄内式から布留式の早い時期に限定して用いられている。そのため、煮沸器の補助具ではあるものの、底部をやや浮かせた特殊な煮沸の状況が考えられている。早く小林行雄氏は、山陰の古墳より出土した土製支脚を、墓前炊爨の祭祀に伴う遺物としてとらえた。ただこの時点では、土製支脚も竈、釜、甑が三点セットになったミニチュア炊飯具も、祭祀遺物とは断定せず、その行為から祭祀性を明らかにしようとした⁽¹⁹⁾。しかし、その後の資料の増加によって、遺物そのものにも祭祀遺物としての性格が述べられるようになってきた。

烏帽子形土製支脚について、祭祀との関わりに言及したのは、纏向遺跡の調査⁽²⁰⁾である。中でも辻地区土坑4の調査事例から、炭層に加えて特殊な木製品、モモの核、庄内式の纏向3式の完形土器などとの共伴状況より、火を伴う何らかの祭祀儀礼に用いられたものと考えている。調査者の一人石野博信氏は、『延喜式』に記載された諸祭祀のうち、いくつかの祭祀の祖形が古墳時代前期にまで遡るのではないかとみている⁽²¹⁾。また、烏帽子形支脚の集成を行い、考察を加えた田中清美氏も、一般的な炊飯の際に使用されたものではなく、祭祀に関わる煮炊き、それも床上に設けられた火所で使われたものと推定している。そして、用途の一つと纏向遺跡の調査で指摘されたような、「火と水に関わる祭祀」に伴う煮炊きの場で使われたものと結論付けている⁽²²⁾。

その意味では、神籠の場と推定されるSX1の側にある堅穴建物SI2での出土は、こうした烏帽子形支脚の考え方を補強するものであろう。

土製支脚と対比して、今ひとつ注目されるのはSK3出土の台付甕の存在である。畿内における台付甕は、畿内の甕にはあまり例をみないものであるが、第V様式後半の時期に限られてわずかにみられる。

一方、甕の脚台は東海地方の尾張では中期後半からみられ、後期になると東海地方一帯で台付甕が発達する。こうした東海地方の台付甕と近畿の第V様式の台付甕の脚台を比較すると違いがある。東海地方の台付甕の脚台は、低径に対して高さがあり比較的安定しているのに対して、近畿の第V様式の脚台は、底径に対して高さが高いことである⁽²³⁾。つまり、第V様式の甕の脚台では、底部がわずかに接地面から浮いているにすぎないのである。土製支脚の使用が、単なる土器の安定でなく、わずかに底部を浮かせることを意識したものであれば、第V様式の甕の脚台は土製支脚の使用と同じような火のかかり方が考えられる。そうであれば、出土数の少なさ、分布についてはさらなる検討が必要ではあるが、分布が限られていることなどから、土製支脚による煮沸と同様の使われ方がなされた可能性がある。また、その時期も、第V様式の台付甕が烏帽子形支脚に先行して出現し、ほぼその消滅と合わせるように烏帽子形土製支脚が出現することとも連動しているように思われる。そう考えるなら、本遺跡のSK3からの台付甕の出土状況が、形状もわからないほどバラバラの状態であったにもかかわらず、体部の一面が欠失するだけのかなりまとまった状態に還元されたのは、祭祀に用いた土器の廃棄の状態を示すものではなかろうか。そう考えれば、台付甕や土製支脚の出土したSI2とSI4は、まさに祭祀に関わる煮炊きを行っていた場所ということになる。そして、それがSX1で執り行われていた祭儀に供されるものであったなら、SX1の時期、鏡の使用された期間は、土器の小様式をまたがるだけの時間を考え

ねばならないであろう。また、ほぼ同時期に何棟が併立していたかは別として、4棟の建物がありながら、時期を違えるSI2とSI4の建物に火災がみられるのは、偶然であろうか。失火も考えられるが、祭祀に係る役割を担っていた施設としてみると、床面に生活に使用していた土器などが残っていないことや、焼失住居でありながら、炭化した柱材がみられず、また柱穴が明確で無いことは、堅牢な建物ではなく、祭祀期間中だけの短期間の使用を前提とした一過性の建物であったのかもしれない。また、共に類焼の無いことなどを含めて、儀礼終了後故意に燃やした可能性があるかもしれない。

遺物の面から考えると、SI2が土製支脚を伴っていることから類推して、SI4でも同様な炊爨が行われていたとするならそこで使用されていたのはおそらく台付甕であったろう。そして使用終了後に建物より運び出され、廃棄されて埋められたとしたら、SK3出土の台付甕は、時期的にみてSI4の時期に合致することから、SI4で使用された可能性も考えられる。もしそうなら、炊爨の祭祀は、SI4で行われて後、SI2にして移して営まれたことになる。土器の編年からみて、おそらく数十年から半世紀近くは継続していたのではないだろうか。こうした炊爨の祭祀が方形溝(SX1)内での祭儀に関わるものであるとするなら、□の字状にめぐる溝(SX1)や小型仿製鏡埋納ピット(1171)は後期後半古相の時期にはじまり、新相の段階でその役割を終えたことになる。

調査中はそうしたことまで認識できていなかったが、今後、視点を変えての火災住居の検討がまたれる。

また、今回の調査地点より北方約350mの地点では(第6図 15)、やはり弥生時代後期後半の時期が推定される大型掘立柱建物⁽²⁴⁾がある。わずかに柱穴から出土した土器は、森岡編年山城V-3とされる。V-3は後期を前半と後半(第V様式Ⅱ式)に分けた場合、その大半が後半にかかる⁽²⁵⁾とされており、その意味では今回調査した後期後半古相の遺構と同時期に存在した可能性が強い。

近畿各地で発見された弥生時代大型掘立柱建物の性格については、神殿、祭殿、倉庫、あるいは集会所など諸見解が出されている。しかし、いずれをとっても、非日常的な建物であることにはかわりない。こうした建物の存在は、大藪遺跡の特異性を示すものであろう。

古墳時代の遺構は、弥生時代ほど顕著に性格を示せないが、庄内式期のSI8より出土した、玉製品を思わせる緑がかった色調の、ややねじれた棒状の用途不明石製品(第22図 61)や、弥生時代後期の台付甕が出土したSK3のように、完形品に近い布留式土器の甕が埋まった土坑(第1地区SK2、第2地区SK4)など、興味深い問題もあるが、十分検討できなかった。

第6節 地震痕跡

1区では、8棟の堅穴建物を検出しているが、このうち調査区中央付近で検出したSI4～6では、液状化現象と思われる痕跡が見られた。西壁で土層を確認すると、下層の砂層から住居址覆土を貫いて火焰状に噴出している状況が見られた。このため、土層観察からは、明瞭な新旧関係を把握することは出来なかった。この状況は、調査区中央付近西側で特に顕著に見られた。また、

SI 4の一部を除き側壁も明瞭な立ち上がりを確認することは、できなかった。これは、本遺跡の地質が砂層を中心に構成されていることが影響していると考えられる。このため、液状化現象が起こると同時に、側壁も崩壊したものと思われる。また、SI 7については、出土遺物が無く、土層観察においても床面、側壁の立ち上がりを明瞭に捉えることが出来なかったため、SI 4とSI 5との新旧関係は不明である。

この液状化現象は、土層観察では、住居址の覆土を貫いているが、その上層の小溝群の確認面までは、達していないため、中世以前の地震によるものと考えられるが現時点でそれ以上のことは、不明である。ちなみに、地質図（第5図）によれば、調査地点には活断層が推定されており、今回の調査で間接的にそれを実証したことになる。今後、大藪遺跡をはじめとして、周辺の調査においても自然災害の痕跡に留意していく必要があると思われる。

【註】

- (1) 末永雅雄・小林行雄・藤岡謙二郎 1943 『大和唐古弥生式遺跡の研究』 京都帝国大学文学部考古学研究報告第16冊
- (2) 小林行雄・杉原荘介 1968 『弥生式土器集成』本編2 東京堂出版
- (3) 寺沢薫・森井貞雄 1989 「河内地域」『弥生土器の様式と編年』近畿編I 木耳社
- (4) かつて中河内の後期土器を5期に細分するにあたって、4期の指標とした「馬場川期」の中に含まれる。『弥生土器の様式と編年』の「河内地域」では(V-3~VI-1)にあたる。
丸山竜平 1976 「弥生式土器の終焉—稲穂貯蔵用壺の消滅と古墳文化の成立基盤—」『古代研究』10 元興寺仏教民俗資料研究所考古学研究室
兼康保明 1977 「久野部遺跡出土の弥生式土器の位置づけ」『久野部遺跡発掘調査報告書』滋賀県文化財保護協会
- (5) 本稿の編年は下記のものに準拠した。
西村歩 2011 「土器の編年 ③近畿」『古墳時代の考古学』I 古墳時代史の枠組み
- (6) 奈良国立文化財研究所編 1981 『平城宮跡発掘調査報告』X
- (7) 安達厚三・木下正史 1974 「飛鳥地域出土の古式土師器」『考古学雑誌』60-2
- (8) 註(7)に同じ。
- (9) 小林行雄 1941 「土製支脚」『考古学雑誌』31-5
小林行雄 1976 『古墳文化論考』所収 1974補訂 平凡社
- (10) 註(9)に同じ。
- (11) 田中清美 2013 「烏帽子形土製支脚の検討」『私の考古学』丹羽佑一先生退任記念論文集
- (12) 大阪府教育委員会編 1967 『弁天山古墳群の調査』大阪府文化財調査報告第17輯
- (13) 江谷寛・瀬川芳則ほか 1968 『鷹塚山弥生遺跡調査概要報告書』鷹塚山遺跡発掘調査団
- (14) 東奈良遺跡調査会編 1979 『東奈良』発掘調査概報I 東奈良遺跡調査会
- (15) 茨木市史編さん委員会 『新修茨木市史』第7巻 資料編考古
- (16) 豊中市教育委員会編 1986 「山ノ上遺跡第6次調査概要報告」『豊中市埋蔵文化財発掘調査概要』

豊中市文化財調査報告第15集

- (17) 佐原真 1960 「銅鐸文化圏」『図説世界文化史大系』第20巻 日本Ⅰ
佐原真 1974 「銅鐸のまつり」『古代史発掘』5 大陸文化と青銅器 講談社)
- (18) 西森正晃 2007 『大藪遺跡』京都市埋蔵文化財研究所
ここでは、過去の調査で発掘された旧河川について文献がまとめられている。
- (19) 小林行雄 1949 「黄泉戸喫」『考古学集刊』第2冊
小林行雄 1976 『古墳文化論考』所収 1965 補訂 平凡社
- (20) 樞原考古学研究所編 1976 『纏向』桜井市教育委員会
- (21) 石野博信 1990 『古墳時代史』考古学選書31 雄山閣出版
- (22) 註(11)に同じ。
- (23) 東海地方の台付甕の資料は多く、ここでは無作為抽出として『弥生土器の様式と編年』東海編に掲載された土器を使用した。
加納俊介・石黒立人 2002 『弥生土器の様式と編年』東海編 木耳社
- (24) 小泉信吾・千喜良淳 2002 『大藪遺跡発掘調査報告書』大藪遺跡発掘調査団
- (25) 森岡秀人 1990 「各地域の併行関係」『弥生土器の様式と編年』近畿編Ⅱ 木耳社

付 章 科学分析

第 1 節 出土木製品の樹種同定

小林克也 (パレオ・ラボ)

1. 試料と方法

試料は、第 1 区 SK 5 (2253) から出土した木製品 9 点である。時期については弥生時代後期～古墳時代前期と考えられている。各試料について、切片採取前に木取りの確認を行った。

樹種同定は、材の横断面 (木口)、接線断面 (板目)、放射断面 (柾目) について、カミソリで薄い切片を切り出し、ガムクロラールで封入して永久プレパラートを作製した。その後乾燥させ、光学顕微鏡にて検鏡および写真撮影を行なった。

2. 結果

同定の結果、針葉樹のヒノキ 1 分類群と、広葉樹のヤナギ属とスダジイ、コナラ属アカガシ亜属 (以下アカガシ亜属と呼ぶ)、サクラ属の 4 分類群の、計 5 分類群がみ

第 5 表 木製品の樹種同定結果

樹種 / 器種	環状木製品	板状木製品	棒状木製品	合計
ヒノキ		3	1	4
ヤナギ属			1	1
スダジイ			1	1
コナラ属アカガシ亜属	1	1		2
サクラ属			1	1
合計	1	4	4	9

られた。ヒノキが 4 点と最も多く、

アカガシ亜属が 2 点、ヤナギ属とスダジイ、サクラ属が各 1 点であった。同定結果を第 5 表に示す。

次に、同定された材の特徴を記載し、光学顕微鏡写真を図版に示す。

(1) ヒノキ *Chamaecyparis obtusa* (Siebold et Zucc.) Endl. ヒノキ科 第 30 図 1a-1c (No. 3)、2a-2c (No. 5)

仮道管と放射組織、樹脂細胞で構成される針葉樹である。晩材部はやや薄く、早材から晩材への移行は急である。放射組織は同性で、高さ 2～11 列となる。分野壁孔はトウヒ～ヒノキ型で、1 分野に 2 個みられる。

ヒノキは福島県以南の暖温帯に分布する常緑高木の針葉樹である。材はやや軽軟で加工しやすく、強度に優れ、耐朽性が高い。

(2) ヤナギ属 *Salix* ヤナギ科 第 30 図 3a-3c (No. 4)

小型の道管が単独ないし 2～3 個複合し、やや密に散在する散孔材である。道管は単穿孔を有し、道管放射組織間壁孔は円形の単壁孔状となる。放射組織は上下端 1～3 列が直立する異性で、単列となる。

ヤナギ属にはタチヤナギやバッコヤナギなどがあり、水湿に富んだ日当たりのよい土地を好む落葉大高木～灌木の広葉樹である。材は軽軟で強度が強く、切削加工などは容易である。

(3) スダジイ *Castanopsis sieboldii* (Makino) Hatus. ex T. Yamaz. et Mashiba ブナ科 第 31 図 4a-4c (No. 7)

年輪のはじめに大型の道管が断続的に並び、晩材部では径を減じた道管が火炎状に配列する環孔材である。軸方向柔組織はいびつな線状となる。道管は単穿孔を有する。放射組織は同性で、列となる。

スダジイは暖帯から亜熱帯に分布する常緑高木の広葉樹である。重さと強さは中庸で、やや耐朽性があるが、切削加工は困難ではない。

(4) コナラ属アカガシ亜属 *Quercus* subgen. *Cyclobalanopsis* ブナ科 第31図 5a-5c (No. 2)

厚壁で丸い大型の道管が、放射方向に配列する放射孔材である。軸方向柔組織はいびつな線状となる。道管は単穿孔を有する。放射組織は同性で、単列のものと広放射組織がみられる。

コナラ属アカガシ亜属は、材組織の観察では道管の大きなイチイガシ以外は種までの同定ができない。したがって、本試料はイチイガシ以外のアカガシ亜属である。アカガシ亜属にはアカガシやツクバネガシなどがあり、暖帯に分布する常緑高木の広葉樹である。材は重硬かつ強靱で、耐水性があり、切削加工は困難である。

(5) サクラ属 *Prunus* s.l. バラ科 第31図 6a-6c (No. 8)

小型の道管が単独ないし数個、放射方向または斜め方向に複合してやや密に散在する散孔材である。道管は単穿孔を有し、内壁にはらせん肥厚がみられる。放射組織は上下端1列が直立する異性で、1～5列幅となる。

広義のサクラ属には、モモ属とスモモ属、アンズ属、サクラ属、ウワミズザクラ属、バクチノキ属がある。樹種同定ではモモ属とバクチノキ属以外は他のサクラ属と識別できないため、広義のサクラ属とはモモ属とバクチノキ属を除くサクラ属を指す。

3. 考察

SK5から出土した木製品は、環状木製品ではアカガシ亜属が1点、板状木製品ではヒノキが2点とアカガシ亜属が1点、棒状木製品ではヒノキとヤナギ属、スダジイ、サクラ属が各1点みられた。

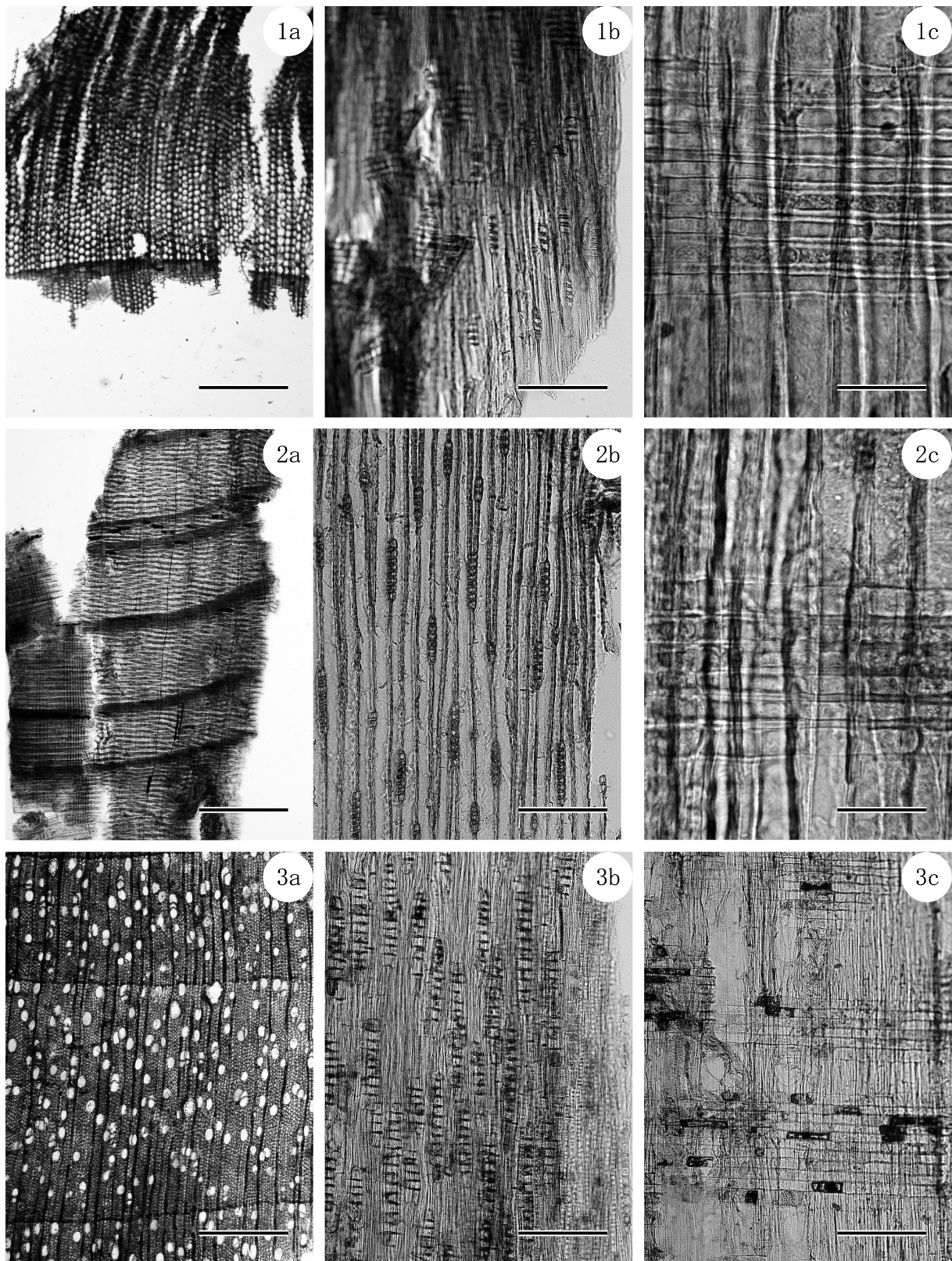
ヒノキは木理通直で真っ直ぐに生育し、加工性が良い樹種で、ヤナギ属とサクラ属も加工性が良い。またスダジイとアカガシ亜属は堅硬な樹種で、アカガシ亜属は特に硬い樹種である(伊藤ほか, 2011)。板状木製品ではヒノキとアカガシ亜属が利用されていたが、加工性の良いヒノキと堅硬なアカガシ亜属では異なる用途に用いられていた可能性がある。また棒状木製品でも同様に、軽軟なヒノキ、ヤナギ属、サクラ属と、堅硬なスダジイでは、異なる用途に用いられた可能性がある。環状木製品では堅硬なアカガシ亜属が利用されていたが、用途については不明である。

引用文献

伊東隆夫・佐野雄三・安部 久・内海泰弘・山口和穂 (2011) 日本有用樹木誌, 238p, 海青社.

第6表 木製品の樹種同定結果一覧

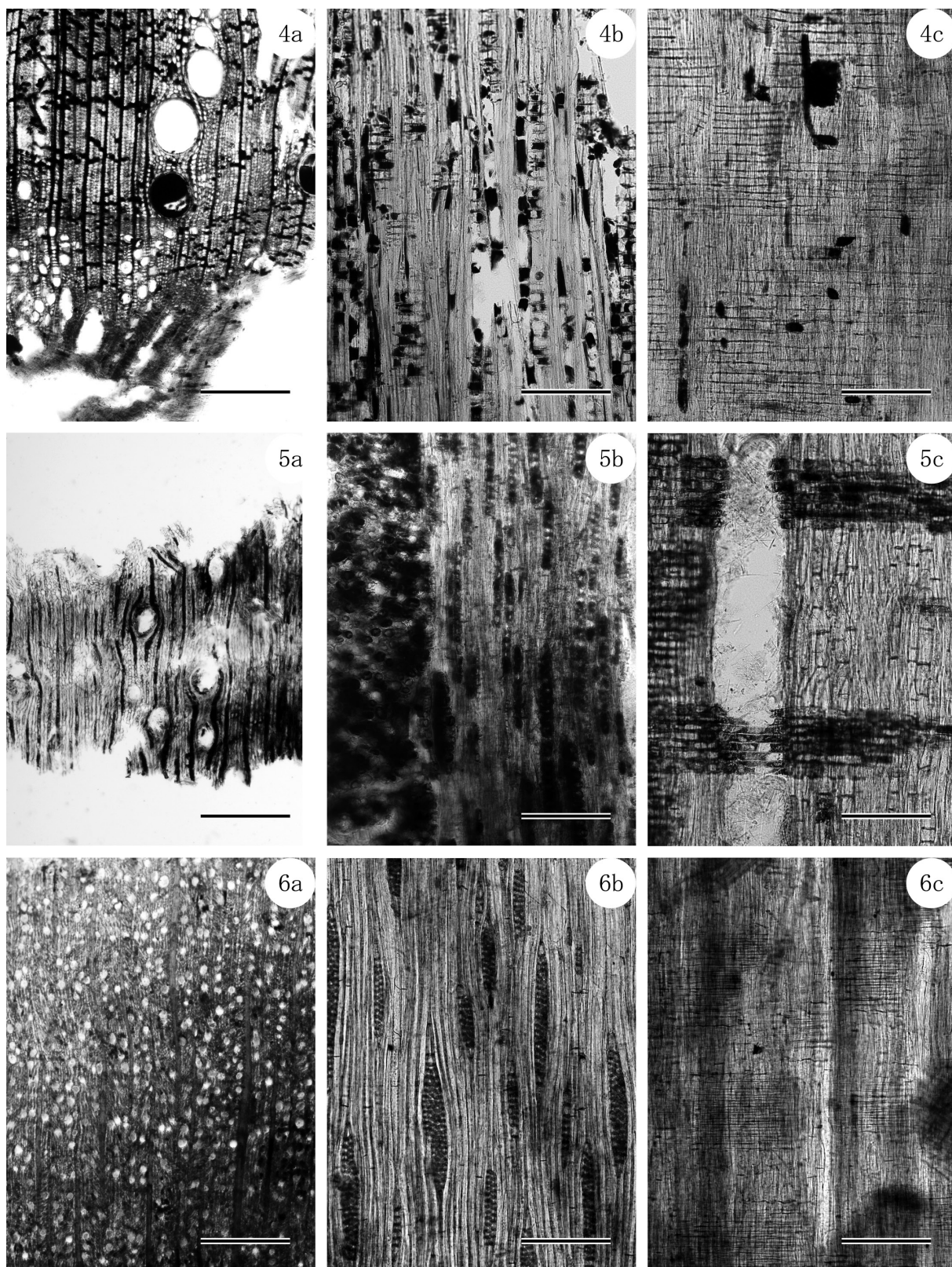
分析番号	遺物番号	グリッド	出土遺構	器種	樹種	木取り	備考	時期
No. 1	65	K5	SK 5	板状木製品	コナラ属アカガシ亜属	柾目	一括 出土	弥生時代後期～ 古墳時代前期
No. 2	69	K5		環状木製品	コナラ属アカガシ亜属	芯去削出		
No. 3	66	K5		棒状木製品	ヒノキ	芯去削出		
No. 4	—	K5		棒状木製品	ヤナギ属	芯持削出		
No. 5	63	K5		板状木製品	ヒノキ	板目		
No. 6	—	K5		板状木製品	ヒノキ	追柾目		
No. 7	67	K5		棒状木製品	スダジイ	みかん割り		
No. 8	68	K5		棒状木製品	サクラ属	追柾目		
No. 9	64	K5		板状木製品	ヒノキ	みかん割り		



第30図 木製品の光学顕微鏡写真1

1a-1c. ヒノキ (No. 3)、2a-2c. ヒノキ (No. 5)、3a-3c. ヤナギ属 (No. 4)

a: 横断面 (スケール=250 μm)、b: 接線断面 (スケール=100 μm)、c: 放射断面 (スケール=1-2:25 μm・3-5:100 μm)



第31図 木製品の光学顕微鏡写真2

4a-4c. スダジイ (No. 7)、5a-5c. コナラ属アカガシ亜属 (No. 2)、6a. コナラ属アカガシ亜属 (No. 1)

a: 横断面 (スケール=250 μm)、b: 接線断面 (スケール=100 μm)、c: 放射断面 (スケール=1-2:25 μm ・3-5:100 μm)

第2節 大型植物遺体

佐々木由香・バンダリ スダルシャン (パレオ・ラボ)

1. はじめに

第1区SK5(2253)より出土した木製品に付着して出土していた大型植物遺体を同定し、食用などに利用された植物あるいは周辺での栽培状況について検討する。

2. 試料と方法

試料は、SK5から出土した木製品(No.315)に付着して出土した大型植物遺体1試料である。試料は、株式会社イビソクによって回収された。遺構の時期は、弥生時代後期～古墳時代前半と考えられている。

試料は、肉眼および実体顕微鏡下で同定および計数を行った。

3. 結果

同定した結果、草本植物のヒョウタン仲間種子とキカラスウリ種子の2分類群が見いだされた。ヒョウタン仲間が21点、キカラスウリが2点見出された。

次に、産出した大型植物遺体の記載を行い、第32図に写真を示して同定の根拠とする。

(1) ヒョウタン仲間 *Lagenaria* spp. 種子 ウリ科

赤褐色で、上面観は扁平、側面観は左右非対象の逆三角形。基部はW字状で、基部から先端まで浅く広い溝が2本走る。ややスポンジ質。計測可能な10点の大きさは、長さ11.4～16.0(平均 12.8 ± 1.3)mm、幅5.4～6.4(平均 5.9 ± 0.3)mm(第7表)。

(2) キカラスウリ *Trichosanthes kirilowii* Maxim. var. *japonica* (Miq.) Kitam. 種子 ウリ科

黄褐色で、上面観は扁平、側面観は左右非対称の広楕円形で、着点が窄まる。背腹両面には浅い帯状の溝がそれぞれ縁の内側を一周する。表面は平滑で光沢がある。長さ9.2mm、幅6.6mm。本来の形状は第32図2に示した個体のようなものであるが、3は2の側面方向で潰れている。長さ10.0mm、幅7.2mm。

第7表 ヒョウタン仲間種子の大きさ(単位mm)

	長さ	幅
1	16.0	6.0
2	13.8	6.4
3	12.4	6.2
4	12.4	5.4
5	13.3	6.0
6	12.0	5.6
7	12.6	6.0
8	12.5	5.8
9	11.6	6.0
10	11.4	5.6
最小値	11.4	5.4
最大値	16.0	6.4
平均値	12.8	5.9
標準偏差	1.3	0.3

4. 考察

SK5から出土した大型植物遺体を同定した結果、栽培植物のヒョウタン仲間が得られた。野生植物のキカラスウリは山野や藪などに生えるツル植物で、熟した果実の果肉部分は甘みがあり、食用や薬用に利用可能である(長沢, 2012)。また、種子は脂肪を多く含み、薬用にする(林, 2003)。

SK5は廃棄土坑と考えられている。ヒョウタン仲間がやや多くまとまっていたため、ヒョウタン仲間の果

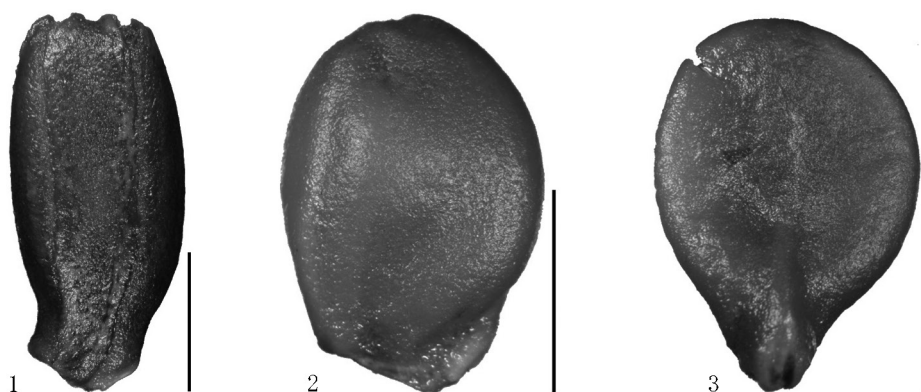
実も周囲に存在していた可能性がある。

今回検討した大型植物遺体の遺存状況は非常に良好であった。したがって、今回は肉眼で回収された種実のみの検討であったが、今後は堆積物中の大型植物遺体もあわせて解析できれば、当時の利用植物や栽培状況がより明らかになると考えられる。

引用文献

林 弥栄 (2003) 野に咲く花. 623p, 山と溪谷社.

長沢 武 (2012) 野外植物民俗事苑. 443p, ほおずき書籍.



スケール 1-3:5mm

第 32 図 SK 5 から出土した大型植物遺体
1. ヒョウタン仲間種子、2・3. キカラスウリ種子

第3節 小型仿製鏡付着物の材質分析

藤根 久・小林克也（パレオ・ラボ）

1. はじめに

小型仿製鏡に、青灰色の厚みのある付着物や繊維状物が付着していた。ここでは、これらの付着物の材質を調べるために、赤外分光分析および蛍光X線分析、走査型電子顕微鏡観察を行った。

2. 試料と方法

試料は、弥生時代後期の青銅鏡の鏡背面に付着する青灰色付着物と繊維状付着物である（第8表）。

第8表 分析を行った試料とその詳細

分析No.	遺物	時期	試料	特徴
1	小型仿製鏡	弥生時代後期	青灰色付着物	青灰色 (2.5Y 6/1)、厚さ最大 500 μ m 前後
2			繊維状付着物	白色透明、繊維質物

試料は、青灰色付着物及び繊維状付着物（白色部）から手術用メスを用いて試料を薄く削り取った後、押しつぶして、厚さ 1mm 程度に裁断した臭化カリウム (KBr) 結晶板に挟み、油圧プレス器を用いて約 7 トンで加圧整形した。測定は、フーリエ変換型顕微赤外分光光度計（日本分光（株）製 FT/IR-410、IRT-30-16）を用いて、透過法により赤外吸収スペクトルを測定した。

電子顕微鏡観察およびX線分析は、付着物の切断面について行った。電子顕微鏡観察およびX線分析は、エネルギー分散型X線分析装置が付属した走査型電子顕微鏡を用いて、二次電子像および反射電子像（後方散乱電子）で観察した。使用した装置は、走査型電子顕微鏡（日本電子株式会社製 JSM-5900LV）と付属するエネルギー分散型X線分析装置（同 JED-2200）を用いた。なお、点分析は、ファンダメンタル・パラメータ法（FP法）による半定量分析を行った。

3. 結果および考察

以下に、各付着物の特徴について述べる。

[青灰色付着物（分析 No. 1）]

青灰色付着物は、鏡背面内区の 4 分の 1 程度の面積に付着する。

断面の電子顕微鏡観察では、層構造はなく、一部に空洞をもち、流理構造のような特徴を示す。表面は起伏が著しく、厚さは最大 500 μ m 程度で一定の厚さを示さない（第 34 図 4）。

断面 3 ケ所 (P1 ~ P3) の X 線分析では、主な元素に大きな違いはなく、ほぼ同じ化学組成を示す。主な元素としては、炭素 (C) が 40.58 ~ 42.27% と最も多く、次いで酸化銅 (CuO) が 20.77 ~ 33.16%、酸化ケイ素 (SiO₂) が 14.97 ~ 24.20%、酸化鉄 (Fe₂O₃) が 4.48 ~ 6.43%、酸化アルミニウム (Al₂O₃) が 3.11 ~ 3.83% などであった（第 9 表）。

第 33 図 1 に、灰白色付着物の赤外吸収スペクトル図を示す。なお、縦軸は透過率 (%T)、横軸が波数 (Wavenumber (cm⁻¹); カイザー) を示す。スペクトル図はノーマライズしてあり、吸収

第9表 付着物断面の点分析結果（単位：重量%、測定位置は第34図に示す）

分析No.	点No.	C	Na2O	MgO	Al2O3	SiO2	P2O5	SO3	Cl	K2O	CaO	TiO2	Fe2O3	CuO	SnO2	total
1	P1	41.72	-	-	3.16	16.74	0.21	0.11	0.10	-	-	1.12	4.48	32.36	-	100.00
	P2	40.58	1.11	-	3.11	14.97	-	-	0.31	0.57	0.03	0.15	4.91	33.16	1.09	99.99
	P3	42.27	1.37	0.27	3.83	24.20	0.21	-	-	0.47	-	-	6.43	20.77	0.19	100.01
最小値		40.58	1.11	0.27	3.11	14.97	0.21	0.11	0.10	0.47	0.03	0.15	4.48	20.77	0.19	
最大値		42.27	1.37	0.27	3.83	24.20	0.21	0.11	0.31	0.57	0.03	1.12	6.43	33.16	1.09	

スペクトルに示した数字は 第10表 生漆の赤外吸収位置とその強度

主な生漆の赤外吸収位置を示す（第10表）。

この赤外吸収スペクトル図では、生漆を特徴づけるウルシオール（ウルシ）の吸収が一部（吸収No.7）で認められた。ただし、生漆に見られるCH基（炭化水素）に由来

吸収No.	生漆			No. 2	
	位置	強度	ウルシ成分	位置	強度
1	2925.48	28.534		2911.99	39.699
2	2854.13	36.217		2857.99	49.574
3	1710.55	42.035		1635.34	55.363
4	1633.41	48.833		1427.07	42.684
5	1454.06	47.195		1365.35	37.884
6	1351.86	50.803	ウルシオール	1322.93	35.986
7	1270.86	46.334	ウルシオール	1106.94	8.253
8	1218.79	47.536	ウルシオール	1056.80	4.806
9	1087.66	53.843		898.67	63.637
10	727.03	75.389		-	-

する 2925 (cm⁻¹)、2854 (cm⁻¹) の吸収は僅かであった。なお、1000 (cm⁻¹) 付近の大きな吸収は劣化した漆などに見られるゴム質と考えられる。分析の結果、生漆とする吸収は明瞭ではなかったが、有機物起源の炭素が多く含まれており、漆の可能性はある。

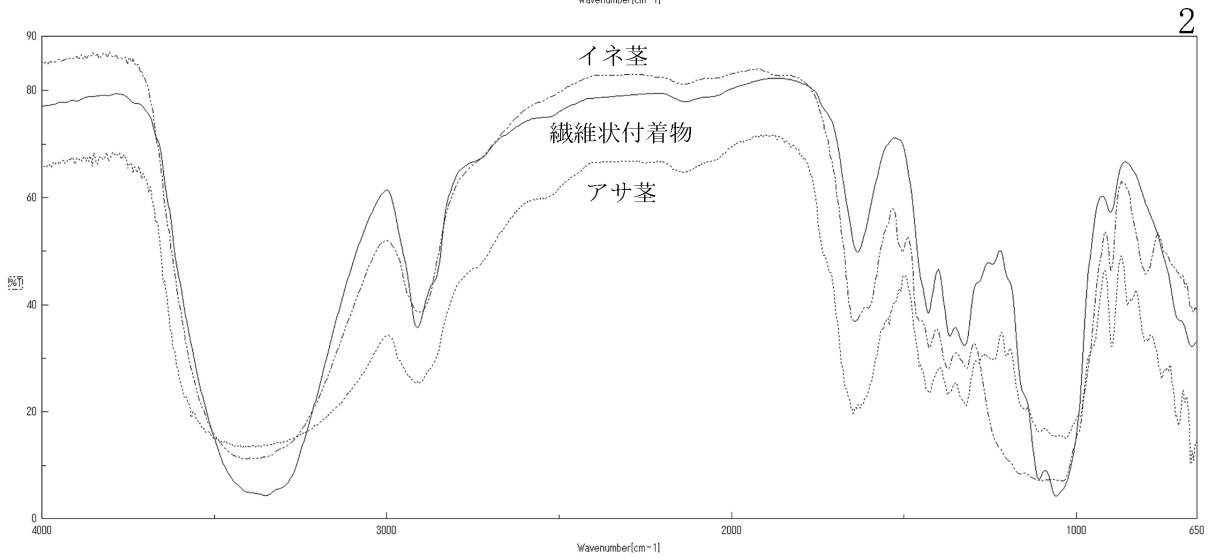
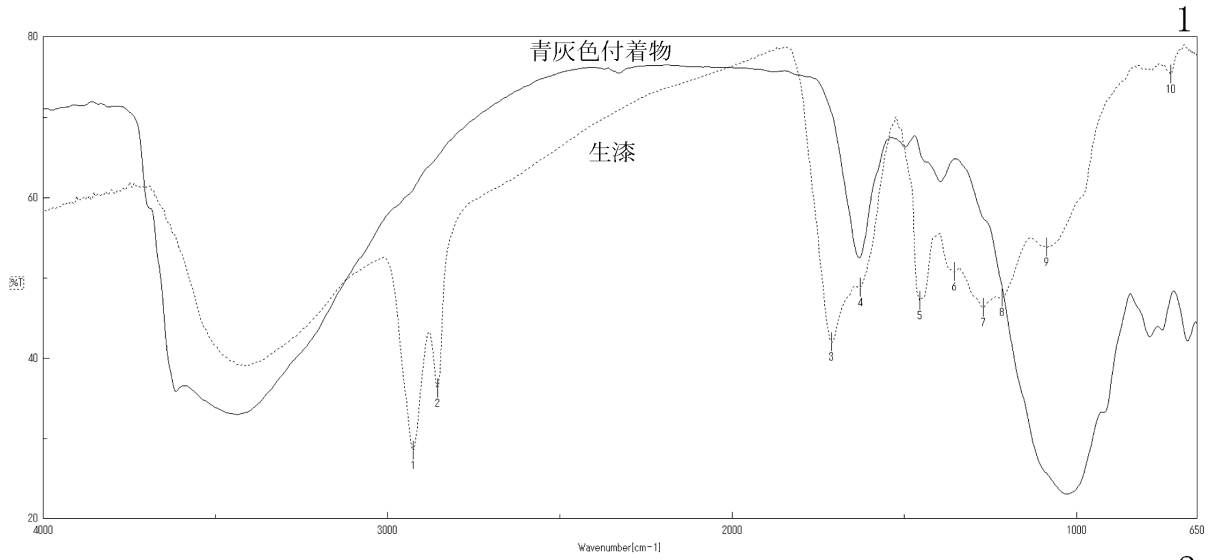
[繊維状付着物（分析No.2）]

繊維質物は、青灰色付着物ともに中央部の鈕付近にまとまって付着する。

実体顕微鏡観察では、透明の短冊状の形状を示す。横断面の走査型電子顕微鏡観察では、全体的に組織が潰れて、観察ができなかった。側面の走査型電子顕微鏡写真では、道管状に軸方向に伸びる組織がみられ、その表面にはらせん状の文様が認められる（第34図6）。

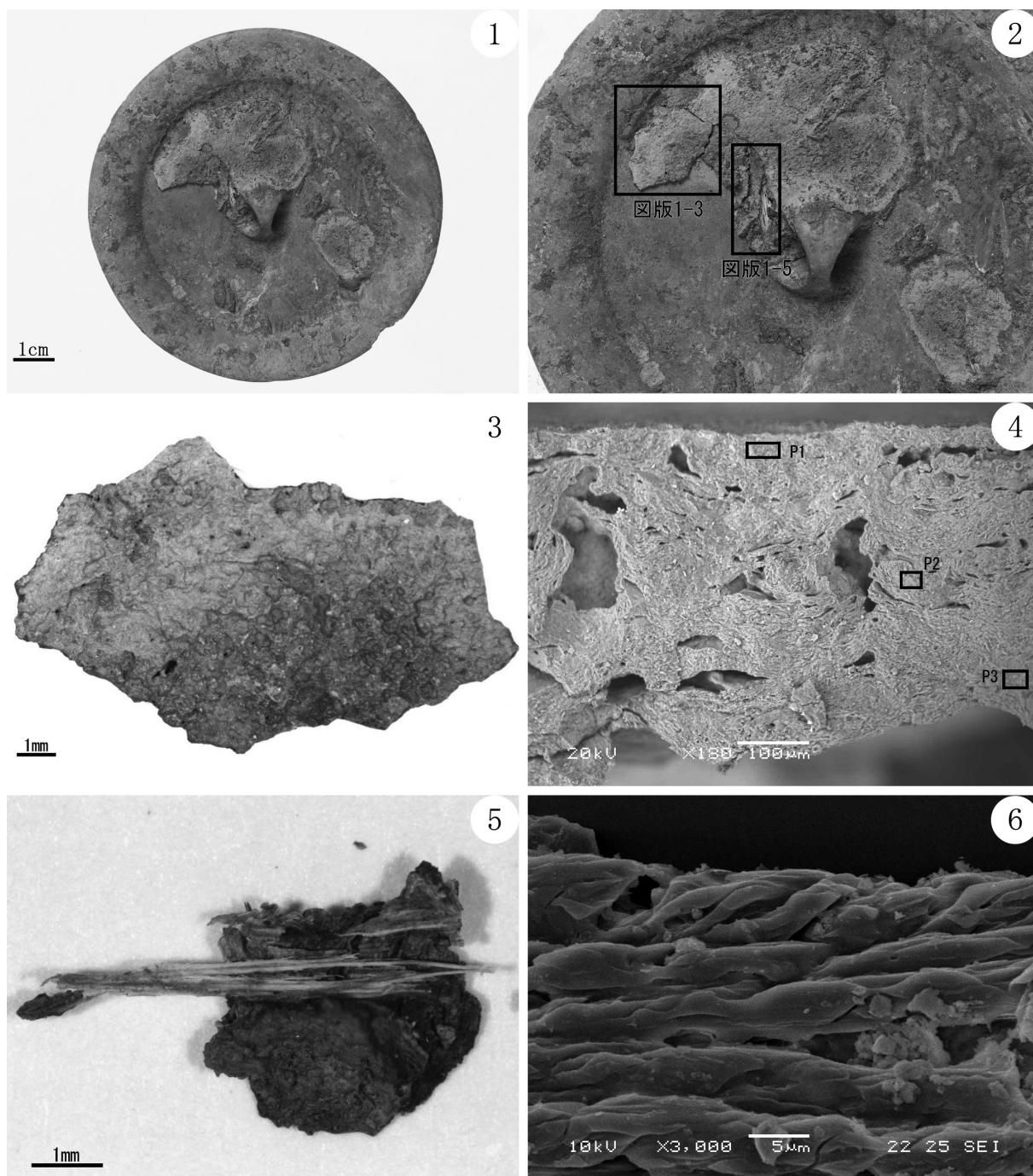
第33図2に、繊維状物の赤外吸収スペクトル図を示す。赤外吸収位置は第10表のとおりである。

この赤外吸収スペクトル図では、CH基（炭化水素）に由来する 2925 (cm⁻¹)、2854 (cm⁻¹) の吸収が見られる。その他 898、1056、1106 など複数の吸収が見られた。これらの吸収は、アサ茎やイネ茎などの植物の吸収に類似する。分析の結果、植物の種類は特定できないが、植物繊維と考えられる。



第33図 塗膜表面の赤外吸収スペクトル図

1. 青灰色付着物と生漆の赤外吸収スペクトル図 (数字：生漆の赤外吸収位置)
2. 繊維状付着物とアサ茎・イネ茎の赤外吸収スペクトル図 (数字：試料の主な赤外吸収位置)



第34図 試料の付着状況と各試料の実体顕微鏡・電子顕微鏡写真

1. 青銅鏡鏡背 2. 鏡背面拡大
3. 青灰色付着物の反射電子像 (赤枠：X線分析位置) (No. 1) 4. 青灰色付着物の拡大写真 (No. 1)
5. 繊維状付着物の実体顕微鏡写真 (No. 2) 6. 繊維状付着物の走査型電子顕微鏡写真 (No. 2)

第4節 小型仿製鏡の元素マッピング分析

竹原弘展（パレオ・ラボ）

1. はじめに

小型仿製鏡の背面について元素マッピング分析を行い、材質について検討した。

2. 試料と方法

分析装置は、エネルギー分散型蛍光X線分析装置である（株）堀場製作所製分析顕微鏡 XGT-5000Type II を使用した。装置の仕様は、X線管が最大 50kV、1.00mA のロジウム（Rh）ターゲット、X線ビーム径が 100 μ m または 10 μ m、検出器は高純度 Si 検出器で、検出可能元素はナトリウム（Na）～ウラン（U）である。また本装置では、試料ステージを走査させながら測定する元素マッピング分析も可能である。

分析では、最初に元素マッピング分析を行った。さらに、マッピング図を基に特徴的な箇所を選び、ポイント分析を行った。測定条件は、元素マッピング分析が 50kV、1.00mA、ビーム径 100 μ m、測定時間 18000s を 1 回走査、ポイント分析が 50kV、0.20～0.46mA（自動設定）、ビーム径 100 μ m、測定時間 1500s に設定し、いずれも非破壊で行った。定量分析は、MBH Analytical 社の 32X LB14(batch A) を用いて補正したファンダメンタル・パラメーター法（FP法）による半定量分析を装置付属ソフトで行った。

3. 結果

元素マッピング分析により得られたケイ素（Si）、鉄（Fe）、銅（Cu）、スズ（Sn）、鉛（Pb）、ヒ素（As）、銀（Ag）、アンチモン（Sb）のマッピング図を第 35 図に示す。各マッピング図に示された a～e のポイント分析により得られたスペクトルを第 35 図に、ケイ素、鉄など土砂に多く含まれる元素を除いた半定量値の一覧を第 11 表に示す。

銅（Cu）、スズ（Sn）、鉛（Pb）が主に検出された。ほかに、ニッケル（Ni）、亜鉛（Zn）、ヒ素（As）、銀（Ag）、アンチモン（Sb）、ビスマス（Bi）が微量に検出された。

第 11 表 半定量分析結果（mass%）

箇所	Cu	Sn	Pb	Ni	As	Ag	Sb	Bi
a	93.06	5.20	1.56	—	0.08	—	0.10	—
b	15.68	54.79	27.84	0.07	0.55	0.49	0.32	0.25
c	26.38	33.23	38.21	0.07	1.20	0.35	0.50	0.07
d	34.61	42.05	21.04	0.20	1.01	0.47	0.53	0.10
e	17.35	53.58	27.41	0.05	0.39	0.62	0.36	0.23

4. 考察

腐食により遺物表面の化学組成に変化が生じているとみられ、位置により銅（Cu）、スズ（Sn）、鉛（Pb）の含有率が大きく異なった。今回の分析は半定量分析であり、かつ非破壊分析で鍍の上からの測定であるため、今回の分析結果より厳密な組成比について検討すべきではないが、ポイ

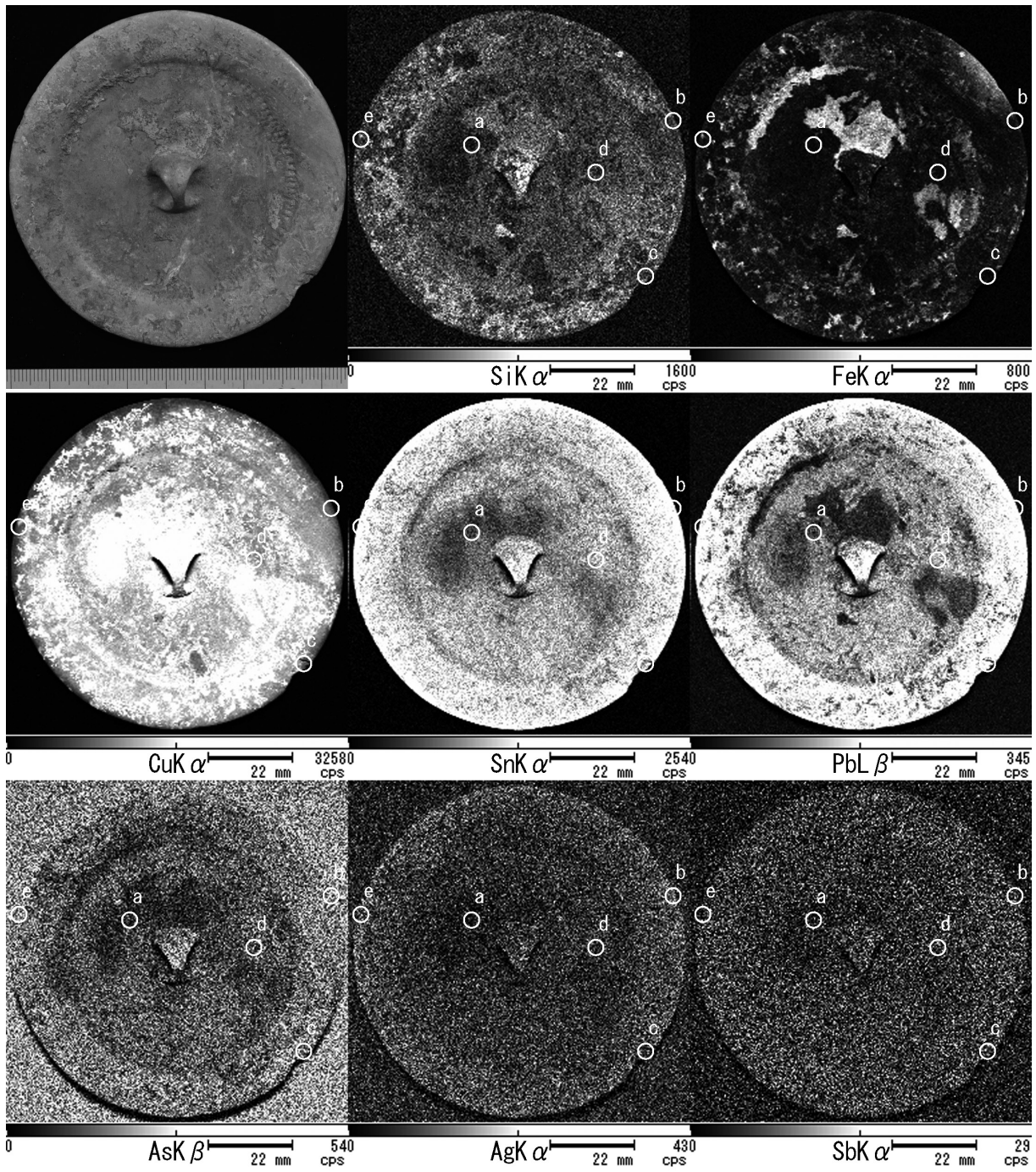
ント分析を行ったいずれの箇所も銅 (Cu)、スズ (Sn)、鉛 (Pb) を中心とした組成であるのに変わりはなく、Cu-Sn-Pb の典型的な青銅製品と考えられる。他に、ニッケル (Ni)、ヒ素 (As)、銀 (Ag)、アンチモン (Sb)、ビスマス (Bi) といった元素が微量に検出されており、これらは鉱石から分離しきれなかった不純物と考えられる。ヒ素 (As) が最大で 1% 以上検出されており、若干ではあるが多い傾向がみられた。

5. おわりに

小型仿製鏡の元素マッピング分析の結果、主に銅、スズ、鉛からなる青銅製品と定性的に判断された。また、微量にニッケル、ヒ素、銀、アンチモン、ビスマスを含む。

参考文献

- 村上 隆 (2003) 金工技術. 日本の美術, 443, 98p, 至文堂.
中井 泉編 (2005) 蛍光 X 線分析の実際. 242p, 朝倉書店.



第 35 図 小型仿製鏡の元素マッピング図

Si : ケイ素 Fe : 鉄 Cu : 銅 Sn : スズ Pb : 鉛 As : ヒ素 Ag : 銀 Sb : アンチモン

第5節 放射性炭素年代測定

パレオ・ラボ AMS 年代測定グループ

伊藤 茂・安昭炫・佐藤正教・廣田正史・山形秀樹

小林絢一・Zaur Lomtadize・小林克也

1. はじめに

下記の試料3点について、加速器質量分析法（AMS法）による放射性炭素年代測定を行った。

2. 試料と方法

試料は、SI4から1点（試料No. 1：PLD-30354）、SI4の河床下レキ層から1点（試料No. 2：PLD-30355）、南側Ywシルトから1点（試料No. 3：PLD-30356）の、計3点である。試料No. 1では最終形成年輪が残っていたが、試料No. 2と3では残っていなかった。発掘調査所見では、SI4は弥生時代後期と考えられているが、南側Ywシルトの時期は不明である。測定試料の情報、調製データは第12表のとおりである。

試料は調製後、加速器質量分析計（パレオ・ラボ、コンパクトAMS：NEC製1.5SDH）を用いて測定した。得られた¹⁴C濃度について同位体分別効果の補正を行った後、¹⁴C年代、暦年代を算出した。

第12表 測定試料および処理

測定番号	遺跡データ	試料データ	前処理
PLD-30354	試料No. 1 遺構：SI4	種類：炭化材 試料の性状：最終形成年輪 状態：dry	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸：1.2N, 水酸化ナトリウム：1.0N, 塩酸：1.2N）
PLD-30355	試料No. 2 遺構：SI4 層位：河床下レキ層	種類：炭化材 試料の性状：部位不明 状態：dry	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸：1.2N, 水酸化ナトリウム：1.0N, 塩酸：1.2N）
PLD-30356	試料No. 3 位置：南側Ywシルト 層位：シルト	種類：炭化材 試料の性状：部位不明 状態：dry	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸：1.2N, 水酸化ナトリウム：1.0N, 塩酸：1.2N）

3. 結果

第13表に、同位体分別効果の補正に用いる炭素同位体比（ $\delta^{13}\text{C}$ ）、同位体分別効果の補正を行って暦年較正に用いた年代値と較正によって得られた年代範囲、慣用に従って年代値と誤差を丸めて表示した¹⁴C年代を、第36図に暦年較正結果をそれぞれ示す。暦年較正に用いた年代値は下1桁を丸めていない値であり、今後暦年較正曲線が更新された際にこの年代値を用いて暦年較正を行うために記載した。

¹⁴C年代はAD1950年を基点にして何年前かを示した年代である。¹⁴C年代（yrBP）の算出には、¹⁴Cの半減期としてLibbyの半減期5568年を使用した。また、付記した¹⁴C年代誤差（ $\pm 1\sigma$ ）は、測定の統計誤差、標準偏差等に基づいて算出され、試料の¹⁴C年代がその¹⁴C年代誤差内に入る確率が68.2%であることを示す。

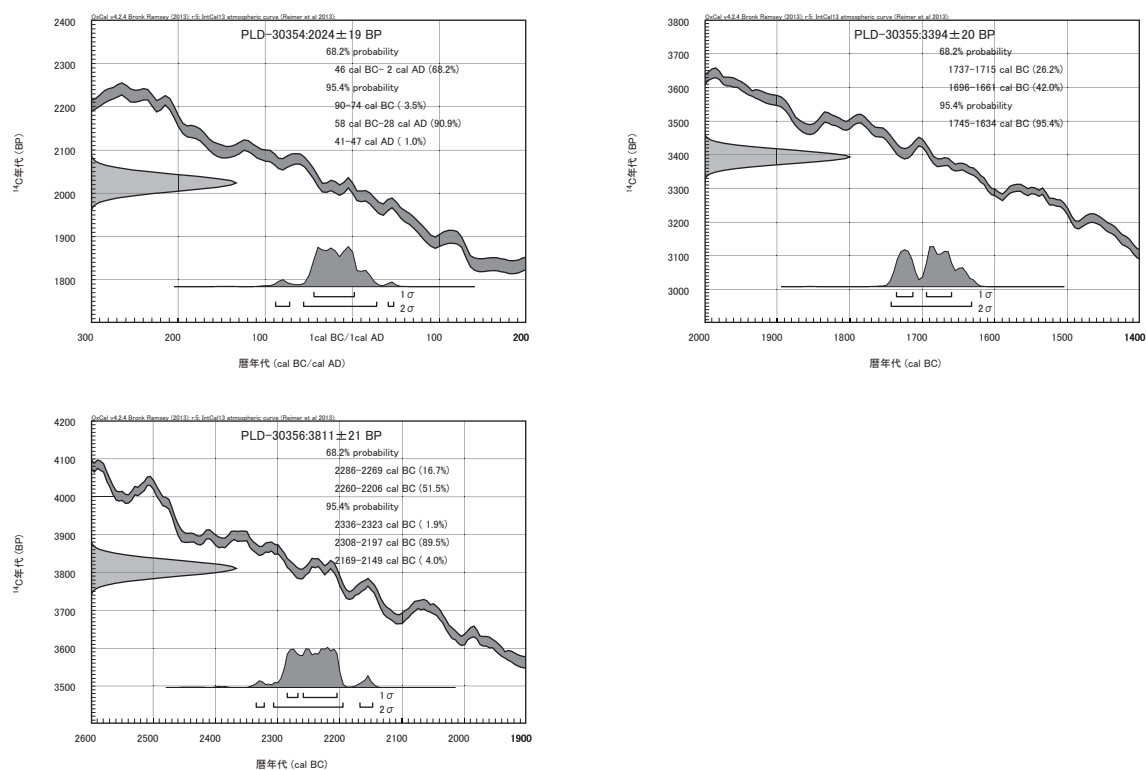
なお、暦年較正の詳細は以下のとおりである。

暦年較正とは、大気中の¹⁴C濃度が一定で半減期が5568年として算出された¹⁴C年代に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の¹⁴C濃度の変動、および半減期の違い（¹⁴Cの半減期5730 ± 40年）を較正して、より実際の年代値に近いものを算出することである。

¹⁴C年代の暦年較正には0xCal14.2（較正曲線データ：IntCal13）を使用した。なお、1σ暦年代範囲は、0xCalの確率法を使用して算出された¹⁴C年代誤差に相当する68.2%信頼限界の暦年代範囲であり、同様に2σ暦年代範囲は95.4%信頼限界の暦年代範囲である。カッコ内の百分率の値は、その範囲内に暦年代が入る確率を意味する。グラフ中の縦軸上の曲線は¹⁴C年代の確率分布を示し、二重曲線は暦年較正曲線を示す。

第13表 放射性炭素年代測定および暦年較正の結果

測定番号	δ ¹³ C (‰)	暦年較正用年代 (yrBP ± 1σ)	¹⁴ C年代 (yrBP ± 1σ)	¹⁴ C年代を暦年代に較正した年代範囲	
				1σ暦年代範囲	2σ暦年代範囲
PLD-30354 SI 4 試料No. 1	-27.14 ± 0.17	2024 ± 19	2025 ± 20	46 cal BC- 2 cal AD (68.2%)	90-74 cal BC (3.5%) 58 cal BC-28 cal AD (90.9%) 41-47 cal AD (1.0%)
PLD-30355 SI 4 試料No. 2	-24.79 ± 0.19	3394 ± 20	3395 ± 20	1737-1715 cal BC (26.2%) 1696-1661 cal BC (42.0%)	1745-1634 cal BC (95.4%)
PLD-30356 南側 Yw シルト 試料No. 3	-26.66 ± 0.20	3811 ± 21	3810 ± 20	2286-2269 cal BC (16.7%) 2260-2206 cal BC (51.5%)	2336-2323 cal BC (1.9%) 2308-2197 cal BC (89.5%) 2169-2149 cal BC (4.0%)



第36図 暦年較正結果

4. 考察

以下、遺構別に暦年代の古い順に結果を整理する。なお、土器編年と¹⁴C年代および暦年代の対応関係については、千葉(2008)、小林(2008)、工藤(2012)、西本編(2009)、岡田(2008)を参照した。

SI4では、河床下レキ層の試料No. 2(PLD-30355)は¹⁴C年代が 3395 ± 20 ¹⁴C BP、2 σ 暦年代範囲(確率95.4)が1745-1634 cal BC(95.4%)であった。これは、縄文時代後期中葉に相当する。同じくSI4から出土した試料No. 1(PLD-30354)は2 σ 暦年代範囲が90-74 cal BC(3.5%)、58 cal BC-28 cal AD(90.9%)、41-47 cal AD(1.0%)で、紀元前1世紀初頭～紀元後1世紀中頃の暦年代を示した。これは、弥生時代中期～後期に相当する。

発掘調査所見ではSI4の時期は弥生時代後期と考えられているが、SI4内から出土した試料No. 2は弥生時代中期～後期の暦年代を示し、発掘調査所見と整合的である。またSI4の河床下のレキ層については、縄文時代後期中葉であることが確認できた。

南側Ywシルトの試料No. 3(PLD30356)は¹⁴C年代が 3810 ± 20 ¹⁴C BP、2 σ 暦年代範囲が2336-2323 cal BC(1.9%)、2308-2197 cal BC(89.5%)、2169-2149 cal BC(4.0%)であった。これは、縄文時代後期初頭～前葉に相当する。発掘調査所見では南側Ywシルトの時期は不明であるが、測定結果によって縄文時代後期初頭～前葉であることが確認できた。

参考文献

- Bronk Ramsey, C. (2009) Bayesian Analysis of Radiocarbon dates. *Radiocarbon*, 51(1), 337-360.
- 千葉 豊(2008) 縁帯文土器. 小林達雄編「総覧縄文土器」: 642-649, アム・プロモーション.
- 小林謙一(2008) 縄文時代の暦年代. 小杉 康・谷口康浩・西田泰民・水ノ江和同・矢野健一編「縄文時代の考古学2 歴史のものさし」: 257-269, 同成社.
- 工藤雄一郎(2012) 旧石器・縄文時代の環境文化史—高精度放射性炭素年代測定と考古学—. 373p, 神泉社.
- 中村俊夫(2000) 放射性炭素年代測定法の基礎. 日本先史時代の¹⁴C年代編集委員会編「日本先史時代の¹⁴C年代」: 3-20, 日本第四紀学会.
- 西本豊弘編(2009) 新弥生時代のはじまり第4巻 弥生農耕のはじまりとその年代. 162p, 雄山閣.
- 岡田憲一(2008) 凹線文系土器(宮滝式・元住吉山Ⅱ式土器). 小林達雄編「総覧縄文土器」: 650-657, アム・プロモーション.
- Reimer, P.J., Bard, E., Bayliss, A., Beck, J.W., Blackwell, P.G., Bronk Ramsey, C., Buck, C.E., Cheng, H., Edwards, R.L., Friedrich, M., Grootes, P.M., Guilderson, T.P., Haffidason, H., Hajdas, I., Hatte, C., Heaton, T.J., Hoffmann, D.L., Hogg, A.G., Hughen, K.A., Kaiser, K.F., Kromer, B., Manning, S.W., Niu, M., Reimer, R.W., Richards, D.A., Scott, E.M., Southon, J.R., Staff, R.A., Turney, C.S.M., and van der Plicht, J. (2013) IntCal13 and Marine13 Radiocarbon Age Calibration Curves 0-50,000 Years cal BP. *Radiocarbon*, 55(4), 1869-1887.

觀 察 表

第 14 表 出土遺物観察表

第 1 区

遺構番号	遺物番号	器種・器形		法量 (cm)			調整・成型		色調	胎土	備考
		形	種類	口径	器高	底径	形態の特徴	手法の特徴			
第 1 遺構面包含層	1	須恵器	壺	(13.0)	(4.5)	-	口縁部はやや外反し、端部は段を持つ。外面に自然釉がかかる。	内外面ロクロナデ。	灰白色	密	
	2	須恵器	直口壺	(9.4)	(4.5)	-	わずかに外上方へ直線的にのびる口頸部に、断面三角形の凸帯を 2 条巡らせている。凸帯の間には波状文を巡らせている。	内外面ロクロナデ。	灰白色	密	
	3	土師器	二重口縁壺	(23.8)	(9.4)	-	頸部が長く、大きく外反する。口縁部は上方にさらに外反する。口縁部端部は肥厚し丸く収め、外面の口頸部界に稜を持つ。	表面磨滅。口縁部端部ヨコナデ。	浅黄褐色	やや粗 最大 3mm までの石英・長石・クサリ礫等を含む	
	4	土師器	鉢	(16.0)	(4.1)	-	口縁部は 2 段に屈曲して外上方へ開く。口縁部端部は薄くやや尖り気味に収める。	内外面ともナデ後ヨコミガキ。内外面ともに磨滅が著しい。全体に器壁が薄く 2～3mm 程度である。	橙色	密 精良	
SI 1	5	弥生土器	小型壺	-	(5.4)	4.0	体部は球状とみられ、底部にかけて器壁が厚くなる。体部外面において、底部と体部の境界付近で粘土紐痕が残る。	全体ナデ。一部、体部内面に工具痕が残る。	橙色	密 最大 3mm までの石英・長石・チャート等を含む	
	6	弥生土器	甕	15	18.5	3.6	口縁部は緩やかに外反する。口縁と体部の間にもう一段分割成型を想像させる面をもつが詳細は不明である。体部は球状によく膨らみ、体部最大径はほぼ中央に位置する。底部は外面中央がくぼむ。	口縁部内外面ともヨコナデ。端部外面が凹み、沈線状になる。体部外面は右上がりのタタキ。体部内面はナデ。	橙色	密 最大 4mm までの石英・長石・クサリ礫等を含む	
	7	弥生土器	小型甕	8.8	7.8	2.6	口縁部は上方に開き、端部に向かって薄くなる。体部内面で口縁部と体部の境でやや稜をもち、胴部中央から口縁までの間はやや壁厚が厚みを持つ。体部最大径の肩部はやや上方にあるが、口径よりやや小さい。底部は外面中央がくぼむ。	全体ナデ。口縁部端部に細かいキザミを巡らせる。	灰白色	密 石英・長石・クサリ礫等の微砂を含む	半面に黒斑
	8	弥生土器	器台	21.6	(1.7)	-	口縁部が大きく外反し、端部が垂下する。	内外面ヘラミガキか。垂下する口縁部端部に 4 条の凹線。	灰白色	密 最大 4mm までのチャート・石英等を含む	
SI 2	9	弥生土器	二重口縁壺	(15.9)	(5.1)	-	頸部が上方にまっすぐ立ち上がった後、口頸部が大きく外反する。口縁部は上方にさらに外反する。口縁部端部は丸く収め、外面の口頸部界に稜を持つ。	表面磨滅。内面の受部に一部強いナデ痕が残る。	にぶい橙	密 最大 4mm までのチャート・石英・長石等を含む	4 に比べ、全体に小型化している。
	10	弥生土器	鉢	(14.0)	(6.3)	-	受口状口縁である。口縁部端部はややとがり気味に納める。全体に器壁が薄く、体部最大径は上部に来る。	口縁部は内外面ともにヨコナデ。体部内・外面はヨコハケ。	橙色	密 最大 4mm までのチャート・石英・長石等を含む	全体に被熱する
SI 3	11	弥生土器	広口長頸壺	(13.2)	(5.6)	-	口縁部は外反し、端部は丸く収める。頸部は細く直上へ立ち上がる。	頸部外面にはヘラミガキがわずかに残存する。内面は磨滅が著しく、詳細は不明。	浅黄褐色	やや粗 最大 4mm までのチャート・石英・長石・クサリ礫等を含む	
	12	弥生土器	甕	-	(2.8)	(6.0)	平底の底部である。	外面はタタキ。内面・底部外面ともにナデ。	橙色	密 最大 6mm までのチャート・石英・クサリ礫等を含む	外面被熱
	13	弥生土器	鉢	-	4.6	-	丸みを持った肩部である。	外面は、頸部から肩部にかけて平行線が 5 条とその下に左上りの刺突文を 9 つ巡らせている。胴部には粗いハケ。内面はオサエとナデ。	灰白色	密 最大 4mm までのチャート・石英・長石・クサリ礫等を含む	
	14	弥生土器	鉢か	(13.0)	(5.5)	-	全体の形状は漏斗状である。器壁が薄く、口縁部端部に向けて上方へ延び、口縁部端部で細長い三角形に収まる。	全体に磨滅。	にぶい橙色	密 最大 4mm までのチャート・石英・長石等を含む	底部内面に直径 2 mm ほどの穿孔がある。焼成後に穿孔。
SI 4	15	弥生土器	壺	(14.0)	(4.3)	-	口縁部は大きく外反し、口縁部端部は外側に面を持つ。	全体に磨滅しており、残存状況はあまりよくないが内外面ともにヘラミガキとみられる痕跡が残る。	にぶい橙色	密 最大 5mm までのチャートを多く含む クサリ礫含む	
	16	弥生土器	鉢	-	(4.9)	4.0	体部は扁球状で、体部の器壁は一定である。底部はやや外開きで中央がわずかに凹む。	体部外面はハケ後ナデ。内面はナデとユビオサエ。底部と体部の境はユビオサエが顕著に残る。底部ナデ。	灰白色	密 最大 5mm までのチャート・石英・長石等を含む	
	17	弥生土器	鉢	-	5.0	-	丸みを持った肩部である。	体部外面は、頸部から肩部にかけて平行線を 5 条とその下に左上りの刺突文を 5 つめぐらせる。胴部と、体部内面はナデ。	灰白色	密 最大 4mm までのチャート・石英・長石・クサリ礫等を含む	

遺構番号	遺物番号	器種・器形		法量 (cm)			調整・成型		色調	胎土	備考
		形	種類	口径	器高	底径	形態の特徴	手法の特徴			
SI 5	18	土師器	高杯	21.2	(8.7)	-	やや丸みを帯びた杯部で、口縁は緩やかに外反する。 口縁端部は外傾し先端に向けてやや細く丸く収める。 外面にやや不明瞭だが稜をもって屈曲する。	全体磨滅。	黄橙色	密 最大5mmまでのチャート・石英・長石・クサリ礫等を含む	
SI 8	19	弥生土器	壺	(14.8)	(4.5)	-	口縁部が短く外反する。 端部は肥厚する。	内外面ともに全体磨滅。 口縁端部外面に凹線を巡らせるが上半部は欠損する。 口縁部内面のみミガキが残る。	灰白色	密 最大4mmまでのチャート・石英・長石等を含む	混入か
	20	土師器	壺	(16.0)	(7.4)	-	口縁部は大きく外反する。 口縁端部は薄くなり、とがり気味に収める。	全面ナデ。 外面の口頸部から体部にかけてタテハケがわずかに残る。	灰白色	密 最大5mmまでのチャート・石英・長石・クサリ礫等を含む	
	21	土師器	壺	-	(5.2)	4.0	体部は丸くなるものと推定される。 底部は突出し、体部よりかなり小さい。	体部外面は磨滅するが、一部にタテハケが残る。 体部内面も全体に磨滅するが、底部付近にクモの巣状のハケが残る。 底部はナデ。	淡黄色	密 石英・長石等の微砂を含む	
	22	土師器	甕	-	(21)	丸底	口縁が外上方へ開き、やや内湾する。 体部は全体に丸みを帯びて、最大径は胴部の中心付近にある。 底部は丸底で、17はやや平底に近い。	外面に細かいタタキ後肩部から下半にかけて部分的にタテハケ。 内面はヘラケズリ。	明褐色	密 石英・長石等の微砂を含む	
	23	土師器	甕	-	(26)	丸底	口縁部内外面ともナデ。 体部外面に横方向のタタキとナデ。 体部内面はナデ。下半にヘラケズリ。 底部外面はタタキ後ナデ消し。 底部内面をヘラケズリ。	浅黄色・ 灰黄褐色	密 石英・長石等の微砂を含む		
24	土師器	鉢	(13.4)	(5.4)	-	やや内湾気味の短い口縁を持ち、口縁端部はやや薄くなる。 体部最大径は肩部で、口縁よりわずかに小さい。	全体磨滅。	橙色	密 最大4mmまでの石英・長石・クサリ礫等を含む		
SK 9	25	土師器	小型丸底壺	(14.0)	(5.8)	-	外上方に大きく開いた口縁で、一旦内湾したのち、端部に近い位置で屈曲し、端部に向けて外方に細長い三角形になる。 体部は上方に最大径を持つ。 口縁部の広がりに対して体部がかなり小さい。	口縁部内外面丁寧なヨコナデ、細かいヘラミガキ。 体部外面下半丁寧なヘラケズリ。 体部内面細かいヘラミガキ。	橙色	密 精良	
SK 8	26	弥生土器	細頸壺	(9.4)	(8.1)	-	口頸部は上方でやや広がる。	外面は磨滅するが一部にヘラミガキが残る。 内面は磨滅。	浅黄褐色	密 チャート・石英・長石・クサリ礫等を含む	
	27	土師器	壺	14.8	(8.6)	-	外上方へまっすぐに伸びる直口縁で、端部はわずかに外反する。	口縁部外面は磨滅するがわずかにタテハケが残存する。 また、口縁部下半に斜めに爪痕らしき痕跡が残る。 口縁部内面全体にヨコハケを施す。 口頸部内面はエビオサエ。 体部内外面はナデ。	暗褐色	密 最大4mmまでの石英・長石・クサリ礫等を含む。 微細な金雲母や角閃石を多く含む。	SI 8 床面直上河内産のものか
	28	土師器	甕	(16.3)	(17.5)	-	口縁部は下端でしまり、外上方へ、やや内湾気味に立ちあがる。 口縁部外面の中央付近に膨らみをもつ。	口縁部内外面ヨコナデ 体部外面ハケ 体部内面は頸部よりやや下方からヘラケズリ。 体部の器壁は、24は3.5～4.0mmとやや厚く、25・26は2～2.5mmと薄い。	灰黄色	密 まれに3mm程の長石粒を含む 石英・長石・金雲母等の微砂を含む	
	29	土師器	壺	(15.6)	(15.0)	-	端部は内側に小さく肥厚する。 24が端部がやや丸く肥厚する。 25・26は端部をややとがり気味の断面三角形に肥厚する。 体部は丸みを持つ。	口縁部内外面ヨコナデ 体部外面ハケ 体部内面ヘラケズリ。	にぶい 橙色	密 まれに3mm程の長石粒を含む 石英・長石・金雲母等の微砂を含む	
	30	土師器	甕	(14.0)	(14.4)	-	口縁部は下端でしまり、少し内湾気味に外面上方に開く。 端部断面は三角形に緩やかに肥厚する。 頸部内面は丸みを帯びて緩やかに屈曲する。 体部最大径は24～26と比べやや中央寄りである。	口縁部内外面ヨコナデ。 体部外面ハケ。 体部内面ヘラケズリ。	灰黄褐色	密 まれに3mm程の長石粒を含む 石英・長石・金雲母等の微砂を含む	
	31	土師器	甕	15.6	(16.0)	-	口縁部は少し内湾し、外方に開く。 口縁部外面の中央のふくらみはわずかで、端部はややとがり気味に丸く収める。 体部最大径は中央よりやや上方である。	口縁部内外面ヨコナデ。 体部外面はタテハケ。 体部内面はヘラケズリ。	浅黄褐色	密 最大3mmまでのチャート・石英・長石・クサリ礫等を含む	他に比べ小ぶりの甕である。
	32	土師器	甕	(12.4)	(5.2)	-	口縁部は少し内湾し、外方に開く。 口縁部外面の中央のふくらみはわずかで、端部はややとがり気味に丸く収める。 体部最大径は中央よりやや上方である。	口縁部内外面ヨコナデ。 体部外面はタテハケ。 体部内面はヘラケズリ。	浅黄褐色	密 最大3mmまでのチャート・石英・長石・クサリ礫等を含む	
33	土師器	甕	(14.4)	(4.4)	-	口縁部は少し内湾し、外方に開く。 端部は内側にむけて肥厚し面を持つ。 体部は肩部が大きく開く。	口縁部内外面はヨコナデ。 体部外面はタテハケ。 体部内面はヘラケズリ。	浅黄褐色	密 最大3mmまでの石英・長石・金雲母等を含む		

遺構番号	遺物番号	器種・器形		法量 (cm)			調整・成型		色調	胎土	備考
		形	種類	口径	器高	底径	形態の特徴	手法の特徴			
SK 8	34	土師器	甕	(13.0)	(4.3)	-	口縁部は下端でしまり、少し内湾気味に外面上方に開く。端部断面は三角形に緩やかに肥厚する。頸部内面は丸みを帯びて緩やかに屈曲する。体部最大径は24～26と比バヤヤ中央寄りである。	口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ハケ。体部内面ヘラケズリ。	浅黄橙色	密 石英・長石・金雲母等の微砂を含む	やや小ぶりの甕
	35	土師器	甕	(15.0)	(5.5)	-	口縁部は少し内湾し、外方に開く。端部は内側にむけて肥厚し面を持つ。体部は肩部が大きく開く。	口縁部内外面はヨコナデ。体部外面はタテハケ。体部内面はヘラケズリ。	灰白色	密 最大3mmまでのチャート・クサリ礫・金雲母等を含む	
	36	土師器	甕	(16.0)	口縁部(5.3) 底部(6.3)	丸底	口縁部は少し内湾し、外方に開く。端部は内側にむけて肥厚し面を持つ。体部は肩部が大きく開き、底部は丸い。		にぶい橙色	密 石英・長石・金雲母等の微砂を含む	
	37	土師器	不明脚部	-	(4.5)	(10.4)	低い脚部である。脚部に孔は穿たれていない。	体部外面は磨滅するが、随所にミガキが残る。体部・脚部とも内面ナデ。	浅黄橙色	密 最大3mmまでのチャート・石英・長石・クサリ礫等を含む	体部が残存していないため、器種は不明である。
	38	土師器	高杯	-	(6.5)	-	脚柱部は裾広がり、裾部は大きく開くと推定される。	脚柱部と裾部外面タテヘラミガキ。脚柱部内面上方シボリ。裾部内面ナデ。脚柱部は裾部に向けて器壁が1.1cmから0.5cmと薄くなる。	にぶい橙色	密 3mm以下の石英・長石・チャート・クサリ礫を多く含む。	SI 8 床面直上
	39	土師器	小型高杯	(9.4)	(18.8)	-	坏部は内湾気味に立ち上がり口縁端部で直上に短く立ち上がる。脚部は外反して大きく開く。脚部の上半に円孔を穿つ。	坏部外面は磨滅するが丁寧なヘラミガキの痕が残る。坏部内面は全体に磨滅。脚部は、外面にヘラミガキを施す。脚部内面は全体細かいにヨコハケを施す。	にぶい橙色	密 精良	円孔は2か所残存する
SK 2	40	土師器	壺	(13.0)	(3.5)	-	口縁部は緩やかに外反する。口縁は端部に向けて薄くなる。	内外面ナデ	にぶい黄橙色	密 最大5mmまでの石英・長石・クサリ礫等を含む	外面煤付着混入か
	41	土師器	甕	14.8	29.0	丸底	口縁部はやや内湾して外方に広がる。口縁端部は内側に肥厚する。最大径は体部中央に位置する。底部は丸底である。	口縁部内外面ヨコナデ。体部外面はハケ。体部内面はヘラケズリ。底部内面はユビオサエ痕が残る。	灰白色	密 最大3～4mmまでの石英・長石・クサリ礫等を多く含む	外面煤付着
	42	土師器	高杯	-	(7.7)	(15.4)	脚柱部は中空である。裾部は大きく開く。	脚部外面はヘラミガキ。裾部外面はハケの上からミガキを施す。脚部内面の上部に絞り痕が残る。裾部内面はヨコナデ。	にぶい黄橙色	密 石英・長石等の微砂を含む	
SK 3	43	弥生土器	台付き甕	13.8	(25.5)	48	口縁部は外反する。最大径は底部より2/3の高さの位置にあり、全体に器形は細長い。脚台部は短く開く。	口縁部内外面ナデ。体部外面タテハケ。体部内面上方はナデ。底部付近はヘラで強くナデあげる。脚台部はナデ。脚台の器壁は体部よりやや厚い。外面に接合部有	浅黄橙色	密 最大4mmまでのチャート・石英・長石等を含む	
	44	弥生土器	高杯	(24.3)	(12.0)	-	浅い坏部。底面は平らで緩やかに外上方へ開く。口縁部はさらに大きく外反し、外上方へ延びる。口縁外面には稜を作る。脚部は途中から裾部に向かって広がり始める。裾部はさらに開くものとみられる。裾上部に円孔を穿つ(3孔)	坏部内外面は磨滅している。坏部内面にはわずかにヘラミガキとナデが残る。口縁部外面は横ヘラミガキが残る。脚部外面はミガキとナデ。脚柱部内面はシボリ痕が残る	にぶい橙色	密 最大4mmまでのチャートを主に含む	脚部中央とみられるあたりに3か所穿孔を確認。
	45	弥生土器	高杯	-	(6.2)	9.4	脚柱部が短くなる。裾は緩やかにハの字状に広がる。	脚部外面は磨滅が著しいが、わずかにミガキの痕跡が残る。脚部内面はナデ。	橙色	密 最大3mmまでのチャート・石英・長石・クサリ礫等を含む	脚部中央とみられるあたりに3か所穿孔を確認。
SX 2	46	弥生土器	鉢	10.8	7.7	6.8	口縁部はわずかに外傾しながら上方へ直立する。口縁端部はやや尖り気味に細く収める。底部は平底である。	体部外面はナデ。内面はヨコハケ後ナデ消し。体部と底部の境にユビオサエ痕。全体に器壁が0.7～1.4cmと厚い。	浅黄橙色	密 最大3mmまでのチャート・石英・長石等を含む	
SK 5	47	土師器	小型壺	(4.8)	(8.5)	-	口縁部は短く外上方へ開き、外反する。口縁端部は、やや細く収める。体部は底部を欠くが球状と推定される。最大径は体部上方で確認できる。	外面は著しく磨滅している。口縁部内面は上方をナデ、下半をハケを施す。体部内面はナデ仕上げする。	灰黄褐色	密 最大4mmまでの石英・長石等を含む	
	48	土師器	壺	(12.0)	(6.1)	-	口縁部は、やや内湾気味に外反し上方へのびる。口縁端部は細長くやや尖り気味に収める。頸部の屈曲が強く、くの字状になる。	口縁部内外面は全体に著しく磨滅するが、一部にナデとヘラミガキが残る。体部内面はナデ。	橙色	密 精良	
	49	土師器	小型丸底土器	(8.0)	9.5	丸底	口縁部は下端の接合部でしまり、わずかに屈曲し、外上方へのびる。口縁端部は、やや細く、丸く収める。体部は扁球状で、体部最大径は体部中央である。底部は丸底である。	口縁部全体ヨコナデ。体部外面上半ハケ後ナデ、下半ハケ。体部内面ナデとユビオサエ。	にぶい黄橙色	密 最大5mmまでの石英・長石・クサリ礫等を含む	

遺構番号	遺物番号	器種・器形		法量 (cm)			調整・成型		色調	胎土	備考
		形	種類	口径	器高	底径	形態の特徴	手法の特徴			
SK 5	50	土師器	小型丸底土器	8.8	9.0	丸底	口縁部は、下端の口頸部との接合部でしまり、わずかに屈曲し外上方へのびる。 口縁端部は、やや細く、丸く収める。 体部は扁球状で体部最大径は肩部である。	口縁部内外面と体部外面ナデ。 体部内面は著しく磨滅しており不明。 底部内面はユビオサエ。 底部の器壁は最大1.7cmと厚い。	黄橙色	密 最大5mmまでのチャート・クサリ礫等を含む	体部外面に黒斑
	51	土師器	小型丸底土器	(8.4)	(5.7)	-	口縁部はやや内湾気味に緩く上方へ反る。 口縁端部はやや鋭い稜を持つ。 体部最大径は張り出した肩部に位置する。	口縁部内外ともにヨコナデ。 口縁部から肩部までヨコナデ。 肩部より下半はナメハケ。 肩部内面はユビオサエが顕著に残る。	黄橙色	密 最大3mmまでのチャート・石英・長石・クサリ礫等を含む	体部外面に黒斑
	52	土師器	甕	(14.0)	(5.3)	-	口縁部は少し内湾し、外方に開く。 口縁部外面の中央のふくらみはわずかで、端部はやや尖り気味に丸く収める。	口縁部外面から体部外面にかけてヨコナデ。 口縁部内面はヨコナデ。 体部内面ヘラケズリ。	灰白色	密 クサリ礫等の微砂を含む	
	53	土師器	高杯	(20.0)	(5.4)	-	坏部である。 口縁部は大きく外反し、端部は尖り気味に細く外反する。	外面は、ヨコナデの後、全体に粗くミガキを施す。 底部は磨滅しており不明。 口縁部端部内面にヨコナデ。 内面ハケ。	橙色	密 最大4mmまでのチャート・石英・長石等を含む	49とは別個体である。
	54	土師器	高杯	-	(6.8)	(13.6)	脚柱部は裾広がりで、裾部は大きく開き端部は丸く収める。	脚柱部と裾部外面タテヘラミガキ。 脚柱部内面板ナデ。 裾部内面ナデ。 脚柱部は裾部に向けて器壁が2cmから0.6cmと薄くなる。	灰黄褐色	密 石英・長石等の微砂を含む	48とは別個体である。
55	土師器	高杯	-	(8.3)	-	脚柱部は裾が広がる。	脚部外面は磨滅しており不明。 一部にヘラミガキが残る。 脚部内面はヘラケズリ。	にぶい橙色	密 最大4mmの石英・クサリ礫等を含む		
包含層 (K 3)	56	弥生土器	底部	-	(5.8)	2.0	小さな底部である。 体部下半はやや丸みを帯びる。	外面はナデで。 底部に近い下半はユビオサエ。 内面はナデ。	灰白色	密 最大6mmまでのチャート・石英・長石等を含む	外面黒斑
	57	土師器	高杯	(20)	(4.6)	-	坏部である。 底部は平坦で、口縁部が大きく外方にのびる。 口縁端部は尖り気味に細く外反する。	内外面はナデ。 特に口縁端部はやや強いヨコナデ。	灰白色	密 チャート・石英・長石・クサリ礫等を含む	K 3区
	58	土師器	高杯	(17.2)	(6.0)	-	浅い坏部で、底部から口縁にかけて緩やかに立ち上がり、口縁中央付近で大きく外反する。 口縁端部は尖り気味に細く外反する。	内面全体はナデ。 外面は全体に磨滅しているが一部ヘラミガキが残る。	浅黄褐色	密 最大4mmまでのチャート・長石等の砂粒を含む	K 3区

第2区

遺構番号	遺物番号	器種・器形		法量 (cm)			調整・成型		色調	胎土	備考
		形	種類	口径	器高	底径	形態の特徴	手法の特徴			
第1遺構面 (下面) 包含層	71	須恵器	杯	-	(2.2)	(10.0)	高台はわずかに外方に広がる。	内外面ロクロナデ。 高台は貼り付け高台。	灰白色	密	pit1220 付近
	72	須恵器	杯	(10.6)	3.8	7.0	体部は口縁部にむけて外上方へ直線的にのびる。 高台は外方に直線的にのび、高台底の中央部が凹む。 高台は坏部下端より、やや内側につく。	内外面ロクロナデ 高台は貼り付け高台。	灰色	密	C 2 付近
	73	須恵器	杯身	(13.6)	(3.8)	-	体部は外上方へ直線的にのびる。 口縁端部は外反して丸く収める。	内外面ロクロナデ。	灰白色	やや密	A 7 付近
SK 1	74	須恵器	杯身	11.9	3.9	-	立ち上がりが矮小化し、立ち上がり先端と受部先端に差がなくなる。 底部は丸底に近い。	体部内外面ロクロナデ。 底部外面回転ヘラ切り。	灰白色	密	
	75	土師器	鉢	(20.3)	(4.7)	-	肩部から口縁部にかけて内傾する。	外面はヘラミガキか。 内面はヨコナデ。	橙色	精良	鉄鉢形か
SK 2	76	土師器	甕	(18.5)	(8.4)	-	口縁部は短く外上方へのびる。 口縁端部はつまみ上げ、面を持つ。 口縁部径と体部最大径があまり変わらない。	口縁部内外面ヨコナデ。 外面は粗いハケで、肩部から頸部にかけてナデ消す。 内面ナデ。 内面下半部にオサエ痕が残る。	灰黄褐色	やや密	
SK 6	77	土師器	皿	(15.8)	2.7	-	底部は平坦で、口縁部に向かって丸く内湾するように立ち上がる。 口縁端部は丸く収める。	口縁部内外面ナデ。 体部外面はヘラケズリ。 体部内面はハケメか。	淡赤橙色	精良	外面被熱
SK 5	78	土師器	甕	12.1	(18.5)	-	口縁部はやや内湾して外上方に広がる。 口縁端部は丸く肥厚する。 体部は球体で、最大径は体部中央にくる。	口縁部内外面ヨコナデ。 体部外面はハケメ。 体部内面はヘラケズリ。	にぶい黄褐色	やや密 3mm以下の石粒を含む	外面煤付着
第2遺構面包含層	79	弥生土器	壺	-	(2.25)	5.2	突出した小さな底部である。	外面ナデ。 内面ハケか。 底部に木ノ葉痕。	灰黄褐色	密 最大3mmまでのチャート・石英・長石等の砂粒を含む	A 7 付近
	80	弥生土器	高杯	-	(5.8)	-	脚柱部は中空である。 裾部は欠損しているが大きく開くと思われる。 脚柱部下方に円孔を3か所穿つ。	外面は縦方向にヘラミガキ。 内面はナデ。	にぶい橙色	やや密 最大2mm以下チャート・石英・長石等の砂粒を含む	円孔は2か所残存する

写 真 图 版



1. 第1区第1遺構面 全景（北から）



2. 第1区第2遺構面 全景（南から）



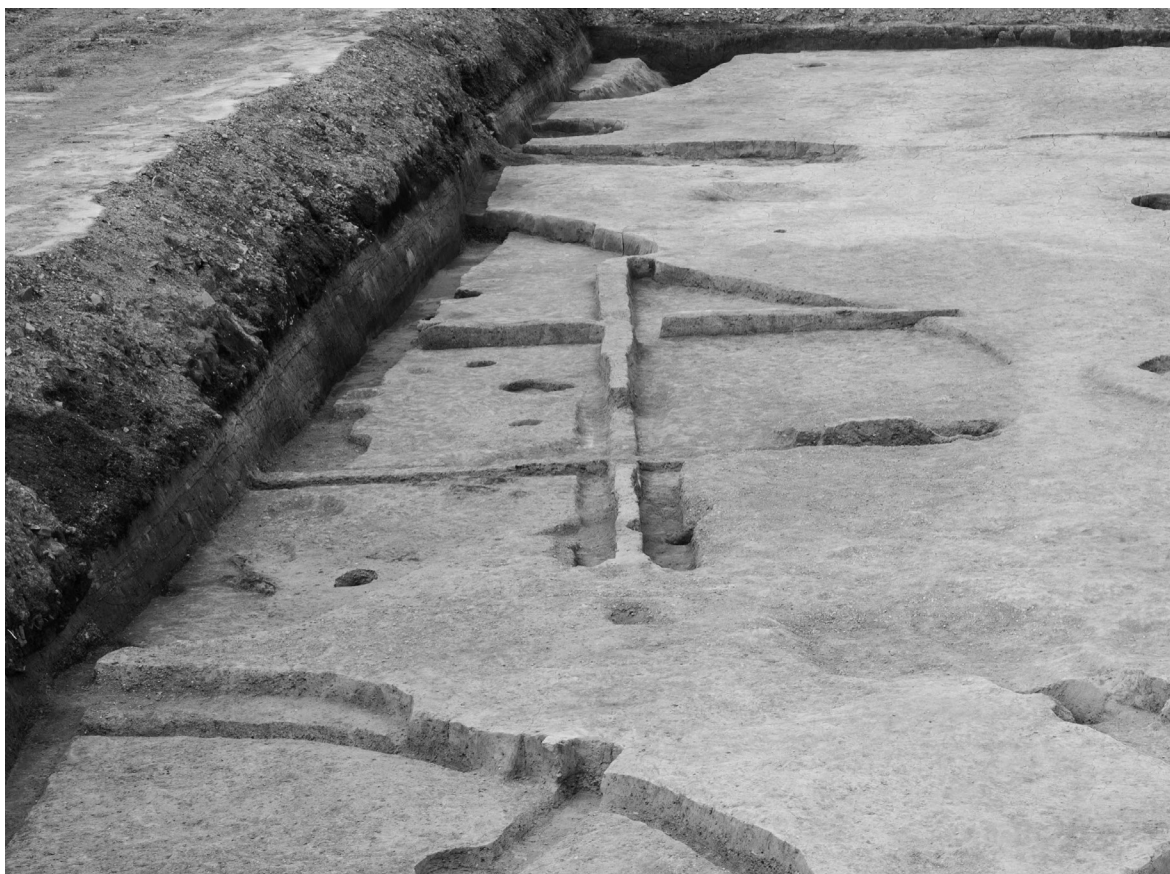
1. 第1区 SI1・2 (東南から)



2. 第1区 SI3 (西南から)



1. 第1区 SI4・5 (西から)



2. 第1区 SI4・5・6 (南から)



1. 第1区 SI7 (東から)



2. 第1区 SI8 (東南から)



1. 第1区 SK8 (東から)



2. 第1区 SK2 (北から)



1. 第1区 SK5 (東から)



2. 第1区 SK3 (南西から)



1. 第1区 SZ1 (西から)



2. 第1区 SX1 (南から)



1. 第1区 小型仿製鏡埋納ピット（東から）



2. 小型仿製鏡



1. 第2区第1遺構面（上面） 全景（南から）



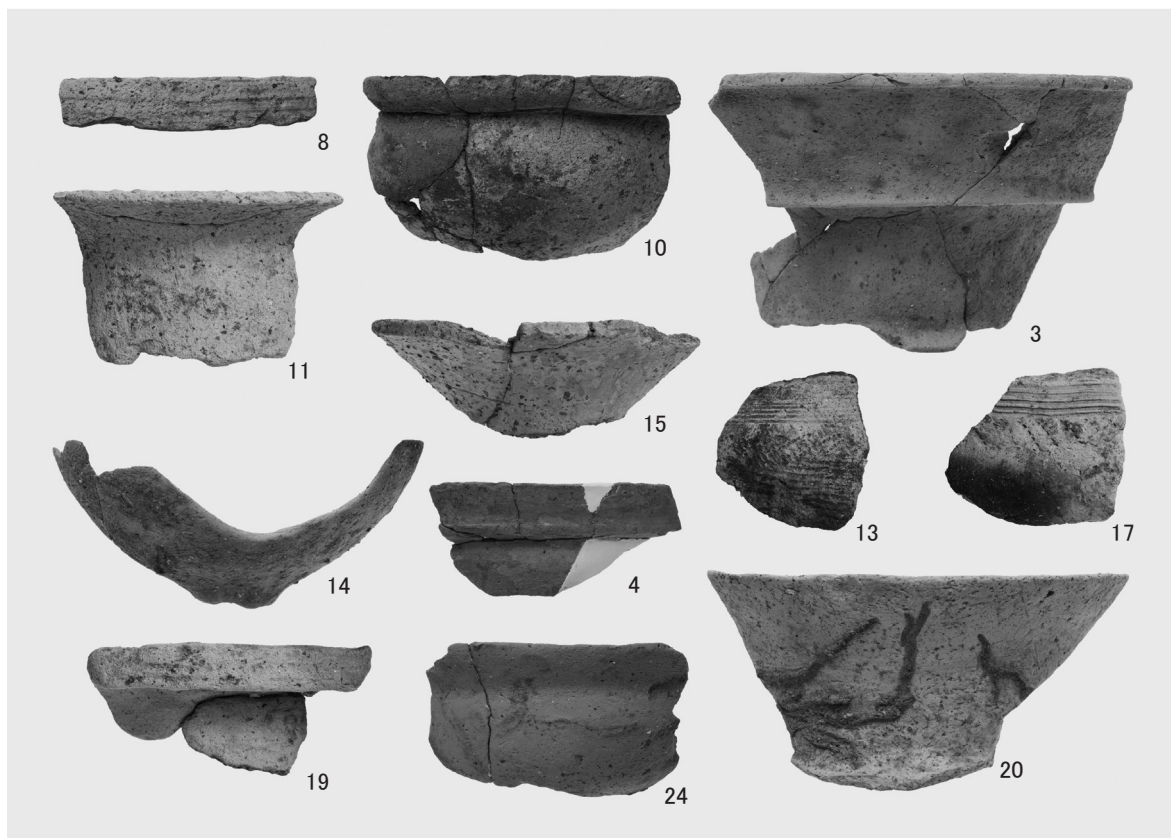
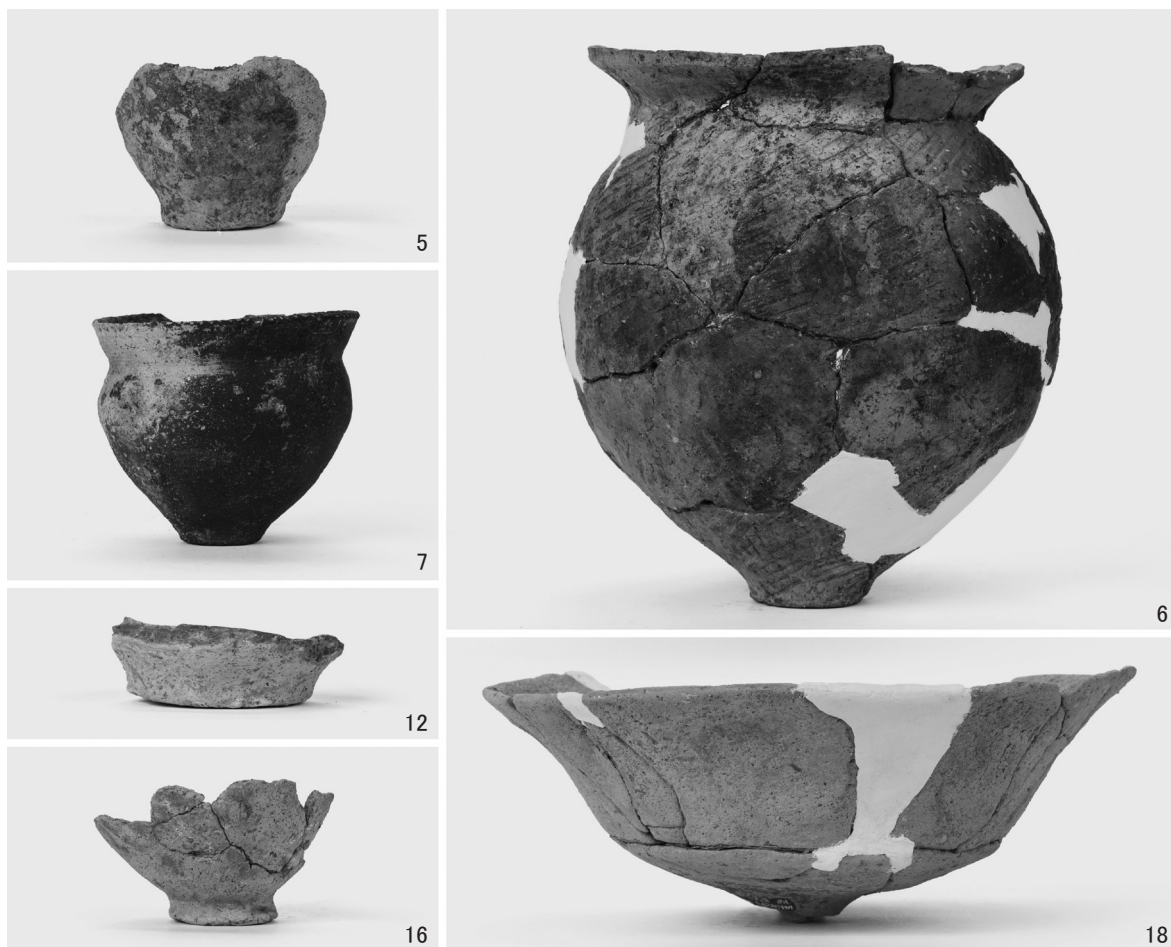
2. 第2区第1遺構面（下面） 全景（南から）



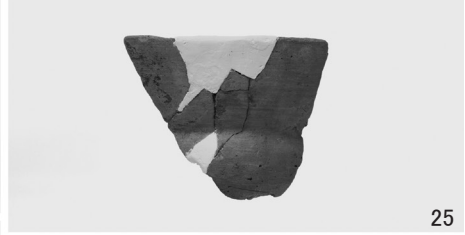
1. 第2区第2遺構面 全景（南から）



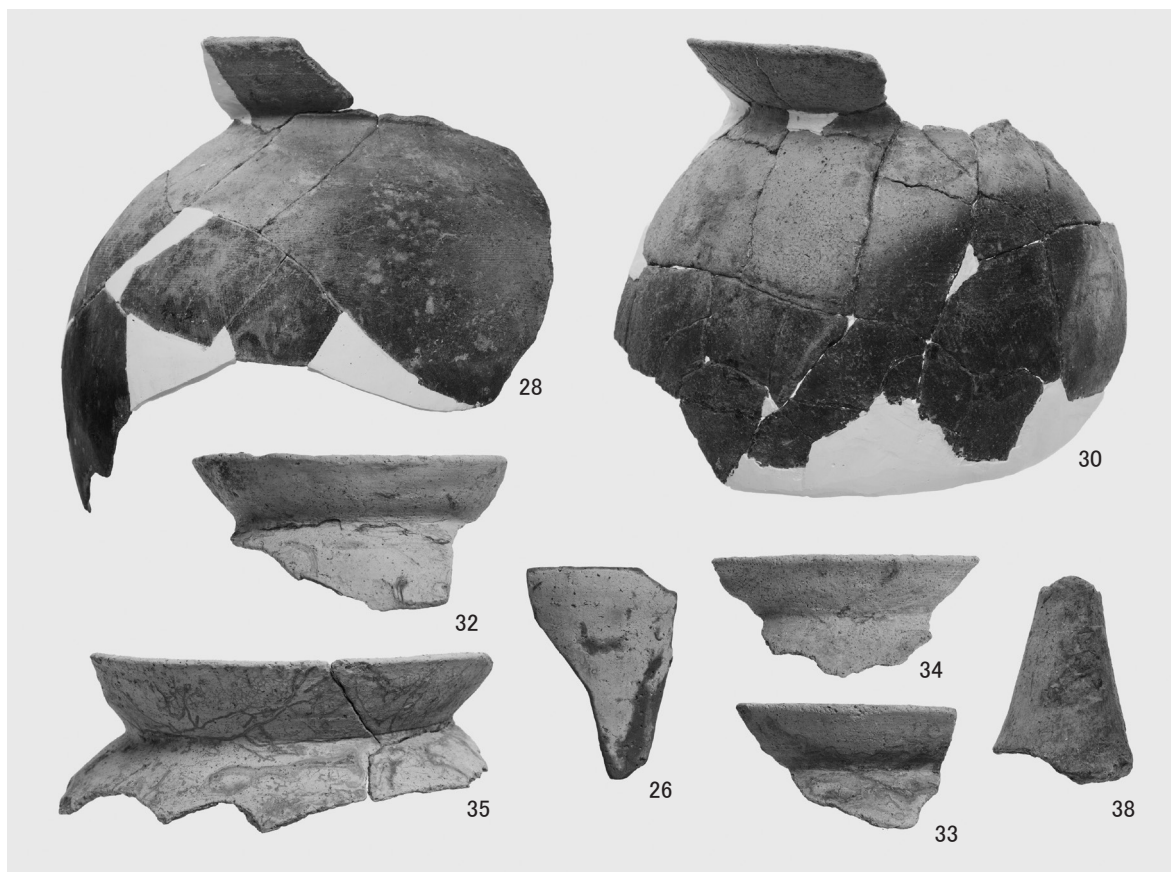
2. 第2区 SK5遺物出土状況（北から）



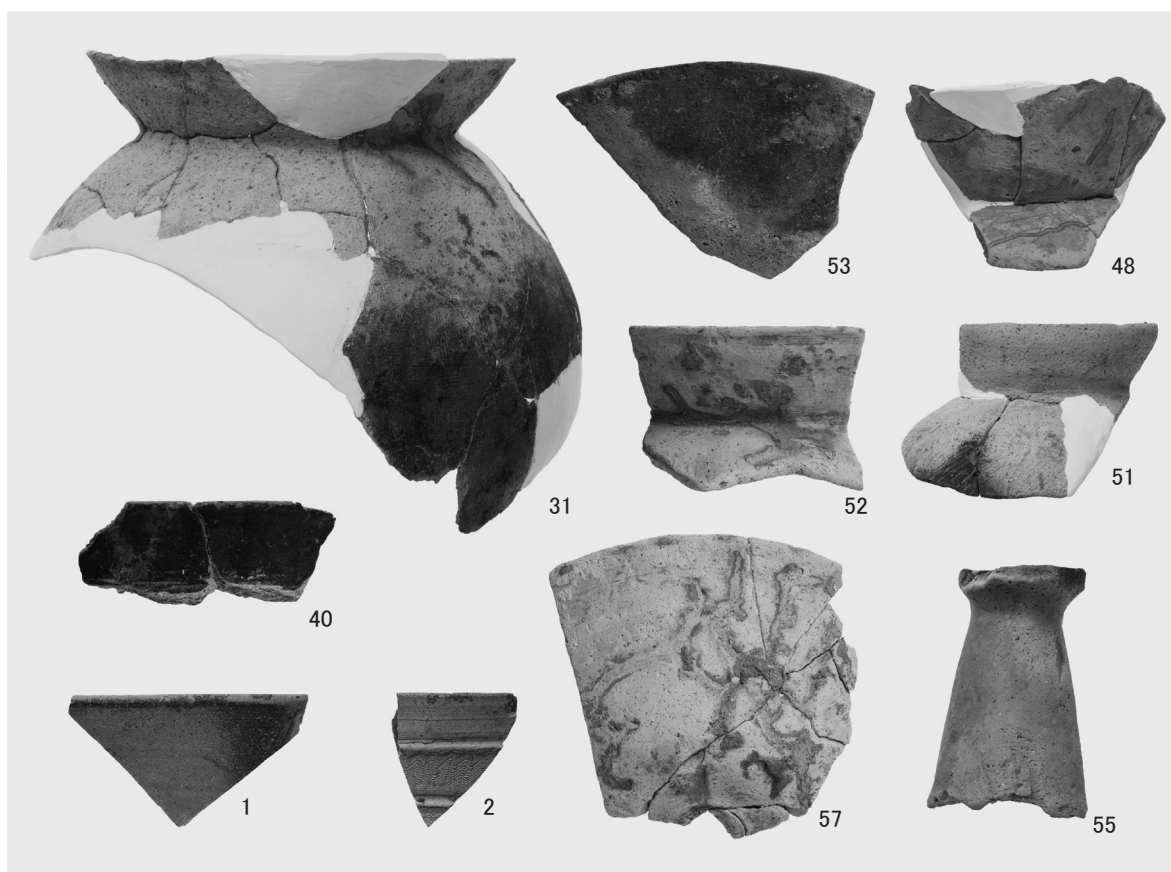
1. 出土遺物 1



1. 出土遺物 2



1. 出土遺物 3



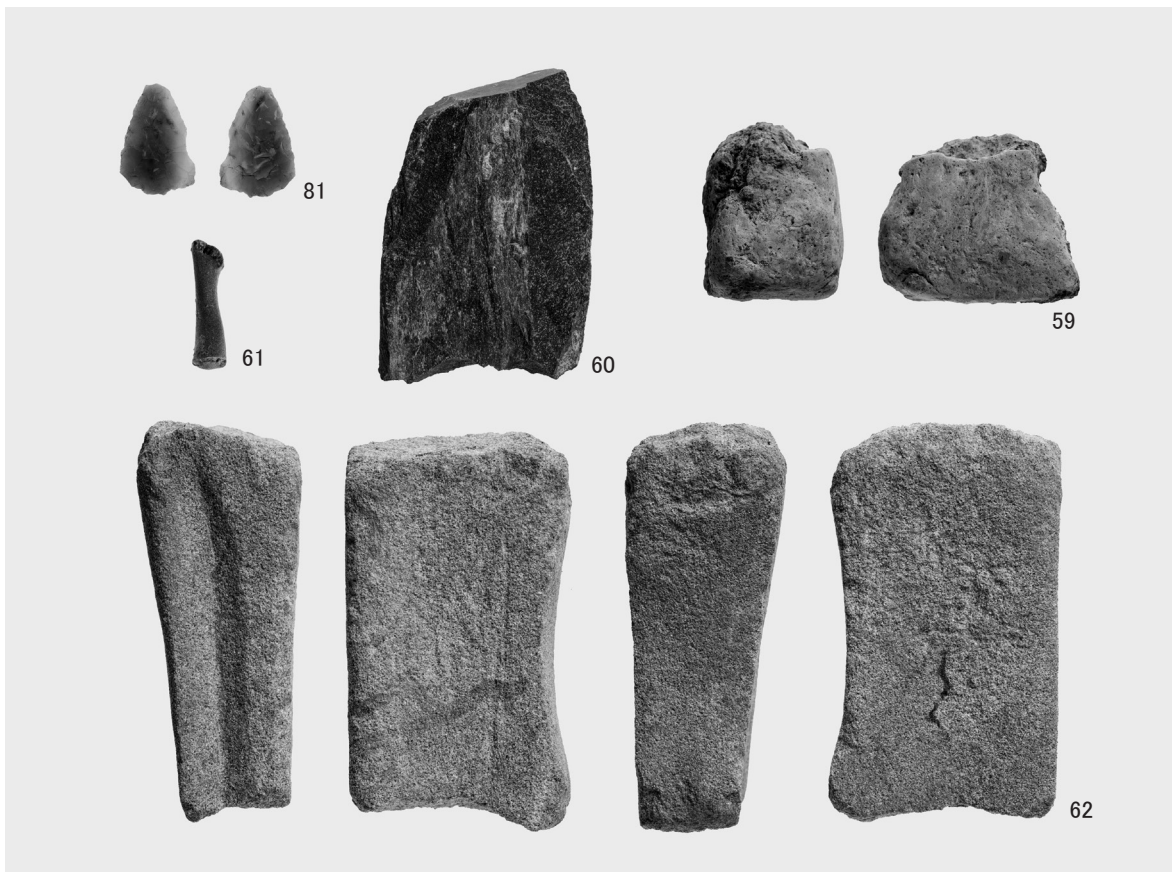
2. 出土遺物 4



1. 出土遺物 5



1. 出土遺物 6



1. 出土石製品



2. 出土木製品

報告書抄録

ふりがな	ながおかきょうあと・おおやぶいせき
書名	長岡京跡・大藪遺跡
副書名	工場建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
シリーズ名	イビソク京都市内遺跡調査報告
シリーズ番号	第13輯
編著者名	兼康保明・熊谷洋一・石井明日香・樋口杏奈・須山貴史・大上詩織
編集機関	株式会社イビソク関西支店
所在地	〒612-8425 京都府京都市伏見区竹田田中殿町8番地 TEL 075-632-8109
発行年月日	2016年9月

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
ながおかきょうあと 長岡京跡・ おおやぶいせき 大藪遺跡	きょうと しのみなく 京都市南区 くぜのしろちよう 久世殿城町 555 ばんち 番地・ くぜ おおやぶちよう 久世大藪町 ばんち 358 番地	26107	3・773	34° 57' 12"	135° 43' 6"	20150420) 20150820	1170.5 m ²	工場 建設

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
長岡京跡・ 大藪遺跡	都城跡 集落跡	長岡京期～中世	溝・土壇	土師器・須恵器・石製品	
		弥生時代～ 古墳時代	竪穴建物・方形 周溝墓・土坑・ ピット・杭列	弥生土器・土師器・土 製品・石製品・木製品・ 小型仿製鏡	
要約	調査区を2区に分け、共に、第1遺構面で中世（一部近世）、第2遺構面で弥生時代～古墳時代の遺構・遺物を確認した。第1遺構面では、主に長岡京期の土坑や溝、包含層、中世の溝などを確認した。中世と思われる遺構は1区の溝をはじめ、2区を東西南北に貫く格子状の溝や土坑などがあげられる。第2遺構面では弥生時代から古墳時代にかけての竪穴建物や土坑、ピットを検出した。特筆事項として、祭祀遺構と思われる遺構も確認した。遺物としては弥生土器や土師器のほか、特殊遺物として小型仿製鏡や土製支脚が出土した。				

長岡京跡・大藪遺跡

—工場建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—

発行日 2016年9月

編集
発行 株式会社イビソク関西支店

住所 京都府京都市伏見区竹田田中殿町8番地
〒612-8425 TEL 075-632-8109

印刷 富士出版印刷株式会社